

ビュルヌーフの 法華經研究の学史的周辺

—近代印度学仏教学の最初期を飾る人々^{*}—

湯 山 明

はじめに

本稿では、近代インド学・仏教学の祖ともいべきビュルヌーフについて、彼の業績の一端を、その書簡集などを頼りに垣間見てみようとするものである。しかし手紙の類は、往きがあっても復りがなければ、あるいはその後の往復を見なければ、ほんとうに全貌が掴めるわけではない。しかも、資料の蒐集は、本来ならば足を使って未刊のものまで探索する必要があることは言うまでもない。しかし現実にはなかなか実行できない相談である。つまり、筆者の入手しえた範囲の資料のみで冒険的に筆を進める羽目になる。

さて、ビュルヌーフの書簡とか、他の学者に関する資料などと、いとも簡単なように述べたが、ビュルヌーフの手紙類がすべて我々の目の前に、うまく御膳だてされて出揃っているわけではない。他の学者の書簡集にも、探索の手を伸ばさねばならないこともある。また、書簡だけが研究史の「研究」資料であるはずもない。これは誠に困難な作業である。

さらには、元来、西洋史の素養もないうえに、フランスへ留学・滞留の経験のない私には知らない事があまりにも夥しすぎる。その語学力にいたっては我ながら思うにまかせず、非常にもどかしい。まことにもって厚顔無恥の誹りを免れるとは思えない。しかも、いかなる外国語からでも邦訳することには全く自信がなく、翻訳不可能論者とさえ自認する私としては、要旨だけはきちんと伝えて真意は読者に原文で味わって戴きたいと願い、しかし紙幅を惜しんで資料の触りの部分だけを抜粋して注に回した。読者の御理解を得ておきたい。

また、一つの話からさらにあちらこちらへと話題を飛ばし、大いに横道に逸れてしまうことになろう。支線を走り始めるといつ本線に辿り着くか分からない。主要駅に停車するのを忘れてしまうこともあろう。使いに出した子が道草を食んで、一向に家に戻らないという気分させられると覚悟を決めていただきたい。しかも、恐らく肝心の研究の内容についてついぞ触れることがなかったりもしよう。そこでまず、私は賢明な読者の御寛恕をも乞うておきたい。

なお、本稿の本文末に掲載の図版もあわせて参照していただければ幸いである。

近代仏教学の祖ビュルヌーフ

印度学仏教学の研究史を飾る人々の中から、近代仏教学の祖ともいうべきビュルヌーフ(Eugène Burnouf 12, VIII. 1801-28. V. 1852)をとりあげて、しかも出来るだけ彼の法華経の翻訳に限って、その弛みない努力の跡を、その学問的周辺を探りながら辿ってみたい。

ビュルヌーフは、あの短い生涯の内に、あれ程の業績をあげながら、病弱の晩年は別にして、かなり旅の人でもあったようだ。フランスを出たことは実は2度だけなのであるから、回数からすれば当時としてもあるいは少ない方だったかも知れない。しかし50歳で世を去った彼が、旅から得るものを、時間を惜しみながら追い求めていたように思えてならない。その2度の外国行とは、1834年夏のドイツへの旅と、その翌年春のイギリスはロンドンとオックスフォードへの旅とである。ドイツへの旅行では、特にボンでシュレーゲルとラッセンに会うことが楽しみであったろう。シュレーゲルは、1814年にパリでビュルヌーフの前任者シェゾィから梵語を学んだ。ラッセンは、シュレーゲルからパリへ中期印度語を学ぶために送られて、ビュルヌーフと親交を深めた人である。オックスフォードでは、初代の梵語学担当教授になったウィルソンとの交流もあった。

またビュルヌーフは、だいたいにして決して健康に恵まれた人ではなかったが、彼は驚くことに、今流の言葉を借りれば“書き魔”ともいうべき人であった。旅先から認めた書簡も多く、寸暇を惜しんでは筆を執っていたとしか思えない。彼の遺してくれた多くの書簡は、研究史上の極めて貴重な資料である訳である。

いろいろな学問の専門領域でときに飛躍的な発展が見られることは、研究史の上からもしばしば知るところである。学問の歴史を飾る人々が、大きな学術的転換(あるいは展開)を見せることがある。研究史に目を向ける時に、それら学者の書簡から、その飛躍的転換の事実を探り知ることがあるのである。誠に興味深い。ビュルヌーフの書簡集から、彼の法華経研究の業績を中心にした資料を渉猟しつつ、その背景を他の学者に関する資料からも、裏づけをしてみたい。学問は、たとえ天賦の才能に恵まれていようとも、一人して成り立つものではない。学問のうえでの必然的発展がある。学史を探る興味はそこにあるともいえる。しかし、われわれ他人の手紙を読む側に、ある種の覗き見の罪悪感を覚えることも否定できない。これは、確かに心しなければならぬことであろう。趣味の悪い噂話の種にするようなことが、決してあってはならない。

ビュルヌーフの蔵書目録

「蔵書目録」というと聞こえは良いが、実は彼の死後すぐに競売に付された蔵書の目録なのである。ビュルヌーフが1825年5月28日に逝去してその翌々年、つまり1854年12月には、彼の蔵書がいわば競売にかけられた。研究者の困苦の賜物として蒐集された書物も、この世を去れ

ば悲しい運命の待つことが多い。残念ながら、彼の蔵書もそうであった。しかし、その競売のための目録は、今とってみるとビュルヌーフの学問的関心を知るうえでの極めて重要な資料¹⁾であることも否めない。この競売目録が、非常に注意深く作成されているからにはほかならない。表題頁には、若きビュルヌーフが名声をほしいままにした肩書きが、その名の後に林立して並んでいる。

その競売目録には、刊本が2730点、写本類が218点。それらは1854年12月5日の火曜日から23日の土曜日まで、日曜日を除いて17日間、毎晩正7時から競売に付された。彼自身の著書も、当然のように売りにだされている。それらは今どこに散在してしまっているのだろう。われわれにとって貴重な梵語写本類は、あとでも触れるように、幸いにも納められるべき所に行き着いているようである。²⁾

ラングレースの蔵書目録のことなど

突如として、あまり聞き慣れない人名が現れたと思う向きもあろう。ビュルヌーフの蔵書目録に関連して、この種の蔵書目録で興味深いものがあるので、紹介しておきたいこともあるが、彼の果たした役割が、学史上種々の面で見捨てられないからである。

まずは、日本で俗に、パリの東洋語学校と称されるものについて触れておきたい。何故かという、フランスの学界は、その植民地政策などの政治的理由があったにせよ、生きた現代(同時代)語にも学術的に強い関心を示していたことである。古典研究をのみ高度の「学問」とし、現代研究を「実学」として低次のものとしてきた風潮の国々との違いであろう。そのために、フランスでは古くから現代語研究・教授の機関を設置すべきとの議論があった。18世紀後半の著名な東洋学者たちの参画が、いまだに我々の目を強烈に惹きつける。1796年に創立(厳密にいうと、1795年3月30日の法令で創設は決定)をみる東洋現代語専門学校(École Spéciale des Langues Orientales Vivantes)である。のちに何度か、その名称を変えている。

ラングレース(Louis-Mathieu Langlès: 23. VIII. 1763-28. I. 1824)は、その創設に力を尽くした一人である。さらに初代学長(administrateur)となり、しかもペルシャ語講座の創設教授となった。この世から逝去するまでその地位にあった。その頃、東洋語学校は「王立」の語も冠せられた(École Royale et Spéciale des Langues Orientales Vivantes)。幸いに、この東洋語学校については創立150周年を記念して史的に回顧した大冊がある。³⁾

彼の死後その蔵書が売りに出された。途中に休日を入れながら、競売は1825年3月24日から30日まで行われた。この時は、各々の書物に値段表が付された。ヨーロッパの古書競売のときに、大体の目安になる値段表が予め配布されることがよくある。古書籍商の手を経て店頭に出れば、今度はもう手が届かなくなるとして、素人(学者)が玄人(古書籍商)と競り争うという場面も、よく目にする光景である。殺気に満ちた学者の執念が感じられる。最近では、こう

いう機会が稀になってきたのは残念である。こうして折角手に入れた書物にはまた特別の愛着があって、参照する度に往時を思いだすものである。

さて、この競売目録には、書籍の頁数を欠くなど書誌学的に万全とは言えないながらも、彼自身の著作目録もあり、さらに極めて簡略ながら伝記もあり、念入りに作成されたものであることに疑いない⁴⁾。因みに、彼は当時の王立図書館写本部長を兼任していたことがある。ビュルヌーフ父子とて、この知識の宝庫の競売場に足を運んでいたかもしれない。

ラングレースは、インドにも強い関心があったようで、貴重な資料を二巻の大著として出版している⁵⁾。ラングレースをインドに魅惑したのは、後でも触れる英国人ハミルトンが、ちょうど王立図書館に梵語写本の調査のために来訪していたことと無関係ではあるまい。1802年から翌年頃にかけてのことらしい。この二人が協同して作製した「帝立図書館」（ここの名称が政治とともに変わる）の、インド系写本類の目録がある。恥ずかしいことに、筆者の怠慢のゆえ、長い間、数多くある幻の未見の稀覯書の一冊であった。いうまでもなく、パリの国立図書館に所蔵されているので（Catalogue No: 8°/Imp. Or./9135）、仏教文献には関係がないが、学問の歴史のうえで重要であるので少し詳しく注記しておこう⁶⁾。

なお、ラングレースには、9世紀中葉インドから漢土に旅をしたアラビア人の貴重な記録（西暦851年）を、すでに1811年に編纂していた。残念ながら不完全な写本で、冒頭の部分が欠けていて原著者を知る由もないし、また記述も非常に簡略であるが、セイロンから中央アジア・中国に話題は及び、9世紀のインドと中国の関係史を知るうえで、きわめて興味深い典籍を学界に紹介し、裨益している事実を書き加えておきたい。しかし日の目を見たのは、彼の死後20年余してからである⁷⁾。さらに本書を詳しく慎重に記したのは、内外の研究資料・成果にも通じながら、残念なことに若くして夭折した逸材ソーヴァジェ（Jean Sauvaget: 26. I. 1901-5. III. 1950）の面目躍如たるものがあるからにはほかならない。きわめて有益な書誌解題と序論がある。

ビュルヌーフは、しかし、古代イラン・インド学には非常な関心を示したが、現代語を中核とする東洋語学校では活躍の場はあまりなかったように思う。東洋語学校の二代目学長には、東洋学界の大立物として後の男爵の位階を授けられたドゥ・サン教授（Antoine Isaac Silvestre de Sacy: 21. IX. 1758-21. II. 1838）が継ぎ、死去するまでその地位にあった。ドイツの東洋学界に与えた影響など、ヨーロッパの東洋学史の上で記憶すべき人物であろう。

ビュルヌーフの遺した文書・書簡類

ビュルヌーフは、誠に驚くべき量の文書を残している。溜息が出るほどである。最初の書簡集は、極めて入念・精緻な編集に成る⁸⁾。それは学史研究上、不可欠の資料である。かなり私的な書簡も見られる。旅先などから夫人に長文の手紙を送ることも度々であった。

因みに、夫人は父親・ジャン・ルイ (Jean-Louis Burnouf: 14. IX. 1775-8. V. 1844) の親友・ポワレ (Nicolas-Christophe Poiret: 1777-1866) の娘である。二人の友人の子たち、つまりユージェーヌ・ビュルヌーフとレーヌ・ヴィクトワール・アンジェリーク・ポワレ (Reine-Victoire-Angelique Poiret) は、1826年9月25日に結婚している。ユージェーヌは、ジャン・ルイの一人息子である。新婦は、24歳であった。この事実も、本書の494頁から次頁にかけて詳しい。

色々と探索すれば、他の人々の書簡集などにビュルヌーフの手紙などを見出すことも出来ようが、⁹⁾ いうは易く簡単なことではない。確かに、書簡といえ、その後、手紙を含む彼の文書類集も出ている。これもまた極めて重要な資料であり、さすがにフランス東洋学の伝統を正しく継ぐフェール (Henri Léon Feer: 22. XI. 1830-10. III. 1902) の手に成るだけのものである。編者は、1869年からコレージュ・ドゥ・フランスの蔵蒙両語担当教授であり、また1872年からは国立図書館写本部に移り、東洋諸言語に通暁した力を思う存分に発揮した。彼自身の成し遂げた仕事も、後にもその一端を見るように、梵巴蔵語の仏教文献学にとって記録すべきものが多い。¹⁰⁾

筆者は、伝記を書くのが目的ではない。将来その方面に手を染める人が出るならば、パリの国立図書館写本部(西洋部)に保管される書簡や封筒などが、重要な資料となろう。封筒の宛名から住居を知ることできる。例えば1830年頃は、医学校広場13番地 (13, place de l'École de Medecine) が住処であることも判る。

新人文主義の時代——梵語学の都パリ

ビュルヌーフの生い立ち・学問・業績については、深く触れる余裕が今はない。しかし私には、彼が人間共有の文化遺産としての仏教を、つねに人文主義的な文化学として、飽くことなく構築しようとした学者であったように見える。これこそが、フランス東洋学の底に強く根づいている伝統であると思う。イギリスやドイツの学問の方法にも素直に反応し、影響を受けながら、独自の学統を築き、その学灯が守られてきた由縁であろう。

さて、19世紀初頭のヨーロッパで梵語を学習することは、容易なことではなかった。当時のパリは、とくに大陸部ヨーロッパで梵語を学ぶ者にとって、その中心であった。梵語学の華の都であった。しかしまた、それは高嶺の花であったことも確かである。また、パリは梵語文献資料の宝庫でもあった。とくに国立図書館は世代を重ねて貴重な梵語資料を蒐集していた。しかし、19世紀の最初期には「仏教」梵語文献にはまだ手が届いていなかった。幸いに、定方晟がこの辺の事情について、簡にして要を得た格好の紹介をしてくれている。関心を持つ学徒の必見の論稿である。¹¹⁾

ハミルトンとラングレースの仕事については、先にも少し触れた(註6)参照。仏教梵語文献

の入庫は、ハミルトンの目録出版からちょうど30年後のことになる。パリの国立図書館所蔵の写本類に関しては、まずはカバトンが、広範囲の資料を整理して存在を内外に知らしめた功績は認めるべきであろう。¹²⁾ しかしのちに、フィリオザが完璧なまでの仏教梵語文献の写本日録を製作してくれているので、いまは後者に依って仕事をなすべきであることはいうまでもない。¹³⁾

印欧語比較文法学の祖と仰がれるポップ (Franz Bopp: 14. IX. 1791-23. X. 1867) も、逸早くパリに赴く。1812年のことである。しかし師匠にうまく巡り会えず、梵語を独りで学ぶ羽目になる。そうしたなかで、彼は有名なシュレーゲル兄弟の兄ヴィルヘルム (August Wilhelm von Schlegel: 5. IX. 1767-12. V. 1845) と遭遇する。シュレーゲル兄は、ポップによって梵語学への眼を開くことになる。

パリに師を得ぬ傷心のポップは、ロンドンに希望を託して、1818年に海を渡る。何といてもイギリスには、植民地インドを舞台に活躍した学究の業績がすでに光っていた。名のある人のなかには、コールブルック (Henry Thomas Colebrooke: 1765-1837)、ウィルキンス (Charles Wilkins: 1749-1836)、ウィルソン (Horace Hayman Wilson: 1786-1860) などがある。夙に活躍し、ターナー (George Turnour: 1797-1843) やプリンセップ (James Prinsep: 1800-1840) などが頭角を現わさんとしていた時代でもあった。

カルカッタのベンガル・アジア協会の活動も目覚ましい。最近になって、ジョーンズ、コールブルック、ウィルソン、プリンセップの四人を、それぞれが果たした役割を核にしなが、アジア協会の初期の活動を描いた興味深い一書が現れた。¹⁴⁾

ところで、コールブルックは、仏教学徒には余り馴染みがないが、彼の業績が西欧の印度学者に与えた影響は大きいと思うので、無視できない。コールブルックの父 (Sir George Colebrooke) が東インド会社の重役にあった関係から、コールブルック子 (15. VI. 1765-10. III. 1837) もまた、イギリスのインド植民地支配に力を貸した一人ではある。優れた行政官として、またウイリアム砦大学教授として、インドで1782年から1814年までの長きにわたって活躍した。コールブルックが、インド法の研究を現地で行った行政官であったことが伺えるのも面白い。つまりこの分野での先駆者で、若くしてカルカッタに夭折したジョーンズ卿の未完成の仕事の後継者でもあったといえよう。紙数に限りがあるので、この点も含めて彼の生涯・業績に関する若干の参考文献を、補注として紹介しておこう (補注一)。

さて、たまたまプロシヤ帝国の公使として英都ロンドンに在ったフンボルト兄弟の兄ヴィルヘルム (Karl Wilhelm von Humboldt: 22. VI. 1767-8. IV. 1835) も、後輩のポップから梵語を学ぶとともに、両者は人文主義的交流を遺憾なく行なう。¹⁵⁾ これが契機で、ベルリン大学にポップが初代教授として赴任することとなるのである。ここにポップについて少し長く取り上げたのは、ただ単に、彼の印欧語比較文法学とか梵語学研究的学的评价をするためだけではない。ピュルヌーフが、その学問的形成のうえで古代イラン学を中心にした研究に相当な精力を

注いでいたことと、ポップが無関係ではないからである。後に触れるように、ポップとビュルヌーフとの往復書簡には、専ら上記の研究に関するものばかりで、仏教の言語・文化については全く関知する所がないといっても過言ではない。しかし私は、その学問的背景を知って初めて、ビュルヌーフの仏教文献学を理解できるものと信じている。とはいえ、ポップについてあまり紙数を割くのは、ここで均衡を欠くと思うので、あとに補注として、二三の彼に関する重要な労作を挙げておき、学問の歴史のうえからは意義深いものが多いが、稀観書の一覧表のようなものを作成するのは止めたい（補注二）。

ところで、いろいろの人とヴィルヘルム・シュレーゲルが交わした書簡集がある。本書に見られる限り、ビュルヌーフに関して言及はされているが、残念なことに文通の跡が見られない。¹⁶⁾シュレーゲル兄ヴィルヘルムに宛てたビュルヌーフからの書簡は、後者の書簡集補遺に、まとめて12通（1827-1839）が収録されている。¹⁷⁾その中で、ビュルヌーフは、全く仏典について触れていないと言ってよい。しかし、最後に挙げられた長文の書簡（1839年4月17日付）の終わり辺で、恐らく法華經の翻訳についてのものと想わせる記述がある。¹⁸⁾ビュルヌーフが法華經の仏訳に悪戦苦闘している最中であることを知れば、この手紙の意味するところが読みとれよう。彼はこの年の11月29日付のホジソン宛の書簡に、法華經翻訳の完成を知らせている（v. “*Papiers Burnouf*”, p. 169）。

ビュルヌーフ父子とポップ

ベルリン大学で西洋古典学の分野で博士号を得たのち、印度学仏教学に強い関心を移し、ラリタヴィスタラの独訳・原典の校訂出版で我々にも親しいレフマン（Salomon Lefmann: 25. XII. 1831-14. I. 1912）が、ハイデルベルクで教鞭をとる傍ら、幸いにも大部なポップの詳しい伝記3巻を書き残してくれている。¹⁹⁾

この書の第1巻末の書簡集の5点が、ポップとビュルヌーフ父子との文通である。²⁰⁾ポップも堪能なフランス語で書いているが、相手にいつも「ムッシュ」と呼びかけるだけなので、年代や内容をよく吟味しないと、父宛てなのか、子宛てなのか、定かでないことがある。丁重な遣り取りであるが、かなり親しい間柄であったように思われる。若き秀才ユーージェーヌのことも、よく承知していたのであろう。しかし、いつも「貴方のご子息」であってユーージェーヌと本名を出さない。この書簡集の第1は、ポップがミュンヘンから、1820年9月25日付に出したものであるが、その文面からもこのことが伺われる。ユーージェーヌ19歳の秋である。²¹⁾

ビュルヌーフ子の色々の方面での活躍は、さすがにポップを惹きつけたに相違ない。学問的交流はますます深まって行く。1825年1月20日付の書簡にその片鱗を伺えよう。²²⁾

ビュルヌーフ父宛の手紙にも段々と子息のことが頻繁に登場して来るようになる。彼の梵語の学力を高く評価してその論著の公刊を常に促す。たとえば、同年11月6日のロンドンからの

書簡にそれを明言する。²³⁾この書簡に対して、父親がその言い訳を含めて、ユージェーヌに直ちに返事を認めさせたのが、ポップへの最初の手紙であったようである(1825年11月14日付)。勘繰るわけではないが、父が子に印欧語比較文学の大家にこうして近づけようとした親心の²⁴⁾ように、私には思えてならない。

ポップは、ロンドンから、1か月後の遅い返事を詫びて、12月18日付でユージェーヌに宛てて筆を執る。以後、もっぱらポップとビュルヌーフ子との文通に替わるのである。ビュルヌーフは直ちに返事を書く(1825年12月18日付)。その追伸に、父親のあいさつに加えて、ポップの「文法」を鶴首して待っていることを伝える。²⁵⁾そして、ポップも「父君に宜しく」²⁶⁾に変わる。因みに、ビュルヌーフ父は1844年没、ポップは1867年没である。いずれにしても、何とも残念なことは、この両碩学がパリ語文献所用の文字について若干触れることはあるが、パリ語学や仏教梵語学・仏教文献学に関しては、全く触れる所がないということである。

ビュルヌーフとマックス・ミュラー

ここでもう一つの話に、紙数が嵩みすぎるが、ほんの少しだけ触れておきたい。日本の印度学仏教学史の上で忘れることのできない人物、マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller: 6. XII. 1823-28. X. 1900)についてである。わが国では、余りにも仏教学者としての令名が高すぎると思う。

彼の活躍は多方面に互り、枚挙に暇がないが、ベルリン大学でポップに梵語学・比較言語学を、またヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel: 27. VIII. 1770-14. XI. 1831)の死後10年も空席になっていた哲学講座を担当することになったシェリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling: 21. I. 1775-20. VIII. 1854)にも師事する機会を得ている。しかしミュラーは、どうしてもさらに梵語学の深奥を究めたかった。とある契機でミュラーはパリに赴くことになる。彼のパリ滞留は、1845年3月から翌年の6月までである。その留学については、²⁷⁾彼が自伝に極めて興味深く書きとどめている。自分の逸話まで晒け出して素顔を見せてくれる。

王立図書館に通ってカータカ・ウパニシャッドの諸写本を校合したりするうちに、自分で得意ではないと思うフランス語に精を出し、何とかして尊敬してやまないビュルヌーフに会わねばならないと気は焦る。しかし、近づく術がない。蛮勇を奮って、ビュルヌーフを訪ねる。その時の印象を、「本当にフランスの学者の素晴らしい見本」とまで称えている。²⁸⁾哲学に関心の深いミュラーにとっては、ウパニシャッドこそ最重要の文献であった。ビュルヌーフは、ヴェーダ文献の重要性を若き学徒に論し教える。パリからイギリスへ渡り、その後35年してリグ・ヴェーダ第1巻の刊行を見る原典研究の基礎は、まさしくパリでのビュルヌーフとの邂逅にあるといえよう。

先にも述べたように、本来ビュルヌーフの関心は、専ら古代イラン・インド学にあったので

ある。いわば、当時の西欧の学界の風潮ではあった。彼の同国人でインドを遍歴して、殊にベルシャ語に強い関心を示し、アヴェスタの原典・翻訳出版や、ウパニシャッドを梵語からではなく、わざわざベルシャ語から翻訳して、とくに後者がショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer: 22. II. 1788-21. IX. 1860) の哲学思想に大きな影響を与えたことでも有名なアンクティル・デュペロン (Abraham Hyacinthe Anquetil-Duperron: 7. XII. 1731-17. I. 1805) などのいたことも、決して無関係ではなかったろう。ウパニシャッドに非常に関心を持っていたミュラーも、こうしてみるとすでに学問的な縁者であったともいえる。

何はともあれ、ミュラーのパリ滞在の日々は、実はビュルヌーフが势力的に法華經の訳註を書いていた時である。しかしミュラーにはまだ仏教に深い関心を寄せる暇がなかったのであろうか、彼の自伝のパリ時代の章に全く触れる所がない。パリ語もベルリンで修めていたのに、ビュルヌーフとパリ語学・文献学について談論するくだりがない。

ミュラーは、パリで多くの学友を得る。彼が仏教に関心を抱くようになるのは、そのパリでスタニスラス・ジュリアン (Stannislus [*alias* Noël] Julien: 20. IX. 1799-14. II. 1837) との²⁹⁾ 遭遇が始まるというのも、まことに面白い。1857年のことである。しかし、ミュラーが仏教梵語文献にほんとうに強い関心を示すようになるのは、わが笠原研寿・南条文雄の二人の到着にあるのではないだろうか。1879年のことである。後の南条の自伝では、³⁰⁾ ロンドンからオックスフォードへ移ることになったのは、その年の2月27日のこととある。後に、³¹⁾ ミュラーが、東アジア仏典に重要性を見るのも、実は彼のパリ留学で得た経験にあるのかもしれない。

ハミルトン、シュレーゲル、そしてドイツの印度学

イギリスの学者は、現地仕込みが多かった。軍人としてインドに駐留して梵語に強い関心を抱いていたハミルトン (Alexander Hamilton: 1762?-30. XII. 1824) も、その典型的人物である。1790年ごろ、すでに数年ほど仕えた軍隊を少尉で辞めて、さらに数年ばかり研究に没頭し故国に帰る。パリの膨大な資料に魅せられてパリに来た彼は、幸いにも英仏関係の犠牲とならずに、かなりの自由を楽しんだようである。

ところで、ハミルトンについては、生年も含めて不明の点が多い。これまでも、ナポレオン1世 (1769-1821) の英仏関係の犠牲となって幽囚の身を余儀なくされていたとか、種々の誤った情報が乱れていた。何を隠そう、筆者も長い間そう思いこんでいた一人である。極めて幸いなことに、著者は資料不足を理由に謙虚だが、数多くの誤報・疑念を明らかにしてくれる非常に優れた研究書が世に出た。本当に有り難い。インド学史の上で、これまでに匿れていたハミルトンが果たした役割の大きさを、驚き知ることができるものである。³²⁾ この著者は、夫君 (Ludo Rocher: 1926-) とともに、インド学史に多くの光をあてる努力を惜しまない。今日まで³³⁾ 余り知られていなかった学者の生涯・業績を、彼女が掘り出してくれた研究書もある。

ところで、若くしてカルカッタに客死したジョーンズ (Sir. William Jones: 28. IX. 1746-27. IV. 1794) が、その地の高等裁判所判事として渡印したのとまったく同じ頃にハミルトンも同地に赴任しているらしく、奇しき因縁というべきかも知れない。そのハミルトンに師事する幸運を掴んだのが、シュレーゲル弟のフリードリッヒ (Friedrich von Schelegel: 10. III. 1772-12. I. 1829)³⁴⁾ であった。その後の彼ら兄弟の活躍には目を瞠るものがあった。その歴史は、それぞれに細かくいうと、複雑な問題を提起する。例えば、マイルホーファーの、小冊子ながら、問題点を指摘し、新資料の発掘にも関心を示した論著は、注目に値しよう。³⁵⁾

ノルウェーのペルゲンに生まれ、幼くして両親と共にドイツに移住してのち、ボンに学ぶラッセン (Christian Lassen: 22. X. 1800-8. V. 1876) に、中期インド語への関心を持たせたシュレーゲル兄がボン大学教授となって、ラッセンにパリへの留学の道をつける。そのラッセンが、のちにドイツで初の梵語学講座担当教授となり (1830年)、ゲッティンゲン大学のセム系言語文化講座を担当しながらインド学に強い関心を示すエーヴァルト (Georg Heinrich August Ewald: 16. X. 1803-4. V. 1875) と共に、ドイツ東洋学の振興に力を尽くす。この辺の事情は、次の1節で触れておきたい。

フランスとドイツの東洋学界

フランスのアジア協会 (Société Asiatique de Paris) が1822年に創立され、同協会誌の第1輯 (*Première série: 1822-1828*) も了えて、新装なりいよいよ活躍するのを見れば、エーヴァルトもじっとしていられなかったであろうことは、想像に難くない。そのフランスも、実は英領カルカッタのアジア協会 (Asiatic Society of Bengal) の設立 (1784年) では、イギリスに大変な遅れをとっていたのである。後に併合される同種の協会が、1804年にボンベイ、1822年にはマドラスに設立される。さらにいえば、オランダはすでに1779年にその植民地の拠点バタヴィア (ジャカルタ) に学協会 (Bataviaasch Genootenschap) を創立して、どこよりも先んじていたことになる。もちろん、英国では1823年に帝国のアジア協会を創立する気運は最高潮に達していた。その年の6月7日には、国王から王立を冠する許可を得る (The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)³⁶⁾。幸いに、この辺を知るに便利な書がある。ついでながら、案外に人が驚くことは、アメリカの東洋学会創立の古いことで、1842年である。翌1843年度として、1845年には、今に続く学会誌の第1巻第1号を発刊している。

さて、エーヴァルトにしてみると、しかもパリで活躍の大機関車は、専門を同じくするドゥ・サシであったのだ。焦るのも無理はない。ドゥ・サシは実に先見の明のある学者であった。彼のそうした態度を知るに便利な一書がある。³⁷⁾ プロリー公爵が、ユージェーヌ・ビュルヌーフのイラン学の業績を高く評価している所もあり (同書17頁)、またドゥ・サシがコレージュ・ドゥ・フランスにシナ学・インド学の講座を創設するにあたって、学問の歴史に造詣深く、事を運

んだかなどが判って面白い。

当時のゲッティンゲン大学には、いわば血の気の多い学者が揃っていた。いわば政治に関与して七人の教授が辞表を叩きつけたのは、ちょうど創立百周年を迎えた1837年のことである。ドイツの歴史上だれもが知る有名な、いわゆる「ゲッティンゲンの七人衆」である。エーヴァルトのほかに、グリム兄弟ヤコブとヴィルヘルム（Jacob Grimm: 4. I. 1785-20. IX. 1863/Wilhelm Grimm: 24. II. 1768-16. XII. 1859）などもある。厳密には、グリム弟は教授職になかったが、人々は一心同体となって仕事をする兄弟を、一人の分身のごとく見ていたのであろう。この七人衆事件については、大学の歴史の上でも大きな出来事であった。その観点から書かれた興味深い小冊子がある。本書にいうゲオルギア・アウグスタとは、ゲッティンゲン大学の正式な名称である。いわゆるハノーファーの選帝侯（Kurfürst）だったゲオルク・アウグスト（Georg August: 10. XI. 1683-25. X. 1760）が、1737年9月17日に創設したことに因んでいる。1727年から逝去するまでは、イギリス王ジョージ2世でもあった。ハノーファーとは何代か先からイギリスとは縁の深い王家である。彼自身もなかなかの政治家で、英国の内閣責任制の構築に力を貸した³⁸⁾ことでも知られる。

非常に残念なことに、ビュルヌーフとグリム兄弟との間に文通のあった様子は伺えない。³⁹⁾

エーヴァルトが、ラッセンと協力して発刊させた「東洋学誌」は、まさに彼の目論見た通り、ドイツ東洋学統合の場を提供するものであった。その創刊号に載せたエーヴァルトの11頁に及ぶ巻頭言は、39歳の意気軒昂たるものを読者に伝える。当時、文学界に名を馳せて、エアランゲン大学の東洋学の教授でもあったリュッケルト（Friedrich Rückert: 16. V. 1788-31. I. 1866）は、七人の編者にその名を列ねたうえに、自らも例によってバルトリハリの詩の名訳を寄せた。⁴⁰⁾果たせるかな、エーヴァルトやラッセンの企画は成功し、1845年にはドイツ東洋学会が設立されて、翌々年には学会誌の創刊号を見る。⁴¹⁾先の「東洋学誌」は、第7巻（1850年）をもって終刊となる。いわば発展的“廃刊”である。

前にも触れたように、エーヴァルトは梵語学に大変な関心を寄せた。新書判ほどの小冊子ながら、梵語の韻律に関するドイツで最初の単行書を出版する。⁴²⁾梵文学の韻律といえば、パリではビュルヌーフの先任者ドゥ・シェズィ（Antoine Léonard de Chézy: 15. I. 1773-3. IX. 1832）が、やはり韻律に関する小冊子を刊行していることに注目したい。⁴³⁾ともにヨーロッパでの学史上の意義は大きい。もちろん韻律については、既にコールブルックが1808年に長論文を発表していたが。⁴⁴⁾

なおついでながら、ドゥ・シェズィ夫人（Wilhelmine Christiane von Klencke=Helmina de Chézy: 26. I. 1783-28. II. 1856）は、ベルリン生まれのドイツ貴族出身の作家として、一般には夫君よりも名が知られていたらしい。熱い血をもつ女性であったようで、パリに出て来てシェズィと知りあって1805年に結婚し、1810年にはナポレオン戦争のために、祖国を愛する

がゆえに帰独してしまう。しかし、夫亡きあとドゥ・サンのシェズィ伝を1834年に刊行する。そしてジュネーヴで長逝する。ここに少し紙数を食んだのは、彼女の国際的な動きと性格を無視できないと思うからに外ならない。つまり、我々にとっては、彼女が当時の学者とかなりの交際があったことで、インド学史の上でもきわめて重要な人物である。因みに彼女は、例えばハミルトンのパリ滞留・ブリュッセルやケルン訪問などという、その頃イギリス人達が、禁足状態にあった中にあるの貴重な史実を伝えてくれる人でもある。時期的にも、十分に符合する。

ゲッティンゲン余録

さて、エーヴァルトに話を戻そう。おそらくは彼の行政的な手腕をもって、ゲッティンゲン大学にインド学の講座が創設され、初代教授としてベンファイ (Theodor Benfey: 28. I. 1809-26. VI. 1881) が就任することになったのではないかと思う。⁴⁵⁾

このエーヴァルトに、ビュルヌーフが関心を寄せなかったはずがないことは容易に想像できよう。しかし、いうまでもなく、エーヴァルトとラッセンとの間の書簡往復には比べようもない。⁴⁶⁾ エーヴァルトの書簡集の共編者の一人フィック (Richard Fick: 7. II. 1867-18. XII. 1944) は、ジャイナ教の研究で博士号を得て、後に初期仏教に至るまでの時代の社会構造に着目して知られたインド学者で、ゲッティンゲン大学中央図書館 (ニーダーザクセン州立図書館でもある) の館長を務めた人である (1921-1932)。ついでながら、ヨーロッパでは、種々の機関・学会などの要職にあった人が、インド学者であったことが多く、我が田にあえて水を引く言い方をすれば、印度学仏教学にとって利あったことは疑いない。

何はともあれ、ビュルヌーフが1834年にエーヴァルトに宛てた2通の書簡が残っているが、当時の両者の関心からして、仏教に関するものでないことは想像に難くなく⁴⁷⁾。しかし、この両碩学の間に関心のあった事実が、特にその後のパリとゲッティンゲンとの学术交流などからみて重要な意味を持つのである。あとで触れるセナールのゲオルギア・アウグスタへの留学などは、その好例であろう。

当時のゲッティンゲンに、グリム兄弟の活躍のあったことを見逃す訳には行かない。インド学の初代教授ベンファイ (在任: 1862-1881) の「五章の書 (Pāncatantra)」の翻訳・研究は、この環境を無視しては考えられない。惜しいことに、グリム弟ヴィルヘルムの没年 (1859) に同書は出版されるが、その内外に与えた影響は測り知れない。⁴⁸⁾ すべての説話の起源がインドにあるとする彼の説に、全面的な賛同が得られるはずはない。しかし、学問の歴史上、たとえ方法論的に問題があり、あるいは事実誤りであろうとも、専門家の知的反発を買い、刺戟を与え、次の世代に大きな飛躍的發展を促す役割を果たすことがしばしばあることは否定できまい。さもないと、問題も提起されずに眠った状態にあることも、我々は経験するところである。私は、

彼の投じた一石を、このような観点から多とするものである。そのような卑近な例は、ほかにも数多くあり、誰しもが認めるところであろう。なお、ベンファイの小論文集があるのが有り難い。⁴⁹⁾

ベンファイの幅広い活躍には驚く。しかし、ビュルヌーフと文通もあったベンファイのドイツにおける言語学および東洋古典文献学の歴史に関しての精緻を極めた書に、ビュルヌーフはイラン学の関係で引用されるが、印度学(仏教学)、たとえばパーリ語研究などについて言及された形跡がない。「ドイツ」が舞台だからであろうが、残念なことである。しかしベンファイは、ビュルヌーフの法華經の仏訳書に対しては、長い書評を發表しているのである。⁵⁰⁾あとで触れるように、ビュルヌーフはベンファイへの書簡の中で、梵語仏典、なかんずく法華經について、かなり興奮して書いている。⁵¹⁾

ゲッティンゲンのメルヘン研究は今に続き、「メルヘン研究所 (Märchen Institut)」が設置され、関心を持つ学者の注目を世界的に浴びている。この研究所が中心になって推し進めている「メルヘン百科事典」は龐大な企画で、1400頁を1冊に、全12巻を予定している。まさしくゲッティンゲンのメルヘン研究の面目躍如たるものがある。⁵²⁾ビュルヌーフの仏教説話研究については、さらに当時のロシアにおける状況を無視できまい。後で少しく垣間見なくてはなるまい。

ネパールのホジソンとビュルヌーフ

ただ一人の学問上の人物像の片鱗を見ようとするだけでも、ある程度の時代的背景や、その人物の周辺を、せめて簡略な覚え書き風に記しておかねばならない。これでもまだ偏っていて、質的に系統的でなく、量的に十分でないとして反省している。

ユージェース・ビュルヌーフの学問を知る上で、特に大乘仏典・仏教梵語文献学の研究となると、少なくとも第一にホジソン (Brian Houghton Hodgson: 1. II. 1800-23. V. 1894) を抜きにして語れない。大英帝国の外交官として彼がインドへ渡ったのは、わずか18歳の時である。年齢からすると、当時にはそれほど珍しいことではないが、凡庸な才能の持ち主の容易な決断であったはずはない。奇しくも、初代ベンガル総督 (Governor-General) であったヘイスティングス (Warren Hastings: 6. XII. 1732-22. VIII. 1818) の波乱に満ちた生涯を閉じた年でもある。ネパールの歴史からみれば、もう一人のヘイスティングス総督 (Francis Rawdon Hastings, Marquis of Hastings: 9. XII. 1754-28. XI. 1825: 総督在任 1813-1823) が、インド軍総司令官として、勇敢をもって知られるグルカ族を武力鎮圧した (1814-1816) 直後とってよい。

ホジソンがカトマンドゥに赴任したのは、弱冠 20 歳を過ぎたばかりであった。弁理公使補佐とでもいうべき地位であろうか (Assistant Resident)。1829年には弁理公使代行 (Acting

Resident) に昇進, 1833年に弁理公使 (Resident) となる。その職にあったのは、実は10年余で、1844年には退いて一たん帰国する。退職というよりは、インド統治に関しての強硬派の筆頭で、覇権の拡張に躍起となっていた、時の総督でエレンボロー侯 (Edward Law, Earl of Ellenborough: 8. IX. 1790-22. XII. 1871/ 総督在任: 1842-1844) による不当な解雇に等しいものであった。前任の総督・オークランド侯 (George Eden, Earl of Auckland: 25. VIII. 1784-1. I. 1849/ 総督在任: 1835-1842) が、どちらかというインド統治をする中で、厚生・教育などに貢献したのとは対照的な人物の後であることが印象的である。

当時の大英帝国のインド統治の歴史などは、筆者の能力を遙かに超えた課題であるので如何ともしがたいが、ホジソンのとった態度が常に非常に長い将来を見つめたものであったことも、彼を評価するうえで決して忘れてはならないと思う。つまり、今にして見れば、国際性をもって先を読む外交官であったということであろう。ネパール王国の人々に対しても好意的な心を秘めていたように見える。彼が騎士 (Knight/Sir) の称号にも全く関心を示さず、拝受しようとしなかったようである。むべなるかな。⁵³⁾ このイギリス統治時代のインド (つまりネパールも含めた) 植民地政策を知る傍証的な資料として、少数知識人の間で、ある意味での共通語 (lingua franca) 的役割を果たしたサンスクリット語文書は興味深い。⁵⁴⁾ しかし残念なことに、この関係方面の資料の発掘・公刊は充分とはいえず、もっと進んで欲しいと思う。ホジソンは、ネパール王国のあらゆる文物に非常に興味を抱いていたので、直ちに引き返すが、カトマンドゥには行かず、北ベンガールの避暑地ダージャーリン (Darjeeling) に居を定め、1858年に帰国するまでの13、4年をそこで過ごし、資料の蒐集・整理・研究に没頭することになる。

彼の関心が動植物にまで至ったのは、知る人ぞ知る。私は、彼をヒマラヤ山系の近代的な文化史研究に極めて大きな端緒を開いた人だとみている。しかし残念なことに、ホジソンとその蒐集資料の研究は看過されたままである。言語・歴史・地理・民俗・政治・宗教等々の諸資料で、日の目を見ないものが数多く遺されているようである。例えば、彼の蒐集した相当量の貴重な資料、あるいは往復書簡などが、現在なおロンドンの大英図書館 (British Library)⁵⁵⁾ やオックスフォードのボードリ図書館 (Bodleian Library) に保存されていることも、実は判明しているのである。⁵⁶⁾ その中には彼の著作の資料もあろうが、今日までに知られていない資料も多くあろうかと思う。また、いまだに眠ったままの資料も多い。この種の資料は、さらにもっと、いつ出てきても不思議ではない。

ホジソンの梵語仏典 (写本) の蒐集も、すでに1824年には始まっていた。特に大乘仏典を中心にした研究は、他の学者を感動させずにはおかなかった。彼の1828年に公刊された論文が、その最初のものであろう。ただちにフランス語にも翻訳・紹介された。⁵⁷⁾ このフランス語訳をなした匿名の学者は、恐らくドイツ人クラプロート (Heinrich Julius Klaproth: 11. X. 1783-28. VIII. 1835) に間違いないと思う。彼は自らアジア各地を踏査し、東方の事情に詳しく、また

深い関心を寄せていた。彼のフランス語訳がビュルヌーフの目に止まらなかったはずはない。後者の関心も、ようやく仏教文献に向きつつある頃であった。クラブロートはまた、18世紀の初頭に活躍したカップチーノ派の修道士デッラ・ペンナ (Francesco Orazio della Penna de Billi: 1680- Patna 20. VII. 1745) の貴重な資料を発掘し、研究史に重要な貢献をなしていることでも注目される。デッラ・ペンナの折角のチベット語訳「波羅提木叉」からのラテン語訳は、律蔵文献の初の西欧への紹介であるが、惜しむらくは散逸してしまっ⁵⁸⁾て今に行方が分からない。ヴァティカンの書庫にでも眠らされているのであろうか。

ホジソンは長寿を全うしたので、我々に最も馴染みの深い論文集も、たびたび覆刻出版され⁵⁹⁾た。彼は蒐集した資料に若干の整理がつく1827年頃から20有余年もの間、各地の学者・機関・図書館に寄付し、あるいは譲渡し続けた。彼の生涯と写本の仕事に関しては、同時にアジア協会の副会長も務めたことのある友人ハンター (Sir William Wilson Hunter: 15. VII. 1840-6. II. 1900) を描いて他にあるまい。ホジソンが入手して、譲渡した写本類の行方・目録・参考文献が、綿密に採録されて⁶⁰⁾いる。この極めて有益なホジソン伝を書いたハンターも、1862年に若くしてインドへ渡り、大英帝国の植民地政策を担当しながら、しかし非常に多方面に活躍した人である。幸いに彼の伝記もある⁶¹⁾。中でも彼の著した英領インド史や統計資料などは、イギリスのインド統治を研究する者にとって不可欠なものであろう。

ビュルヌーフ父子

ビュルヌーフ父 (Jean-Louis Burnouf: 14. IX. 1775-8. V. 1844) は、コレージュ・ドゥ・フランス (Collège de France) の西洋古典学教授として (1817-1844)、梵語にも深い関心を寄せていた。唯一の子ユージェーヌの尊敬してやまない父であった。この環境が、ユージェーヌを学問の世界へと育む。息子もまた、西洋古典文献学から古典インド・イラン学へと興味を移して行く。彼の古代ペルシャ語や古典イラン文献学の分野での業績を、我々は見逃すことはできない。その生涯と業績については、彼を称える簡にして要を得た追悼文が便利であろう。短い付篇のなかで、シェズィの活躍に敏感に反応し、しかし彼のインド学が息子によって継承される記述などは、まことに興味深いものがある⁶²⁾。

ビュルヌーフ父も、名声を恣にした人であったといえよう。学士院 (いわゆる Institut de France) の要職を歴任した。1836年に学士院会員となる。ビュルヌーフ子は、その4年前にすでに学士院会員になっていた。1832年にビュルヌーフ子が学士院会員に推挙されたのは、シェズィが伝染病コレラに斃れて、コレージュ・ドゥ・フランスの印度学講座担当教授の職位を襲ったことも関係があろう。学士院でのビュルヌーフ子の活躍も高い評価を受けていたと思われる。セーヌ川に面して威容を誇る学士院の建物本館を3階まで上ると広間があり、左側に重厚な総会議室、右側に高い天井の図書館がある。その広間の中庭側の壁の高い所に、ビュルヌー

フ子の大理石でできた胸像がある。薄暗く、しかも見あげる場所なので、ついぞ見落としてしまいそうである。1992年9月初旬に、ここで貴重な資料などを閲覧する機会を与えて下さった、現学士院会員カイヤ (Colette Caillat) 教授と同図書館長デュマ (François Dumas) 女史に、ここに記して謝意を表したい。極めて親切にお世話になった。

ビュルヌーフのコレージュ・ドゥ・フランスでの教授就任講演が、幸いに遺されている。⁶³⁾ 就任講演は、新進気鋭の梵語学徒として、当時の西欧における梵語梵文学の概観をなしている。全体の色彩は、やはり単に言語・文学という範囲に閉じこめたものではなく、彼が志向していた文化学の構築を目ざして、インド (およびイラン) の研究を推し進めて行こうとするものであると思う。まだ仏教梵語 (文献) についての彼の関心を読みとれないのは残念であるが、1832年ということからすれば当然であり、致しかたないことである。しかし彼の遺稿には、パーリ語と仏教梵語の比較を試み始めていた節があることをつけ加えておこう。

さて、ビュルヌーフは、父君に、一生懸命に書いた「印度仏教史序説」を献上したかったに相違ない。今からみれば、仏教の理解に誤謬も多かろう。しかし「序説」は、仏典を渉猟してその成果を余すところなく盛りこんだというだけのものではなく、人間の学としての枠のなかで文化史を構築しようと試みたところに、彼の学問の本領があると、私は信じている。彼はフランスの印度学仏教学の、今日に至る学問的出発点であったと思う。彼の脳裡には、こうした壮大な構想が潜んでいたはずである。折角の「序説」も、完成した時には父君の他界した直後であった。序文 (Avertissement) を記した場所はパリ、日付は1844年11月10日となっている。本書の標題頁を忠実に写して、書誌的記録を認めておこう。というのは、初版本はきわめて稀観の書であろうから。⁶⁴⁾ ユージェーヌが「序説」を父への篤い尊敬と深い悲しみをこめて献上しているのは、何とも悼ましい。1頁をいっぱい使って献辞を捧げている。また、これを第1巻と称しているからには、続いて第2巻を考えていたことは、明らかである。⁶⁵⁾

世界で最初の現代語訳に、ビュルヌーフの「法華経」のフランス語訳が出版された時は、彼の死の直後であった。これもまた、何と悼ましい偶然であろうか。

ついでながら、アメリカの印度学に真の礎石を築いたホイットニー (William Dwight Whitney: 9. II. 1827-7. VI. 1894) を導いたソールズベリー (Edward Elbridge Salisbury (6. IV. 1814-5. II. 1901) は、イェール大学のアラビア・サンスクリット担当教授 (1841-1854) であったが、仏教にも非常な関心を寄せていて、アメリカ東洋学会誌の第1巻第2号に、内外の学界事情に通じた仏教に関する論稿を発表し、同じ第1巻第3号にビュルヌーフの「序説」を詳しく紹介しているのは、北米の近代的仏教学の歴史からみても、きわめて注目に値すると思う。⁶⁶⁾

「印度仏教史序説」の第2版は、初版の後32年を経て、注意深く版を組み直して刊行されている。⁶⁷⁾ この版には、ビュルヌーフの死後すぐに、その業績についてサンティレールが書いた簡

要な紹介が転載されているので有り難い。しかし著者の関心の故か、ビュルヌーフの仏教関係の研究についてはほとんど述べるところがないといってもよく、むしろイラン学に関心のある向きには、貴重な記述が多い。⁶⁸⁾

サンティレールには、ビュルヌーフの労作と書簡に関する書があるが、非常に残念なことに、筆者は長い間の怠慢の故に入手できずにいたところ、本稿を書き了えた時に遂にやっと手にすることができた。従って、本稿で十分に活用し得なかったのは残念である。「文通」と称する篇は、筆者の予測に違えて、いま現に筆者自身が試みているようなことを、身近にあった人らしく自在に書いているところが面白い。しかし、誠にもって惜しむらくは、そのために出典(書簡の宛先・日時など)をまったく明らかにしていない。⁶⁹⁾このビュルヌーフの「労作」に関する部分は、上記の「序説」に付したもので「書簡」の部分はやはり先に出版されたものの覆刻かも知れないという予想は当たった。ただ後者は、標題を異にして同じ誌上に発表されたものであることが、本書の緒言から伺い知ることができる。⁷⁰⁾なお、サンティレールは、本書を1巻に纏めるに際して、きわめて簡略ながら、補遺を加えている (pp. XI-XIII)。

このサンティレールについて、私は審らかにするところが少ない。コレージュ・ドゥ・フランスで、ほとんどビュルヌーフと時を同じくして、ギリシャ・ラテンの哲学担当教授 (1838-1852年在籍) として同僚であったことに間違いはないと思う。しかし、1848年には政治家になった人 (Jules Barthélemy-Saint-Hilaire: 19. VIII. 1805-24. XI. 1895) のことであるとする、哲学を研究教授しながら、政界にあっても有力な人であった訳である。一つだけつけ加えておきたいことは、サンティレールが、まったく仏教に無関心であったわけではない証拠に、おそらく哲学史家としてビュルヌーフ父子との付き合いから仏教にも関心を抱き、一書をものしていることである。⁷¹⁾

さて、ジャン・ルイ・ビュルヌーフが子息に与えた影響は、単に知識ではない。確かに学問は人間の未知の世界を拓げ、人類の知識の向上を図ることにほかならない。そのために必要なことが、学問の方法である。これを過ぎれば、すべてが水泡に帰すことさえある。ユージェーヌは、それを父からしっかりと学び、自分のものにしようとした。惜しいかな、彼は次の段階に進む前に夭折してしまったのである。この不幸を見ながら、しかし幸いなことに、フランスの印度学仏教学者たちは、彼の行くべき方向を、見定めることが出来ていた。

研究対象となるべき文化の根底にある言語を、方法論に過ちなく、まず徹底的に考究することが第一である。そして、文化史の構築を目標とする。ジャン・ルイは、まさしく一門の弟子・一族の学徒に範を垂れた。彼のギリシャ語・ラテン語で採った言語学的方法に従って書いたとまで謳って、梵語研究の方法論を著わした弟子達がいる。その一人が、彼の甥エミール (つまりユージェーヌの従弟) Emile-Louis Burnouf (26. VIII. 1821-millieu janv. 1901) である。⁷²⁾彼の学問が息子等に与えた影響の極めて大きかったことが知られる。また、ここで面白いのは、

著者たちが共通の師についてのみでなく、30年も前に、長いあいだ温めていて暇がなく実行できずに亡くなったユージェーヌの遺志を継ごうとの動機もあったことだ。⁷³⁾

ところで、エミールは、1850年にプラトンの研究で文学博士号を得ているが、梵語研究にも力を傾けたようである。上記の書に加えて、当時の西欧の学界にも目を向けていたことは、彼の辞典編纂に如実に現れていると思われる。⁷⁴⁾ 彼はヴェーダ文献から仏教にも興味を示していて、関連の論著も公刊している。ユージェーヌが、エミールに、極めて親しくまた繁く書簡を送っていたことが頷けよう。

ユージェーヌにとって、さらにはラッセンとのパリでの遭遇は、彼の学問に重大な意味をもつ。そして二人の出会いが、パリ語に関する最初の学術書の出版を可能にすることとなる。⁷⁵⁾ ビュルヌーフはパリ語への関心を深め、明るる年に追補を著わす。⁷⁶⁾

パリのアジア協会のことなど

いくつかの例をすでに見たように、印度学仏教学の研究史の上で幸運な出来事が数多くある。それに加わる一つが、ビュルヌーフがアジア協会書記 (=事務局長: Secrétaire) に任命されたことである。ラッセンと共に「パリ語試論」を出版した年である (下記註74参照)。因みに、パリのアジア協会の創立は1822年のことである。協会設立の立役者は、ドゥ・サシ男爵 (Antoine Isaac Silvester de Sacy: 21. IX. 1758-21. II. 1838) であった。ビュルヌーフ父は評議会の一員であり、レミュザ (Jean Pierre Abel-Rémusat: 5. IX. 1788-3. VI. 1832) は初代の書記であり、ビュルヌーフ子の前任者であった。

ところで、パリのアジア協会の初期の歴史を知るには、その創立百年を記念して出版された書物が最も便利であると思う。我々に関係の深い論考を拾い挙げておこう。⁷⁷⁾ この記念論集が出た時のアジア協会長がセナール (Emile Charles Marie Senart: 26. III. 1847-21. II. 1928) であった。協会成立後、印度学仏教学に強い関心を示す学者が会長を歴任したことは、斯学のために益多かったといえよう。たとえば、ドゥ・サシ (Silvestre de Sacy (1758-1838) {Président: 1822-1829, 1832-1834}), レミュザ (Jean Pierre Abel-Rémusat (1788-1832) {1829-1832}), モール (Jules Mohl (1800-1876) {1867-1876}); (ガルサン・ドゥ・タシ (Joseph Héliodore Sagesse Vertu Garcin de Tassy: 1794-1878) {1876-1878}); セナール (Emile Senart (1847-1928) {1908-1928}); レヴィ (Sylvain Lévi (1863-1935) {1928-1935}); ペリオ (Paul Pelliot (1878-1945) {1935-1945}); バコー (Jacques Bacot (1877-1965) {1946-1951}); セデーヌ (George Coedès (1886-1969) {1964-1969}) の名を挙げれば十分であろう。

150周年記念の「アジア協会誌」261巻は簡略すぎる感があるが、その後の状況を簡要に記している。⁷⁸⁾ しかし実は、何といても我々が今知りたい1840年代の生の情報は、モール (Jules/Julius von Mohl: 25. X. 1800-4. I. 1876) のアジア協会の年次報告を描いて他にあるまい。⁷⁹⁾

すべてを標題が示すように、まさしくパリのアジア協会の実録である。これは、モール未亡人に負うところが大きい。モールについては、あまり日本では知られていないようなので、少し紙数を割くことにしよう。モールは、ドイツの学者兄弟として有名である。長兄ロベルト(Robert von Mohl: 1799-1875)は法学・政治学者であっただけでなく、実際に政治の表舞台でも活躍した。弟フーゴ(Hugo von Mohl: 1805-1872)は植物学者として有名であった。

ユーリウス(Julius von Mohl: 25. X. 1800-4. I. 1876)は、シュトゥットガルトに生まれて、近在のテュービンゲン大学ではじめは神学を学ぶが、彼の関心は東洋学へと傾く。1822年頃である。そうなれば居たたまれない彼は、翌年パリへと赴き、ペルシャ学をシルヴェストル・ドゥ・サンに、シナ学をアベル・レミューザ教授について学ぶ。彼の出身のヴュルテンベルク州政府は、1826年に彼を母校テュービンゲン大学の東洋語学担当教授に任命するが、彼にはパリを離れる気はまったくなく、1833年までの足かけ7年、その地位にありながらパリに居を定めてしまっていた。その間に、英国に1830年から次年まで滞在し、当時の優れた学者との交流を深めた。フランスにおける友人との交流は言うに及ぶまい。中でも興味を惹くのは、彼がパリに着いたころ、フンボルト兄弟の弟アレクサンダー(Alexander von Humboldt: 14. IX. 1769-6. V. 1859)がパリに在住して(1807年から1827年まで)、ちょうどその脂ののった時の親友でもある。これは、ほかの面からも興味深い事実であると思う。

モールは、1840年にアジア協会の書記補(Secrétaire adjoint)となって、文字通りビュルヌーフを補佐する。そして、ビュルヌーフ亡き後を書記として活躍し、1867年に会長となり、他界するまでその地位にあった。つまり上記の書は、彼の書記補就任から会長就任までの27年間の、アジア協会での報告を纏めたものであるということになる。また、1850年(任命は1847年)から逝去する1876年まで、コレージュ・ドゥ・フランスのペルシャ語の教授も務める。

この書の前書きを、かの有名なルナン(Joseph Ernest Renan: 27. II. 1823-2. X. 1829)が認め、非常に詳細な生涯と業績についてマックス・ミュラー(Friedrich Max Müller: 6. V. 1823-28. X. 1900)が筆を執っていることは興味深い。この書物の重要性が自ずと伺えよう。特に後者のは長文である。ルナンはこのモールの活躍した時期を、東洋学の黄金時代(“l'âge d'or des études orientales”)と前書きの第6頁に称しているが、本書はまさに彼自身を含めて、大碩学輩出の黄金時代の実録である。マックス・ミュラーは、上記の論考の中(第10頁)で、この時代をルナンが東洋学の英雄時代(“l'âge héroïque des études orientales”)と言っていることをも伝えている。ついでながら、マックス・ミュラーはルナンを高く評価しているし、自伝などでもパリ時代に得た善友に数えている。すこし誤解もされていると思われるので、ここに付け加えておきたい。⁸⁰⁾

さて、パリに腰を据えたモールは、学者としての地位を築いて行く。1844年にはいわゆる学士院会員(Membre de l'Institut)となり、1847年にはコレージュ・ドゥ・フランスのペルシャ

語担当教授に就任する。さらに、1852年には、国立印刷所の東洋部の監督官 (Inspecteur du département oriental à l'Imprimerie Nationale) の要職に就いている。これは、極めて重要なことである。なお、因みにビュルヌーフも職名は異なるが、1838年に同じ重責を担っていた (Inspecteur de la typographie orientale à l'Imprimerie Royale)。ビュルヌーフとモールとは殆んど同年輩であり、特にイラン学での同学の士である。1852年はビュルヌーフの法華経の翻訳が、モールの前書きを付して出版されているのである。モールは、仏教には暗いと自ら述べているが、イラン学を通じてビュルヌーフにたいして非常な親近感を持っていたことに疑いない。このことが、モールにその序を書かせたのであろう。

モールは、1844~45年度の報告で、仏教研究の唯一の特記すべき業績として、ビュルヌーフの「インド仏教史序説」を非常に高く評価している。その視野の驚くべき広さを称賛する。しかし、その学的業績の背景に、同時代の学者との交流を見逃していない。つまり、シナ仏教でレミュザ、モンゴルはシュミット、セイロンはターナー、ネパールはホジソンといった具合に。しかし、チベットを挙げてチョマ(およびシュミット)を加えるべきだったろう。

コレージュ・ドゥ・フランスのことなど

ついでながら、1814年12月11日に(厳密にはルイ17世の同年11月29日付の任命発令によって)、コレージュ・ドゥ・フランスにシナ学とインド学の講座が出来て、それぞれレミュザとドゥ・シェズィがその職席に就く。両教授の最初の講義は1月16日に行われた。二人共が、1832年のコレラのヨーロッパ大席卷に斃れて世を去る。同年、直ちにジュリアンとビュルヌーフ子がその後を襲うことになる。フランスのシナ学とインド学の方向づけがなされる、まさに新時代の到来である。コレージュ・ドゥ・フランスのインド学に関する、簡にして要を得た歴史的叙述を、極めて多方面で活躍したフィリオザ (Jean Filliozat: 11. IV. 1906-27. X. 1982) が同講座担当教授の就任講演でなしている。彼自身も今は故人となつてしま⁸²⁾った。

ついでに、コレージュ・ドゥ・フランスの歴代の梵語学講座担当教授の名を列記しておこう ([] 内の年度は任命年)。講座名は「梵語梵文学 “Langue et littérature sanscrites”」: ドゥ・シェズィ (Léonard de Chézy: [1814] 1815-1832); ビュルヌーフ子 (Eugène Burnouf: 1832-1852); パヴィイ (Théodore Pavie, chargé de cours: [1852] 1853-1857); フーコー (Édouard Foucaux, chargé de cours: 1857-1862, titulaire: 1862-1894); レヴィイ (Sylvain Lévi: 1894-1935); ブロック (Jules Bloch: [1936] 1937-1951); ついで、講座名は「印度の諸言語・文学 “Langues et littératures de l'Inde”」となり、第2次世界大戦後の事情を逸早く見て採る: フィリオザ (Jean Filliozat: [1951] 1952-1978); さらに講座名が、就任する学者の専門を反映して変わり「印度圏の歴史 “Histoire du monde indien”」となる: フュスマン (Cérard Fussman: [1983] 1984-)。学者によって、あるいは学問の進歩・変化に沿って、

講座名を変えて、または新講座を創って時代に即応することが欧米では決して珍しくない。これは決して伝統の断絶ではなく、むしろその継続を保持しつつ行われるのである。

概してパリの高等学術研究機関は、毎年度の詳細な報告書を発刊してくれて、非常に得るところが大きい。コレージュ・ドゥ・フランスも例外ではない。年報の90年目の最近号は、きわめて簡要ながらコレージュ・ドゥ・フランスの歴史を見ることができてこの上なく便利である。⁸³⁾とくにその第4章では、講座の開設(創設)・継承・廃止・改名(新設)などが手に取るように分かる。そればかりでなく、時代の要請(背景)・画期的な学者の登場などが判明してきて、極めて興味深い。一見すると記録の羅列にみえるものが、行間を読むと、一つの学史の貴重な資料になってくる。

上に述べたように、学術面からみて極めて優れた学者が出れば、その学者のために新講座を創設したりもする。時代に応じて、ある退職者の後に、講座名を変えて他の学者を迎えることもある。身近な例として、1970年に任命されて、翌年から就任したバロー(André Paul Bareaux: 31. XII. 1921-2. III. 1993)の講座名は「仏教の研究“Etude du Bouddhisme”」というが、年報の記載では新講座の「創設」(Création)としてはいない。この最終稿を纏めている今、バロー教授の訃報がパリから届いた。まだまだ彼の筆になる論著の恩恵に浴したかった。度を重ねて警咳にも接したかった。

この1970年には、優れた業績と活動が認められて、1946年に時代の要請も享けて新設された「極東の文化“Civilisation de l'Extrême-Orient”」の席にあったミュス(Paul Mus: 1946-1969)の退官がある。この年に消えた講座名に、「熱帯圏の研究」もある。もちろん、これらの講座が、名と形を変えて後に他の研究分野に委譲される。

第2次大戦後、こうして学界に大きな裨益を齎した学者は、少なくない。我々に馴染みの深い学者に、例えばデュメズィル(Georges Dumézil, 1949-1968: “Civilisation indo-européenne”), レヴィ・ストロース(Claude Lévi-Strauss, 1959-1982: “Anthropologie sociale” [創設]), アンビース(Loius Hambis, 1965-1977: “Histoire et civilisations de l'Asie centrale”), スタン(Rolf A. Stein, 1966-1981: “Étude du monde chinois: institutions et concepts”), ジェルネ(Jacques Gernet, 1975-: “Histoire sociale et intellectuelle de la Chine”), フランク(Bernard Frank, 1979-: “Civilisation japonaise”)などである。

しかし、1864年にブレール(Michel Bréal, chargé de cours, 1864-1865, titulaire, 1866-1905)のために創設された「比較文法(“Grammaire comparée”)」の講座名も、メイイエ(Antoine Meillet, [1905] 1906-1936), バンヴェニスト(Emile Benveniste, 1937-1972)という大碩学を産んで、印欧語比較文法の輝かしい伝統は消えてしまったかにみえるが、研究の発展から分科したと見るべきなのであろう。

さて、ビュルヌーフに話を戻そう。ビュルヌーフとジュリアンの二人は、非常に親しく、前

者は後者から漢訳仏典の存在を知らされる。当時のパリには、漢訳大蔵経は揃っていなかったという。シナ学担当のレミュザとジュリアンが仏教に深い関心を持っていたことも、印度学仏教学にとって測り知れぬ幸いを齎した。ジュリアンの重要な著作は、殆んどがビュルヌーフの死後に出版されているが、疑いもなく互いに学的交流がなされていて、仕事の内容や情報の交換もしていたに相違ない。レミュザは、法頭の「仏国記」のフランス語訳に非常な力を注いだ。いわゆる法頭伝の公刊は、種々な意味で、フランス国外も含めて、その後のシナ学・東洋学の展開に貢献することが多かったと思われる。彼が副題にも付したように、本書自体が仏教文化圏交流資料でもある。また本書は、次世代に向けての音韻比較研究資料も含んでいる。残念なことに、その出版も彼の死後になる⁸⁴⁾。ついでに、レミュザの主要な著作3点を挙げておこう⁸⁵⁾。

コレージュ・ドゥ・フランスのシナ学講座は1918年までの長い間、設立当初からの正式名で「支那・韃靼・満洲の言語と文学 (Langues et littératures chinoises et tarares-mandchoues)」と呼ばれていた。その名が示すように、地理的にも広範なアジア地域を扱うものであった。その広く深い学問的伝統は、フランス中国・シナ学として、連綿と今日まで受け継がれてきている。仏教学の発展にも、多量の滋養を与えてくれた。

ここに、是非とも引用しなければならない、きわめて簡要・有益なフランスのシナ学史がある。その著者であるドゥミエヴィル (Paul Demmiéville: 13. IX. 1899-23. III. 1988) もその講座を担当し、まさに上に述べたフランス・シナ学を代表する一人に疑いない⁸⁶⁾。ドゥミエヴィルなど、そうそうたる学者が活躍するパリへ、フランスが誇る東洋学の方法を学ぶために遊んだ福井文雅の近刊の書は、ほとんどが彼の留学当時の報告を集めたものであるが、著者の意図がしみじみと胸に伝わってくる。紹介しておきたい好著である⁸⁷⁾。

ジュリアンのことなど・特に地理・音韻・説話

ジュリアンが、学問的に方向づけをした二、三の著作を拾ってみるのも、印度学仏教学の歴史的背景と展開を知るために無意味ではなからう：

シナ資料から見た「インド」に関する、彼の興味と研究は注目に値する。題名の示すごとく、同時代の優れた中国学者ポーティエ (Jean Pierre Guillaume Pauthier: 1801-1873) の論文に対するものである⁸⁸⁾。地名を含めた固有名詞の音写問題に関するジュリアンの考究は、その好例であろう。天竺をはじめとした資料に関する興味深い論文である。かつて「アジア協会誌」に掲載され始めたものである。著者は統篇を同誌の近刊号に掲載する旨、最後に付記しているが、公刊されたかどうか筆者には定かでない。これもポーティエの仕事に関連する。本篇は漢代から北魏までを扱う⁸⁹⁾。

当時パリで入手できる資料を生かしてジュリアンが成し遂げた労作は、まさに驚異である。王古が12世紀初頭に編んで、管主八が1306年にさらに手を加えて成ったという『大蔵聖教法宝

標目』(昭和法寶總目錄, 第三十八番=大正藏, 第九十九卷末)の仏典題目からインド語原語を探ろうとの試みは、学問の歴史上、いまだに価値を失っていない⁹⁰⁾。そして、その復元の方法を見出そうとする意味は、きわめて大きい。インド語と漢語の音韻史が、独立に、しかも互いに資料を提供しあって進めなければならないという点で、今日の課題でもある。ベルギーのドゥ・アルレ(Mgn. Charles Joseph de Harlez: 1832-1899)、スウェーデンのカールグレン(Bernhard Karlgren: 1899-1978)や、ドイツからイギリスへ移住したサイモン(Ernst Julius Walter Simon: 1893-1981)、その他の欧米の学者の種々の輝かしい業績や、独自の領域を拓こうとした中国・日本などの諸学者の方法・業績も、ジュリアンを抜きにしては考えられない。漢蔵比較文学も、より広い視野からの研究が進められている。仏教漢語音韻史は、印度学仏教学に止まらず、あらゆる分野にとっての緊急事であろう。

また、玄奘の『大唐西域記』の仏訳は、まさしくレミュザの後継者にふさわしい一大業績といえよう。副題が如実に示すように、当時得られる知識を集成している⁹¹⁾。

また当時、ジュリアン自身が、特にゲッティンゲン学派の説話文学研究に、無関心だったはずはない。漢訳仏典の中に見られる説話類を蒐集翻訳した業績も、忘れることが出来ない⁹²⁾。

さらに、それまでにプラーナ文献などに極めて強い関心を持っていたビュルヌーフが、梵語仏典写本の中に見出したアヴァダーナ文献等に興味を示していることは当然ともいえるが、学問の歴史の上から見落としてはならないと思う。勿論、彼の親友ジュリアンの漢訳仏典中のインド系説話類の翻訳・研究やゲッティンゲン学派の動きも無視出来ない。このようにビュルヌーフが、インド仏典に遺る説話類に非常な関心を寄せていたことも、また忘れてはならない。親交のあったジュリアンからビュルヌーフは、飽くことなく漢訳仏典資料について教わるどころが多かったと思われる。梵語原典の言語が、いかに漢語に翻訳されているかなど、ビュルヌーフの関心は深かった。書簡を往復して、問題を提起していることもある。ジュリアンもまた、長文の書簡で丁寧に答えている。

ビュルヌーフは、後継者にフーコー(Philippe Édouard Foucaux: 1811-1894)やフェール(Léon Feer: 1830-1902)のごときを得て、チベット資料にまで触手を伸ばしめることとなる。この点になると、ロシアの帝都にあって活躍したシーフナー(Franz Anton von Schiefner: 1817-1879)の名を書き留めずにはいられない。フランスでは、さらにシャヴァンヌのような、ドゥミエヴィルによって完成を見る漢訳仏典説話の集大成を産むに至る。シャヴァンヌ(Emanuel Édouard Chavannes: 5. X. 1865-29. I. 1918)の漢訳の律蔵資料を中心に蒐集・翻訳したインド系説話に関する大著の価値は増すばかりである⁹³⁾。これが極めて学術的な利用に耐えるものとして完成を見たのは、一重にドゥミエヴィルに負うところが大きい。また、この増補版に対するドゥ・ヨングの書評に見られる大正大藏經との対照表は非常に便利で、研究者にとって不可欠のものであることもつけ加えておきたい⁹⁴⁾。ついでながら、シャヴァンヌは、

すでに第14回東洋学会議でこの漢訳資料に言及し、非常な注目を浴びた。⁹⁵⁾

説話文学史上で、我々が忘れることのできない人物が、ちょうど同時代にフィンランドに出たアールネ (Antti Aarne: 7. XII. 1867-2. II. 1925) であろうと思う。メルヘンの分類学に新しい境地を開拓し、ヘルシンキを民話研究の中心となる基礎を創った。アールネが機関車となって始まった民話研究叢書や雑誌は現在にも存続し、斯界を裨益している。インドや日本の説話研究に欠かせない論著が前掲の叢書にあることは、数は少ないが、無視出来ないのである。残念なことに、インドの説話研究、なかんずく仏教説話研究に、あまりヘルシンキ学派の成果の影響が見られないように思えてならない。⁹⁶⁾

ビュルヌーフと蔵蒙資料

ユルク (Bernhard Jülg) が、蒙古に伝わったヴェーターラ物語などの校訂本・独語訳を公刊 (1866—1867—1868) したのは、ビュルヌーフの死後である。しかし、蔵蒙化したインド系説話の貴重な蒙古語資料が存在していたことを、彼は承知していたと思う。現に、カンシュタット男爵の、フランスの学界との蔵蒙仏教資料に関する協力などからみても肯げよう。ビュルヌーフも影響を受けていたであろう。1837年には、蔵蒙文献 (版本・写本類) がフランス学士院に贈呈されている。このことは、彼が「序説」にも記している (初再版共に7頁)。⁹⁷⁾ この1837年は、ビュルヌーフにとって忙しい年である。待望の梵文写本の初荷が、ネパールから届く。

さらには、ビュルヌーフは、シーフナーが律蔵に含まれるインド系説話の研究を始めるであろうことを、承知していたように思える。ビュルヌーフの著書のそこかしこに、その関心の程が伺える。親友ジュリアンの、漢訳仏典に含まれるインド系説話の翻訳研究の影響もあったろう。いずれにしても、上にも触れたように、やがてはフェールやシャヴァンヌに受け継がれる⁹⁸⁾ 伝統の基礎を築くことになる。シーフナーの業績は、その学術的価値をいまだに失っていない。

フランスの伝統からすると、チベット伝承の律蔵の資料が多いフェールの仕事も、きわめて高く評価されるべきである。またインドを中心に、東西両洋に互って、当時として入手できる資料・研究に目を通して主題 (thème) を分類し、さらに型 (type, forme)、異系統 (variants, diversité) を追求したコスカン (Emmanuel Cosquin: 1841-1919) の労作には、その博覧強記ぶりと緻密さに、筆者は専門家でないので正しい評価はできないが、驚くばかりであり興味は¹⁰⁰⁾ 尽きない。

さらに、ビュルヌーフがチベット訳仏典資料の存在にも決して無関心でなかったことを、つけ加えておきたい。彼は当然、ハンガリア人のチョマ (Körösi Csoma Sándor/Alexander Csoma de Körös: 4. IV. 1784-11. IV. 1842) やロシアのシュミット (Isaak Jakob Schmidt: 14. X. 1779-8. IX. 1847) の報告を知っていたし、パリのアジア協会でも、積極的にチベット大蔵経の甘殊爾の入手にも努力したようである。

ホジソンの伝記を著したハンターも、チョマを高く評価すべきことに触れる所がある(前掲書280頁・俱註2)。ビュルヌーフは、カルカッタからの情報に敏感に反応していたし、またそれが出来る立場にあったので、チョマの報告は見逃せなかった。

念願叶って、ようやくカルカッタに辿り着いたチョマは、ペンガール・アジア協会に保管されていたナルタン版チベット大蔵經の調査に、その精力を傾注した。彼の調査報告を、ウィルソンがまずはすることになる。¹⁰¹⁾また、チベット史料の取り扱い方についても、夙に高い評価をうけていた。¹⁰²⁾ついでに、ビュルヌーフが見たであろうチョマの業績を集めた便利な書物があることを紹介しておきたい。¹⁰³⁾

ビュルヌーフが、チョマと直接に文通交渉を持ったか、あるいは持とうとしたか、審らかにできない。しかし、他人を介して資料の入手を試みたような形跡はある。たとえば、ホジソンがビュルヌーフに宛てた書簡に、チョマが他の人たちの労苦の果実を取って逃げさると疑っているし、一般的に疑われても仕方ない節はあると伝えているのである。古今東西の学問の世界によく見られる、胸の痛む話ではある。¹⁰⁴⁾

ところで、チョマの若い頃のことについては、長い間、不明の点が非常に多かった。¹⁰⁵⁾最近の研究で、その不明の部分が、いろいろと明らかになってきている。例えば、チョマがゲッティンゲン大学に留学していたことは知られていたが、その詳細は判然としなかった。やっと最近になって判のようになった。この地への留学(1816年4月11日から1818年7月末まで)が、チョマをチベット学の先駆者へと方向づけるのである。その指導教官が、イェーナ大学の東洋語担当教授からゲッティンゲン大学の哲学教授として、1788年に赴任していたアイヒホルン¹⁰⁶⁾(Johann Gottfried Eichhorn: 16. X. 1752-27. VI. 1827)で、チョマに大きな影響を与えた。

ビュルヌーフが、シュミット(Isaac Jakob Schmidt/Jakov Ivanovič Šmidt: 1779-1847)の報告にも非常な関心を示したことは、著作からしばしば伺い知ることができる。ロシアとフランスの都の距離は、今よりも短かかったかもしれない。しかし、また、この筆を執る間も、事情は急激に刻々と変化している時代となっており、歴史は動いているが、何はともあれ、植民地主義の副産物であったかどうかは別としても、列強の中央アジア研究の成果は大変なものであった。¹⁰⁷⁾シュミットについても、興味深い記事がある。¹⁰⁸⁾

ビュルヌーフ・セナールー中期インド語

ビュルヌーフの知識欲には、驚くべきものがある。彼の「序説」を見ても、その出版間際にもまだ新しい文献資料に怠ることなく目を通していたことが判る。原資料への強い関心は、書誌学的文献を彼自身もよく集めていたことから知ることができよう。¹⁰⁹⁾

上にもしばしば触れたように、インド・イラン古典文献学に精力を傾けていたユー・ジェーヌ・ビュルヌーフにとっては、仏典のアジアでの拡がりは驚嘆に値した。中でも、カトマンドゥ

のホジソンからの種々の報告は、パーリ語研究に熱中した彼をも驚愕させるに十分であった。しかし彼にパーリ語研究という過去の業績がなかったら、どうなっていたことだろう。その後のフランスの印度学仏教文献学者たちのほとんどすべてがパーリ語の習熟者として出発していたといっても、過言ではあるまい。いや、それを承知でパーリ語の修得を心がけたに相違ない。その好例が、先のフェールやセナール (Émile Charles Marie Senart: 26. III. 1847-21. II. 1928) であった。

ところで、セナールが、よくビュルヌーフの弟子と誤解されているが、前者が1847年生まれで、後者が1852年没であるから、直接に薫陶を受けたとは言い難い。ただ、強く影響を受けたであろうことは、想像に難くない。ビュルヌーフに始まるフランスの印度学仏教の伝統を、ここに見るからである。セナールが最初に西洋古典学を志し、若くしてゲッティンゲン大学のベンファイの許に留学したことや、さらにカッチャーヤナの文典を僅か24歳で公刊したことなどは、彼の業績を知る上で見逃せない。¹¹⁰⁾のちにマハーヴァスツ・アヴァダーナの研究に打ちこんだことを思うと、宜なる哉と理解できよう。中期インド語・説話文学に関わる基礎知識あってこそである。この意味で、確かにビュルヌーフはセナールの師であったかも知れない。¹¹¹⁾そして、ビュルヌーフが、恐らくは中期インド語の総合的な研究を夢見つつ果せなかったことが、ようやく第2次世界大戦前後のパリに、華を咲かせるようになるのである。

ここに、中期インド語研究史を述べる余裕はないが、ブロック (Jules Bloch: 1. V. 1880-29. IX. 1953) の名は記しておきたい。最近、幸いにも、注意深く編まれた彼の論文集が出た。¹¹²⁾そして、彼に関連して、パーリ語文献学のためにも、一言だけつけ加えておきたい。

そのブロックが活躍した当時のパリに数年を過ごして、彼と深い友情を結び、中期インド語、なかんずくパーリ語の研究に貢献したスウェーデン人こそ、スミット (Helmer Smith: 26. IV. 1882-9. I. 1956) である。その彼が、コペンハーゲンのアヌルセン (Dines Andersen: 26. XII. 1861-1940) の目に適い、「批判的パーリ語辞典」の編集協力を依頼され、ついで1940年以後、編集者として手腕を発揮することになるのである。なお、スミットは、あれ程の博識と学殖に恵まれながら、アガヴァンサの文法を解明した精緻な大冊の著作もあるが、¹¹³⁾惜しいかな寡作の学者であったといえよう。彼の略歴と著作については、上記の辞典を参照されたい。¹¹⁴⁾

そして今、パリは、中期インド語研究の中心であることに異論を唱える学者は少なからう。最近の国際的活躍まで含めて、パリでの研究成果には目を瞠るものがある。たとえばパリで最近開かれた学会の紀要は、17篇の興味深い論文が掲載されていて、今後の研究者に欠くことのできないもので、ここに記した事実をよく物語っている。¹¹⁵⁾

アジア協会と仏教梵語文献

ビュルヌーフが、パリのアジア協会 (Société Asiatique) の書記 (いわば事務局長職:

Secrétaire) の地位にあったということは、梵語仏典と彼のことを語るのに欠かすことが出来ない重要事であると思われる。正しくは、1826年4月27日の選挙で、ガルサン・ドゥ・タン (Joseph Héliodore Sagesse Vertu Garcin de Tassy: 20. I. 1794-2. IX. 1878) に代わって、書記補 (Secrétaire-adjoint) になる。このことは、協会の内の面倒な政治も絡んでいたらしく、創立百周年記念の書にアジア協会誌の編集長 (Rédacteur) であったフィノ (Loius Finot: 20. VII. 1864-16. V. 1953) の文面からも伺える。¹¹⁶⁾ 因みに、百周年記念当時の会長はセナルである。

有能だから選ばれたに相違ないと思うが、24歳の彼には、多くの大先輩たちに囲まれて、さぞや精神的に荷の重いことであつたらう。1826年は「パーリ語試論」が出たばかりの時、ボンに戻っていたラッセンに宛てた1826年5月8日付の書簡に、該書を何冊か発送したことを知らせるついでに、突如として皮肉とも取れる一文が出て来る。この辺のことを何か匂わせている気がしてならない。筆者の力では、彼の本意をうまく伝えかねる。引用だけしておこう。¹¹⁷⁾ 下種の勘繰りなのかも知れない。なお、「パーリ語試論」に関していえば、周知のように、次の年には彼一人でその補遺を出版している(上記註75参照)。

どうも彼の任期の初めの協会運営は、決して円滑に行つたとは見えない。1830年の総会(5月3日)でビュルヌーフがいわば暫定的に、さらに2年余を過ぎた1832年9月3日付で正式な書記(事務局長)となる。¹¹⁸⁾ しかし正直に言って、この話は、フランスの過去2世紀余の歴史にまったく暗い筆者には、少々むずかしすぎるようだ。現に、1832年2月20日付のポップ宛の書簡には、「アジア協会」用箋を使って、署名の肩書に、正しく「協会書記」としている。また、ビュルヌーフのアジア協会への書記としての報告は、1836年度になされているのである(前掲書、50頁参照)。

アジア協会で種々の事が起きている間に、ビュルヌーフは1829年にいわゆる師範大学 (École Normale) の言語学担当教授となり、一般文法・比較文法を講ずる。そして、3年後の1832年にコレージュ・ドゥ・フランスの初代梵語学教授シェズィがコレラ大流行の犠牲となって斃れると、直ちにその後を襲う。彼の学問的関心は極めて幅広いもので、その後のフランスのインド学・イラン学・仏教学等々の分野に与えた影響は量り知れないものがある。仏教文献学ひとつ取っても枚挙に暇がないことは、人の周ねく知るところである。何といってもビュルヌーフにとっては、人文学・文化学 of 構築が、最重要な課題であつたと、私は信じている。極論すれば、恐らく原典の翻訳・研究は、その補助手段であつたかも知れない。原資料での証左をもって文化史を築く。これが、彼の方法であり、目標であつたと、私は見る。これが、フランス仏教学の伝統となつたと、私の信ずるところを繰り返して述べたい。それは、現在の我々にとつても、仏教文献学と仏教文化学との往復 (disciplinary intercourse) の範とすべきものであると思う。このような背景を知って、特にビュルヌーフの法華經のフランス語訳という、偉大な

業績を見ると、興味も一入深いものになると思う。

先にも述べたように、ホジソンの報告類は、西欧の学界を驚かすに十分であった。ビュルヌーフも興奮した。躊躇した挙句に、ホジソンに書簡を認める決意をする。たしかに彼の地位、なかならずアジア協会の書記職が、カルカッタのアジア協会などとの連帯感をもって、交渉に当たれるという利点を持っていたに相違ない。仏教への関心が、募って行きつつある時でもあった。

しかし、ビュルヌーフがパリからカトマンドゥのホジソンに宛てた最初の書簡と思しきものは、1834年7月7日付である。彼の書簡は大体にして長い。書簡全文を引用することなどは、不可能である。この手紙はまず、インドの文献に親しむすべての学友に、ホジソンがなされていることへの感謝の気持ちを述べることで始まっている。ところで、その文中に「わたし個人の名で“en mon nom personnel”」と言っているのは、「わたし個人として」と言うのではなく、何かわざとらしく見える。穿った見方と叱られるかも知れないが、文章のところどころに散見される歯切れの悪い表現は、パリで物事が思うに委せないが多かったからではなからうか。筆者には、そう思えてならない。フランス語の力不足の筆者には誠に歯痒く残念至極だが、彼の書簡の文脈をうまく伝えることなどとても出来ないの、賢明な読者が、直接に原文に当たることを願う。

例えば、写本を送って貰うのに、その最初の頁に、ビュルヌーフ宛と明記してくれるよう、さもないと写本はどこかへ行ってしまふからとお願いしている件がある。¹¹⁹⁾これに類した表現は、ここかしこにみられるが、これとても配送の関係だけではあるまい。しかし、筆者にとって最も興味を惹くことは、ビュルヌーフの関心が仏教にかなり傾いている時に、「梵語」仏典の存在を確認したことであり、それを極めて卒直に、その同じ書簡の中でホジソンに書き記していることである。余談であるが、このビュルヌーフの言葉が好きでたまらず、学究者の感激の銘として常に筆者の心に刻みこまれている。¹²⁰⁾

あとでも触れることもあろうが、学的好奇心に満ちみちていたビュルヌーフが、直接間接の文献資料から、梵語仏典の存在に全く知る所がなかったとは考えられない。現に、ラッセンとの共著「パーリ語試論」の中でも(同書、註83参照)、彼らは梵語仏典について、初めはパーリ語であったものが、後代の哲学的発展によって梵語が採用されて行くようになった、と説明している。¹²¹⁾それは当時としては、画期的な理解だといえる。その後の学問的議論に大きな刺戟を与えた貢献度を、正しく評価すべきである。インド仏教徒の用いた言語については、いまだに未解決の問題が、実はきわめて多いのである。ここで深く立ち入る余裕はない。本格的な研究は、あるいは、いま軌道に乗った所と言っても過言ではあるまい。¹²²⁾この問題を、短絡に考える向きもある。¹²³⁾正しく学問的に見ようとするならば、我々はベルリンに活躍して内外に影響力の大きかったヴェーバー (Albrecht Weber: 17. II. 1825-30. XI. 1901) の、中期インド語の形成に

関する理論 (1853年) に、最大の関心を示すべきであると、筆者は固く信じている。彼のこの理論が、1852年春に世を去ったビュルヌーフの目に触れて、直接に影響を与えるはずもなかったと思うが、ひそかに何かを他の論考から得て、考えを巡らせていたかもしれない¹²⁴⁾。

さて、ビュルヌーフにしてみれば、かかる梵語仏典の写本類を、無難に入手したかったであろう。上記の書簡で、最も重要と思われる梵語仏典を手許に置いて翻訳したい旨、切々とホジソンに訴えている。謙虚な態度に驚く¹²⁵⁾。彼の興味は、1日も早く原典を得て重要な部分を翻訳し、分析し、仏教 (文化) 史を書くことにあったのではないだろうか。ドイツやイギリスの言語学・文献学に多くを学びながら、フランス独自の学風を生む訳である¹²⁶⁾。フランスの仏教研究に対する他国からの批判にも、耐え難いものがあったのだろう。ホジソンに宛てた書簡にも、その辺りが伺えるように思う¹²⁷⁾。

法華經の梵語写本のパリ到着

残念ながら、ホジソンの書簡類などが眠った状態にあり十分に目に入ることがないので、ビュルヌーフの手紙に対しての返事の内容を確実に知ることはむずかしいが、1837年4月20日頃には、法華經を含む24点の梵語仏典がパリに届いているという、直接間接に証しになる幾つかの関係文書がある。

ビュルヌーフ自身が、1837年6月5日付のホジソン宛の、例によって長い書簡で、同年4月20日頃までには、24点の貴重な写本が到着していたことは確かである¹²⁸⁾。手紙に見られる4月20日頃の書簡の見当たらないのは、非常に残念である。何はともあれ、このビュルヌーフ書簡の日付から、1837年4月には、24点の仏教梵語写本がパリに到着したことに誤りはないと¹²⁹⁾思う。レオン・フェールの努力によって成った目録にも、貴重な資料の片鱗が伺える。つまり、フェール目録第69番第1〔第1~12葉〕¹³⁰⁾がそれである。ちょうど7ヶ月かけて、カトマンドゥからパリに届いたことも知られる。結構早いと思うが、頼んだ側からすると、随分待った気もしただろう。

その中の梵文法華經写本が、最近移転したアジア協会図書室に、さりげなく保存されている。東洋学系の機関・図書室のあるコレージュ・ドゥ・フランスの建物 (52, rue du Cardinal le Moine, Paris V) に同居していて、研究者にとっては便利であろう。

また、フェールの目録の第53番の記述に見えるパリの国立図書館の2写本は、ビュルヌーフがアジア協会所蔵写本を底本にして、すでにフランス語訳を終了した後に入庫したものであることを明言している¹³¹⁾。ビュルヌーフはこの2点を閲覧しているが、翻訳に直接利用はできなかった。注記に生かすことで十分に活用したのである。彼の注意深さは、注記を見れば一目瞭然である。ビュルヌーフの法華經仏訳は、それ自身、筆者は常に参考にすべきものと高く評価するが、彼の注記がさらに値打ちを倍増している。

ついでながら、ビュルヌーフの校合体はフェールも詳しく触れている通りであるが、現在も国立図書館東洋写本部に保管されているので、少し加えれば、罫線のある縦横 14×21.5cm. ほどのカード式の紙に、活字のように美しいデーヴァナーガリー字体で書写し、2本の異読を記録している。これが165枚。166から190枚までは少し大きめの紙である。恐らくは、後に入手して、いま国立図書館所蔵の法華経梵本2点との校合を始めた跡を示す遺稿である。フェールは、この校合は、第3章の終り（アジア協会写本の248葉中の56葉裏）までというが、筆者は急いで見たので、177葉とするのが正しいかどうか、もう一度確かめるまでは断定できない。191から204枚は、いわゆるフルスキャップ大のノートで、他の原典の紛れこみである。いずれにしても、彼の字の美しさには、魅了されてしまう。

どこかにビュルヌーフが記録しているのを、多分に筆者が見落しているのかも知れないが、彼がロンドンのホジソン写本を校合したことに間違いはない。すなわち、ビュルヌーフが註記に「ロンドン写本」と称して引用するものは、後にカウエル・エッグリング兩名の手になる目録に出て来るものに相違ない。また同じく、注釈の中でよく引用されるホジソンの2写本は、1854年12月5日の競売に付せられた目録中のもので、後にパリの国立図書館に入庫したものにほかならない。ビュルヌーフは、パリの3本のみならず、ロンドンのアジア協会所蔵の写本も参照しているということになる。翻訳の印刷終了後に書いた註の中に、存分に活用している。これらは、すべてホジソンの入手した写本である。ビュルヌーフがホジソンに、心から感謝することが、おのずと理解できよう。この「ロンドン写本」とビュルヌーフが称するものを、南条文雄とヘンドリック・ケルンが底本（写本A）として彼らの校訂本に用いた。

ロンドンのホジソン本として、ビュルヌーフが註記によく引用する写本が英都の王立アジア協会所蔵のものにほかならないと信ずるに足るもう一つの理由は、ビュルヌーフの「ロンドン本」を閲覧希望に対しての、1839年5月21日付のロンドンからのウィルソン (Horace Hayman Wilson: 26. IX. 1786-8. V. 1860) の書簡にある。やっとなし出した写本を、今度は送るのにも、係が奇しくもパリへ行っているところだという、皮肉な話なのである。それは短い返事である。¹³²⁾

ところで、すでに1833年に帰国してオックスフォード大学の初代梵語学教授になっていたウィルソンもまた、周知のように、初期の印度学仏教学を飾る一人である。彼は初め東インド会社の医師として弱冠22歳で赴任し、梵語を修得して次から次へと業績を発表するだけでなく、プリンセップの活躍に先立ってカルカッタのアジア協会の書記を務め、1811年には会長となってその博識をもって指導的立場にあった。チョマのナルタン版チベット大蔵経の調査・公刊などを督励していたことなどは好例である。しかし、上記書簡からは、ウィルソンとビュルヌーフとの間に近しい交際がなかったように見受けられる。ただ、後者が法華経の写本のお願いをした手紙を出していることに間違いはない。¹³³⁾

ビュルヌーフがイギリスにかなり長い期間滞在したことがあるが、それは彼が法華經に巡り会う前である。しかし、その折の知己が、ロンドン本との校合を可能ならしめたのかも知れない。ビュルヌーフの書簡で見る限りでは、イギリスに1835年4月頃から数か月滞在したかと思わせる。これは一人旅であったようである。オックスフォードでウィルソンにも会っている。こまめに夫人にも、日記のように長い手紙を送っている。

以上の次第からも明らかなように、ビュルヌーフのフランス語訳法華經を、第1部の翻訳だけに頼ると、彼の真意を掴みそこねることが多い。注記で本文の翻訳に訂正をしばしば加えているからである。最初の訳の方が、今としてみると良い場合もあるが。¹³⁴⁾

前に掲げたハンターのホジソン伝にも、この24点に関して知ることが出来る。書類の年月日の相違は、互いの記録文書の日付の違いによるのだろう。¹³⁵⁾ パリのアジア協会は、この1837年のホジソンの好意に対して、メダルを贈るよう同年10月13日の総会で決めている。¹³⁶⁾

これら3写本のうち、ビュルヌーフが最初に手にして精力的な翻訳の底本にしたのが筆者が写本“Pc”としたもので、古い写本ではないが、他と異なる読みが時に見られる。しかも、他の写本を、ビュルヌーフは翻訳・印刷完了までに参照できなかったのである。彼は註を記す時にはじめて参照することができたのである。研究者にとって写本Pcがいかに不可欠の資料であるかが判ろう。

くどいが、ビュルヌーフの翻訳はきわめて優れたものである。注記も多くの示唆に富む。この極めて重要な意味をもつアジア協会所蔵の写本が、立正大学法華經文化研究所の貴重な写本集成に欠けているのは、誠に遺憾の窮みである。ビュルヌーフの翻訳の相違点を、誤って論うのを見ることがあるが、実は彼は忠実に正しく訳しているのであって、後に他の写本からの重要な異読を註記していることも忘れてはならない。幸いに、東北大学を中心にローマ字本として集成した最近の出版には、アジア協会本が含まれていて非常に便利である。しかし、原写本の見られないのは何とも隔靴搔痒の感を免れない。何とかパリのアジア協会本の覆刻を期待したい。また、東北大学の貴重な企画の一日も早い完成を、祈らずにはいられない。

この種の作業は、労多くして、なかなか成果に対しての酬いが少ない。ついでながら学界の反省を促したい。幸いにこの東北大学の企画は、大型電算機を駆使しての成果である。それだけにまた、より正確な資料を記憶させる必要がある。なかならず、将来の文法的解析や異本系統図の検討には、不可欠の資料の結実が期待されるからである。

若くして夭折した逸材バルーフ (Willy Baruch: 1900-21. II. 1954) が、故国を密かに逃れて、パリに在って苦しい生活を余儀なくされていた最中に、当時ヨーロッパで入手できる法華經梵文写本の校合をすべて済ませていたのである。彼が、恐らく意図していたであろう上記のごとき作業を目前に他界してしまったのは、余りにも悲しい政治の犠牲である。バルーフの校合ノートは、今もなお、パリのアジア協会の書庫に眠らされている。これを活用する協同研究

企画がどうして出なかったのだろうか。¹³⁷⁾彼の死後暫くしてから、未亡人が亡夫の「法華經」校訂本をアジア協会に寄贈したと言われているが、実際に何であったか詳らかにしていない。この法華經梵本の校合ノートのことであろうと思う。¹³⁸⁾なお、彼が「賢愚經」の藏蒙文（第52章）の校訂本を作成したりもしていることを、ついでに書き止めておこう。

ビュルヌーフの法華經翻訳

さて前述のように、1837年4月20日頃に、法華經を含む24点の梵語仏典の写本がパリに届いた。ビュルヌーフはその25日頃には、直ちに法華經の翻訳に取りかかっている。¹³⁹⁾彼は恐らく、いうまでもなく翻訳の傍ら、綿密に註を記していたに相違ないと思う。しかしその註記は、翻訳本文の印刷終了後も依然と続いたことが、彼の色いろな人への手紙から伺える。実際に、彼の註記がパリの国立図書館に保管されている。幸いに、フェールが、例によって詳しく第2部として刊行された「補遺」と比定している。¹⁴⁰⁾なお、これもすでに述べたように、彼の関心は他の梵語仏典にもあった。法華經梵本の他の写本も欲しいし、他の經典にも触手は伸びていた。¹⁴¹⁾また例えば、八千頌般若の翻訳を同じ年の11月14日に始めているが、302葉中の207葉で止まっている。彼にしてみると、この般若經の重要な部分は、資料として十分に得たと考えていたのだろう。これら典籍の文献学的研究は、彼の後継者たちによって受け継がれて一つの完成を見たものもあれば、フランスの内外の諸学者によって着手されながら、未だに完成に至らない典籍もある。

ビュルヌーフの法華經に対する極めて強い興味は、しかし、死ぬまで尽きることはなかった。ネパールにおける九宝の一たる法華經のフランス語訳に、大学と学士院の仕事の外は、専心することになる。梵語写本が届くや、その5日もしたら翻訳の仕事を始めたと、ホジソンに同じ書簡の中に認めている（上記注138参照）。筆者は今でも、ビュルヌーフの翻訳が、現代語訳の中で最も優れたものと信じている。彼の翻訳には、時に、実に深い理解を見出すことが多い。しかし、注意すべきこともある。彼は、アジア協会に入った24点の中にあった法華經の一写本を底本に、文字通り一気に翻訳する。当然のことであるが、他処に写本のあることを承知しながら、一つの写本で安心して研究・翻訳できるものではない。いうまでもなくこのことは、ビュルヌーフも既にその翻訳中に気がついていた。落ち着かない彼は、先のホジソン宛の書簡でも、しばしばお願いする訳である。他の原典についても同じである。掛かる費用などについて、木目細かなことまでも、いつも書き添えてあるのが印象的である。

ところで、一気に翻訳したと、いとも軽々しく述べたが、批判校訂された底本をもってしても、我々は現在、困難を窮めるのに、写本から直に翻訳する訳だから驚愕するほかない。天才的な仕事といっても過言ではあるまい。

このことは、ケルンの法華經英訳にもあてはまる。後者の場合には、すでに前者の仏訳があ

ったとはいえ、それだけに難しかったともいえる。それにしても、法華經梵文がヨーロッパの現代語に訳されているのは、ビュルヌーフの仏訳とケルンの英訳しかないというのも驚くべきことである。しかも、両者ともに前世紀の産物なのである。¹⁴²⁾

ここでケルン (Johan Hendrik Caspar Kern: 6. IV. 1833-4. VII. 1917) について詳しく触れるつもりはない。ただ、若干の参考文献を書きとめるに止めておきたいと思う。¹⁴³⁾ この点からも、ケルンの未刊の書簡類の出版を大いに期待する。覗き見趣味からではなく、たとえばわが南条文雄と梵文法華經の校訂本を共同編集した事情をもう少し詳しく知りたいが、思うに委せないからである。周知のように、前掲の「懐旧録」で南条は、ケルンとの長い間の学術的な親交はあったが、会う機会を遂に得なかったという。南条自身の語るところも寡少である。あるいは日本側に隠された資料があるかも知れない。¹⁴⁴⁾

ついでながら、いま読み易さを主眼にした梵文法華經のスペイン語訳やドイツ語訳を企てている学者もいるという。「読み易い」と「学術的な」翻訳を試みるというのは、まさに言うは易く行ないは難しである。一日も早い完成・刊行が望まれる。ある意味で、東アジア、特に日本における法華經の重要性から、梵本からの翻訳が、どちらかというと蔑ろにされてきた嫌いがあると思う。梵文法華經の研究は、いろいろな系統の写本の発見によって困難度を増してきていることも確かであるが、避けて通れるはずはない。

再びビュルヌーフとホジソンと

ビュルヌーフとホジソンとの友情は固く結ばれていた。自分の研究状況などについて、パリからカトマンドゥへの長い書簡に事細かに綴っている。法華經の翻訳進行状況も、手に取るように分かる。1837年7月15日付の手紙も、相変わらずの長文である。写本を入手してまだ3か月と経たないうちに、半分以上も翻訳してしまっていたようである。

法華經の中の仏の説法の仕方に、非常な関心を覚えたと見える。いかに多くの典籍に既に目を通していたかが伺える。彼の書簡に「24点」という数字がしばしば出て来るのは、筆者の目には、仏教典籍をもっともっと読みたいとの遠慮しながらの遠回しの意志表示に見えてならない。病気の治る頃には、法華經翻訳の仕事も完了するものと睨んでいるが、その後は思うに委せなかったとみえる。ビュルヌーフが「先回の手紙」というのが、先に引用した6月5日付のものか定かではない。もしやその間に書いた手紙があって、散佚してしまっていたとしたら、誠に惜しい限りである。¹⁴⁵⁾ 同じ書簡の中で、また他の写本が欲しいと、法華經を含めて11点を挙げて訴えている。当然のことながら、内心は各典籍ごとに複数の写本が欲しいのであろうから、その数は二、三倍になろう。何はともあれ、ビュルヌーフが法華經に燃やした執念には驚く外ない。¹⁴⁶⁾ 1837年10月27日付の書簡は、どうやら上記の7月15日付のもの以来のことらしい。病気のために1か月も全く仕事が出来なかったと言いながら、仕事の進行状況の報告の怠りが氣に

なっていたのだろう。

ビュルヌーフにとっては、まずは法華経である。この經典に魅せられていた。大仕事である。それにしてもアジア協会所蔵の梵本は、全部で248葉である。この10月末の手紙に、その内の233葉を遣りこなしと認めている¹⁴⁷⁾。この長い長い書簡の中に、ビュルヌーフがいかに法華経に魅せられているかが、読む人に伝わって来るようだ。しかし、この書簡集による限り、残り15葉を遣したまま、2年弱のちまで音信不通である。1839年7月21日付の信書では、他の仕事にも随分と精力を傾注していたようにも見える。法華経については、早く解放されたいと言いつつ、本として上梓される時の標題を想わせることも記している。出版の見通しもついてきた。おそらく、ここにきて初めて、梵語名からのフランス語訳名が見える。「白蓮華 (Lotus blanc)」の「白」は、出版時にはなくなったが。

翻訳の完了したことを知らせる手紙は、実に1839年11月29日付である。終了しても、まだ彼にとっては、他の写本との校合の出来ないことが悔やまれてならなかった。残念なことに、他の法華経梵語写本との校合は出来ぬままに、原稿を印刷屋に回すほかなかった。そして、印刷が終了してもなお心残りは、一写本にのみ頼らざるを得なかったことであった。

ホジソンへの印刷完了を知らせる書簡は、1841年10月28日である。何か恨めしさを感じさせる手紙ではある¹⁵⁰⁾。出版できる寸前まで来ているのに、ビュルヌーフは詳細な解説を書き加えたかった。

ビュルヌーフは、翻訳の最中にも、法華経に限らず、膨大な量の研究成果を書き留めている。時にはその全てを、時には一部を、時には一部改稿したものを、さらには新たに書いたものを、訳書に付すことにする。この仕事に終わりはない。際限のない仕事であった。1852年2月16日付の、当時の「大英帝国の印度」の保養地ダージリンに在ったホジソンに宛てた書簡——思えば長い間、音信が途絶えていたのだろうか——は、非常に長文のものであるが、附録で訳書がどんどん膨らんで行く様子を、英語で「チョイトでっかすぎる (rather bulky!)」と茶目気も混じえて記している。同じ手紙の中で、仏教研究の創設者たるホジソンに、該書を献呈させて戴ければ有り難いと、きわめて丁重に、また謙虚に、お願いしているのがまことに印象深く、感銘を覚える¹⁵¹⁾。その通りに、ビュルヌーフは法華経の翻訳をホジソンに捧げた¹⁵²⁾。初版の印刷はきわめて美しいが、非常に稀覯書であることは想像に難くないであろう¹⁵³⁾。

さて、上に見たビュルヌーフの書簡類は、非常に興味深く、学史的にも重要なものであるが、我々の目に触れるのは、編者フェールに負うところがはなはだ大である。事は言うに及ばないが、ホジソン自身の協力も忘れてはならない。実は、これらの膨大な書簡は、パリの国立図書館の（西洋）写本部に羨ましいほど丁寧に保管されている。ホジソンに宛てたビュルヌーフの最後の手紙は、前者による忠実な書写によってパリに送りこまれていたのである。それは、同写本部の「ビュルヌーフ父子書簡集」の第10巻に収められている¹⁵⁴⁾。ホジソンは、これが本書の

写し(true copy)であると、署名入りで証明している。ついでながら、この第10巻にはホジソンの書簡が多く、20数通に及ぶが、悲しい哉、素人の筆者には梵語写本を解説するよりも困難事に思えた。時間のかかる仕事でもあろう。専門家の輩出を願う。学史の上で必ずや面白い発見があるだろう。ホジソンが初めてビュルヌーフに宛てた書簡は、1835年2月20日付のネパールからのものらしい。この書簡の端に、若きプリンセップ (James Prinsep) が、ヤシュナ注釈書を貰った礼を書き込んでいるのも興味深い。後者の知られざる一面であろうか。なお、第9巻には、ウィルソンが、テュービンゲン行き途次にある学生に、パリで梵語を勉強させたいなどと記した書簡もある。この学生は、もしかして後に英国で名を成した学者かも知れない。誰だろうか。

再び法華經の写本と翻訳・出版・続版

どうやらビュルヌーフがのちに入手していた2本は、一たんは彼の私有物となつてから、国立図書館に引きとられることになった形跡もある¹⁵⁵⁾。残念ながら、ホジソン宛の書簡からは、写本の送付の件がもう一つはっきりと掴み難い。しかし、ビュルヌーフが法華經梵文写本2点をさらに追加して送って貰っていたことには、間違いはない。彼の書簡には新しく書写して貰うという言葉がしばしば出て来るので、恐らくは当時金子を出して書写させたものと思われる。ビュルヌーフ蒐集本第100番の日付は、およそ1826ないし27年頃であるから、彼の依頼によって書写されたものではなく、既にあったものを購入したことになるだろう。(写本の年代算出方法は、学者の間にもまだ異論も多い。また信頼性はともかく、興味深い資料も最近になって発見されている。更めて機会を得て書誌学的な報告をしたい。)

ホジソンの仏教学のために果たした役割の大きさは、確かに測量り知れないものと私は信じて疑わない。何と云っても、同時にビュルヌーフなかりせば、仏教文献学は疑いもなく、もっとも遅れて出発していたと思う。

さて1852年2月16日付の書簡が、ビュルヌーフからホジソンに宛てた、恐らくは最後のものとなつてしまったと思う(上記注151参照)。ビュルヌーフは、結局、法華經の翻訳本文の印刷完成を、10年余も前に目にしておきながら、附録等の完成を自ら満足して完成すること能わず、長逝の旅に発つてしまった。最終的な編集は、彼の良き弟子達が引き継ぎ、その年の内に世に出る。先に述べたモールが「諸言」を書く(上記注153参照)。

1925年の再版は原形を留めながら、かつてのビュルヌーフの席にあった碩学シルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi) が「序言」を書いて¹⁵⁶⁾いる。1973年の覆刻版では、どうしたことか、レヴィの序言が省かれている。惜しいと思う。シルヴァン・レヴィは、その経歴・業績ともに日本人に馴染みが深いので、紙数を超過するのを恐れつつ、主要な参考文献のみを補注として挙げておきたい(補注三)。¹⁵⁷⁾

ビュルヌーフは、その法華経仏訳の註記に、パリのアジア協会本の読みを他の写本によって置き変えるべきであると、しばしば書き加えている。それには、他の典籍に証左があるといったふうに、いとも簡単に見えるような訂正を施す。そこかしこに彼の自信のようなものを感じとることができる。例を一つ挙げてみよう。またこの読みは、ロンドン本にも(パリの)¹⁵⁸⁾2本とも違う、と言ったりもする。¹⁵⁹⁾これはいとも簡単なことにみえるが、先にも触れたように、ビュルヌーフの翻訳を読む上で極めて重要なのである。つまり、この写本は新しいものであるにも拘わらず、特異な読みをしばしば見せるのである。このパリのアジア協会所蔵写本の重要性も理解できよう。

まったく筆者の想像に過ぎないが、この辺の事情をビュルヌーフは、最後に、「はしがき」にでも、きちっと書く積りがあったのではないかと思う。彼の法華経翻訳の第2巻である附録(Appendice: *Mémoires Annexes*)の論考は、完了していないのである。先に引いたホジソン宛の最後の書簡に、808頁にもなってしまったとあるが、それから逝去するまでのわずか3か月ほどの間に、また数十頁を軽く書いているのである。現に、第2巻の論稿の22番目は、未完成のままになってしまった。

その前年夏の1851年8月1日付の従弟エミール宛の手紙には、病気がちで思うに委せぬ辛さを切々と弱気に綴っている。しかし、ちょっとでも快方に向かえば筆を執ってしまう様が手に取るように読みとれる。その手紙でも、700頁に抑えたいと念じていることを伝えただけなのである。驚くべき筆の早さである。¹⁶⁰⁾

さらにビュルヌーフの遺稿の中に、1837年に書き始めたもので、1851年に改稿しようとしていたらしい原稿がある。これは、彼がどうしても書き上げたかったものと思う。というのは、ホジソン等にもよく洩らしていたものである。我々も読めないのは残念である。書いている間も、彼は貪欲なまでに内外の学者の成果を吸収し、得られる研究資料を漏れなく渉猟していた。まことに驚異というほかない。あれ程の力がありながら、また実に謙虚な学者であったと思う。時間が許せばもっともっと論稿を書き続けて、一向に法華経の「翻訳」が世に出なかったかもしれない。それほどに彼の附篇には際限がない。

一方で、しかし、ビュルヌーフも、翻訳主文は完成しているのであるから、その出版には楽観的でもあった。印刷の完了が、1841年10月28日付のホジソン宛の書簡にあるから、1841年4月9日付のペンファイ宛の手紙には、1年もしない内に出版して贈呈できようと言っているあたり誠におもしろい。¹⁶²⁾ところがその後、1年余りを経てしまい、ペンファイ宛に筆を執る。1842年4月30日付の書簡である。法華経仏訳の印刷は完了したものの、すでに原稿にはなっている註は欠けているし、将来まだ論考も追加しなくてはという。この仕事への没頭ぶりが見られる。¹⁶³⁾ビュルヌーフは、この後、法華経の仏訳について、少なくとも現存するペンファイへの書簡に触れることがない。

仏教梵語典籍については、ビュルヌーフは、ドイツの学者に余り語っていないように思う。その中で、ゲッティンゲン大学の初代梵語学担当教授ベンファイには、かなり興奮して書いているのが面白い。ベンファイも興味を持つだろうと推察したのかも知れない。だとすると、これは極めて興味深い。その後のゲッティンゲンに見られる仏教学への強い関心は、あまりベンファイの労作では知られないが、実は彼も持っていたとも考えられる。セナールがベンファイの許に留学したことも、こんな背景をみると容易に肯けるようになる。さて、短い生涯の晩年には、ビュルヌーフの闘病生活の苦しみが、親しい者への手紙から痛いほどに読み取れる。叔父のシャルルや従弟のエミールに宛てた書簡には、学問的な話題は少なかった。しかし、1851年頃からエミールに法華經の出版に関する件も散見されるようになる。彼にしてみれば、遅々として進まない苛¹⁶⁴⁾ちが募って来はじめたのではないだろうか。従弟エミールには若干の遠慮があっても、気は許せる。

ビュルヌーフにしてみれば、満足に行く結果を確かめることなく、長逝してしまいそうな不安と無念さがあつたらう。しかし、法華經に異常なまでの情熱を傾けたことは、以上からも伺い知れよう。彼が他にも多くの業績を残していることを忘れてはならない。本稿では、それらに殆んど全く触れることが出来なかったが、彼の遺稿・書簡集や著作目録を見ても、その幅の広さと奥の深さに、誰も驚くに違いない。何度も繰り返すように、ビュルヌーフの法華經翻訳が、一人で成したのものとして、もっとも優れた現代語訳であると私は評価している。法華經の梵本を読む時に、問題に突き当たったら、ビュルヌーフの翻訳と注記を参照すれば、必ず得るところがある。彼の理解がもっとも正鵠を射ていることがしばしばある。ビュルヌーフの法華經の翻訳・注解・関連論稿の値打ちは、いまだに失われていない。

しかし何といっても残念なことは、彼の法華經仏訳の原稿が見あたらないことである。彼の手になる美しい法華經梵本の書写はあるが、翻訳原稿は国立図書館にも、学士院図書館にも見出すことができなかった。どこかに眠っているのであろうか。

おわりに

ビュルヌーフを知るためには、その前後の背景も知る必要があると思ひ、つい余分な事を述べて、却って彼自身の業績等についての記述が疎かになってしまったと反省している。しかし、彼のような天才的な学者の独創性も、同時に先達や同僚などに負うところも多かったことを書きたかったのである。学問の急速な展開は、あるときには歴史的必然性をもっていて、それだけに唯一人で出来上がるものではない。

18・19世紀の欧米(なかんずく西欧)には、国際政治の種々の確執もあった。個人的な感情に左右されたこともあつたらう。ドイツの宣教師とイギリスのカルカタ在住学者との関係等は、その好例であらう。しかし一般に、学問の上では、総じて国際的な協力によって、研究者

たちは決して疎遠な関係で仕事をしていただけではない。政治的には植民地の問題、ひいては戦争さえあったことももの、学問のために学者たちは交流を惜しまなかったことも目につく。いま果たして学術的な国際交流が叫ばれながら、実は退き転じているとさえ感ずるのは、筆者だけの偏見であろうか。

今こそ人類共通の文化遺産ともいべき仏教が、人類共通の人文科学の一領野として国際場裡に通用する学問になる時と思う。そうした国際交流といった一面をも、ビュルヌーフとその周辺に見てみたいと思ったのである。彼は旅もした。よく筆も執った。彼の書簡集は、そのための恰好の資料である。覗き見をするような後ろめたさも伴うが、これも仕方のない場合もあって、許して貰えよう。できるだけこのような資料を補うに足るだけの文献を引用しようと思いつつ、あるときは不足していたり、あるときは余計なものにまで及んだこともある。直接に関わりのある学者の著わしたものを資料に用いようとしたために、断腸の思いでほかの優れたものを割愛したことが多い。特に、辻直四郎・石田幹之助・榎一雄等々、わが国の先達の奥深い洞察に満ちた、学史に関する著作に、いやしくも本来ならば、絶対に捨ておけないものがある。あらためて、賢明な読者の寛恕を希う次第である。

本稿に登場したどの学者ひとり取りあげてみても、十分に単独に扱うべき学史的価値のある人が多い。機会をみてもっと踏み込んでみたい課題が山ほど積まっている。

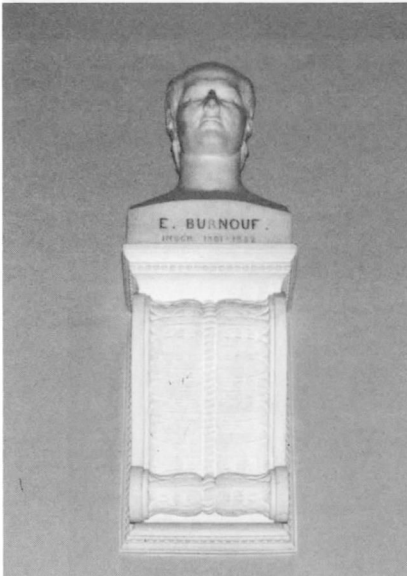
また本稿では、いわば仏教文献学の側面を見たにすぎない。何度もくりかえしいうように、仏教は我々人類の享受・共有する文化遺産である。ビュルヌーフは、まさに人類の文化史の一面を構築するための準備として、原典の徹底的な研究に取り組みはじめたのである。それは仏教学の近代的な出発点であった。仏教文献学の最初の模範を垂れた人であった。しかし残念なことに、真の仏教学が、いま正しく根を下ろしていると言えるであろうか。不安を感ずるのは私だけではなからう。

仏教学は、ある一面で、確かに高度の発展を成し遂げてはいる。目を瞠るものがある。その半面で、蔑ろにされているのが、基礎研究であろう。ビュルヌーフが世に出てもうすぐ200年である。原典籍もきちんと揃っていないようでは、仏教の研究は安定した人文科学とはなり得ない。1938年にベイリーが、ケンブリッジ大学の梵語学担当教授に就任したときの講演で、ジャイナ・仏教研究の困難さを説いたが、あれからもう半世紀たった現状は、いまだに肌寒いもの¹⁶⁵⁾を感ずる状況にある。さらに、機会を得て、我々が直面する問題を論じてみたい。

図版 [78頁の解説参照]



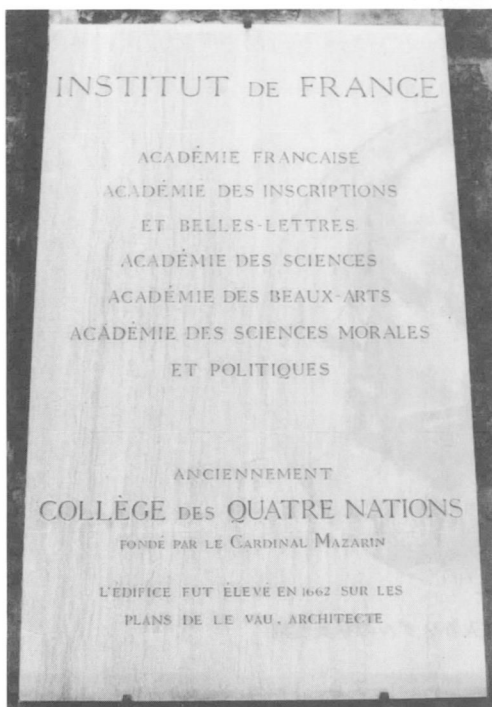
1. ビュルヌーフの署名陰刻入りメダルの写真覆刻



2. ビュルヌーフの胸像



3. フランス学士院の正面左手通用門



4. フランス学士院の正面左手通用門の入口
左側の案内表札 (旧「四国学院」蹟地)



5. 同入口右側の案内表札
「マザラン図書館」



6. 現在のオデオン座通り21番地にある建物

E. Burnouf *E. Burnouf.*

7. ビュルヌーフの署名を拾う

Eugène Burnouf



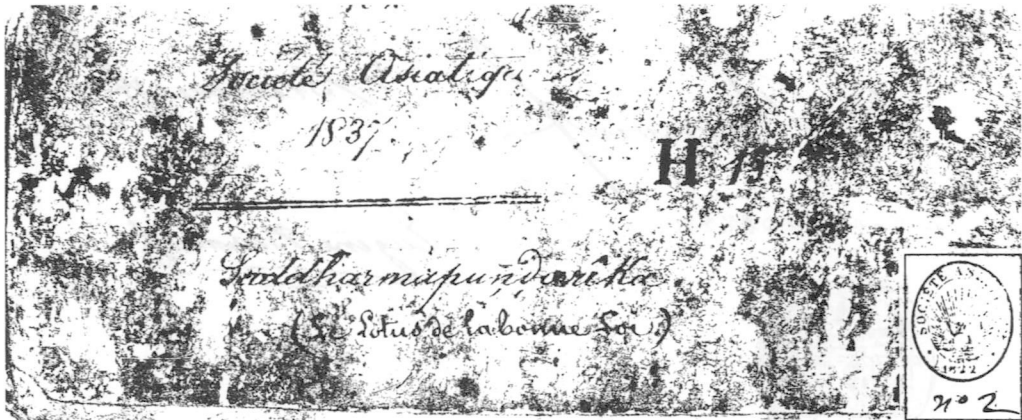
8. ビュルヌーフのイニシャル刻印入り封印

*à la Société Biblique étrangère de la grande Bretagne,
hommage respectueux d'un de auteurs
Eugène Burnouf*

**ESSAI
SUR LE PALI,
OU
LANGUE SACRÉE**

DE LA PRESQU'ILE AU-DELA DU GANGE.

9. ラッセンとの共著「パーリ語試論」の表題頁に記されたビュルヌーフの献呈辞



10. ビュルヌーフの仏訳法華経の底本になった写本の表紙(部分)と裏表紙のスタンプ(右下)

図版解説

1. ビュルヌーフの署名陰刻入りメダルの写真覆刻
2. ビュルヌーフの胸像 フランス学士院 (Institut de France) 三階正面広間の壁面 (本稿49-50頁参照) (筆者撮影)
3. フランス学士院の正面左手通用門 (23, Quai de Conti, Paris VI) (筆者撮影)
4. フランス学士院の正面左手通用門の入口左側の案内表札 (旧「四国学院」蹟地) (筆者撮影)
5. 同入口右側の案内表札=フランス最古の公共図書館「マザラン図書館」(筆者撮影)
イタリア出身の宰相 (Giulio Mazarini=Jules Mazarin: 14. VII. 1602-9, III. 1661) の創設になる (1643)。前任宰相 (Armand Jean du Plessis=Duc de Richelieu: 9. IX. 1585-4. XII. 1642) は Académie Française の創設者。現在、国立図書館前のリシュリュール通りにその名を遺す。
6. 現在のオデオン座通り21番地にある建物 (オデオン座前広場から筆者撮影)=「ビュルヌーフ文庫」が競売に付された場所 (本稿注1参照)
7. ビュルヌーフの署名を拾う
8. ビュルヌーフのイニシャル刻印入り封印 「ユー・ジェーヌ・ビュルヌーフ書翰選」(1891) の書簡類覆刻から
9. ラッセンとの共著「パーリ語試論」の表題頁に記されたビュルヌーフの献呈辞 (本稿注74参照):
À la Société Biblique étrangère de la Grande Bretagne
hommage respectueux d'un des auteurs
Eugène Burnouf (現・国際仏教学研究所図書室所蔵本より)
10. ビュルヌーフの仏訳法華経の底本になった写本の表紙(部分)と裏表紙のスタンプ(右下) (1837年4月頃にホジソンから届く)=パリのアジア協会所蔵 (現在梵文写本所蔵番号第2) (拙稿63頁参照)

註記

*本論は、平成5年6月2日、立正大学法華経文化研究所で行った講演に、若干の改訂をなしたものである。かねてから注目していたビュルヌーフの研究の背景・周辺について、考究する機会を与えて下さった同研究所 (なかでも、所長・勝呂信静教授) に、心から感謝の意を表したい。

印度学仏教学の学史研究に不可欠の基礎的な資料については、次の拙稿を参照されたい:「印度学

仏教学史研究資料雑録』『印度哲学仏教学』第7号(札幌, 1993), pp. 299-314, および「インド学仏教学の黎明」同, 第6号(1988), pp. 323-348. また, 関連の分野については, 拙論「西洋人の大乘仏教研究史」『講座・大乘仏教』第十巻: 『大乘仏教とその周辺』(東京・春秋社, 1985), pp. 221-261を参照されたい。

1) *Catalogue des livres imprimés et manuscrits composant la Bibliothèque de Feu M. Eugène BURNOUF, Membre de l'Institut,...* etc. La vente des imprimés aura lieu le mardi 5 décembre 1854 et jours suivants, à sept heures précises du soir, Rue de l'Odéon, n° 21, au premier étage, par le ministère de M^e Ducrocq, Commissaire Priseur, rue Grange-Batelière, n° 12 (Paris: Benjamin Duprat, Libraire de l'Institut, Rue du Cloître-Saint-Benoit, n° 7, M DCCC LIV), (viii), 358 pages. (= Janert I, p. 119: No. 248 (次注参照))

——以下に, 本書を, “Catalogue Burnouf” と略すことにしよう。

2) 本稿で特に写本の目録類を引用するにあたっては, 下に挙げる著書の通し番号と頁数とを付すことにする。本書の増補改訂版(あるいは第二部)の刊行を期待する。著者は, それを該書で約束して, 欠けている資料の提供を, 世界の同学の士に呼び掛けて援助を受けたのであるが, その約束が果たされていないのは残念である。いずれにしても, 我々学徒の必携の書に違いない:

Klaus Ludwig Janert, *An Annotated Bibliography of the Catalogue of Indian Manuscripts, Part I* (= *Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband I*) (Wiesbaden: Franz Steiner, 1965), 175 pages, 1 photo (Theodor Aufrecht).

3) *Cent-Cinquantième de l'École des Langues Orientales: Histoire, Organisation et Enseignements de l'École Nationale des Langues Orientales Vivantes* (Paris: Imprimerie Nationale de France, 1948), (vi), 469 pages (incl. 1 carte, 3 planches), 1 frontisp.

4) *Catalogue des livres, imprimés et manuscrits, composant la Bibliothèque de Feu M. Louis-Mathieu Langlès, Chevalier des Ordres de la Légion-d'Honneur,...* etc., etc.; Dont la vente se fera le Jeudi 24 mars 1825 et jours suivants, 6 heures de relevée, MAISON SILVESTRE, rue des Bons Enfants, n° 30. Etc. etc. (A Paris, chez J.-S. Merlin, Libraire, Quai des Augustins, n° 7, 1825), (iii), xviii, 558, (i), lxxxix, 31 pages:

“Notice sur M. Langlès”, par Ed. Gauthier, pp. i-vii;

“Catalogue des ouvrages composés par M. Langlès ou publiés ou annotés par lui”, pp. viii-xi.

5) *Monuments anciens et modernes de l'Hindoustan, décrits sous le double rapport archéologique et pittoresque, et précédés d'une notice géographique, d'une notice historique, et d'un discours sur la religion, la législation et les moeurs des Hindous*, par Louis Langlès. 2 vols. (Paris: Didot, 1821).

[“Catalogue des livres...de...Langlès”, p. x(No. 30)/p. 385 (vente-n° 3330)]

6) *Catalogue des manuscrits sanscrits de la Bibliothèque impériale. Avec des notices du contenu de la plupart des ouvrages, etc.* Par MM. Alexandre Hamilton, Membre de la Société Asiatique de Calcutta, Professeur de littérature indienne, etc. Et L. Langlès, Membre de l'Institut de France; conservateur des manuscrits orientaux de la Bibliothèque Impériale, etc. (Paris: Imprimerie Bibliographique, 1807), 118 pages:

[“Avant-propos”, par Langlès, p. 5-8 (ハミルトンが英文で認めたものをラングレースが仏訳);

“Ouvrages sanscrits; Ecrits en caractères dévanâgari, No. I-XLIV” (p. 9-24);

“Manuscrits sanscrits en caractères bengali, No. I-CLXXIX”, pp. 29-95;

“Supplément des manuscrits en dévanâgari, Nos. XLV-XLIX”, p. 95f. (p. 95-96 に頁付重複の混乱あり);

“Manuscrits en langue et en caractères bengalis, No. I-VI”, p. 94f.;

“Supplément des manuscrits en dévanâgari (p. 28), Nos. XLV-XLIX”, p. 95f.;

“Manuscrits en langue et en caractères bengalis, No. I-XIV”, p. 97f.;

- “Note de M. Langlès sur quelques Langues anciennes de l’Inde”, pp. 98-102;
 “Table des Auteurs et des Ouvrages cités dans ce Catalogue”, pp. 103-118]
 [=Gildemeister p. 390; Janert, p. 118: No. 246]
- 7) *Relations des voyages faits par les Arabes et les Persans dans l’Inde et de la Chine dans le IXe s. de l’ère chrétienne*. Texte arabe imprimé par les soins de feu Langlès, publié et accompagné d’une traduction française par M. Reinaud. 2 vols. (Paris 1845).
 Cf. *’Ahbār as-Sin wal-Hind: Relation de la Chine et de l’Inde rédigée en 851*. Texte établi, traduit et commenté par Jean Sauvaget (=Collection Arabe, publiée sous la patronage de l’Association Guillaume Budé) (Paris: Société d’Édition «Belles Lettres», 1948), XLI, 1 (appendice), 2 (cartes), 27x 2 (traduction et texte) pages; page 29 (appendice I-II), 31 (index), 33-68 (notes), 69 (additions), 71-79 (index), 81 (tables des matières).
- 8) *Choix de Lettres d’Eugène Burnouf 1825-1852, suivi d’une bibliographie. Avec portrait et fac-similé* (Paris: H. Champion, 1891), XIX, 585 pages.
 [Portrait (p. III); Fac-similé des lettres de Burnouf (pp. XVII-XIX)]:
 “Bibliographie des travaux d’Eugène Burnouf”, pp. 557-578;
 I. ‘Travaux publiés isolément’, pp. 557-562 (25 items);
 II. ‘Travaux publiés dans le Journal Asiatique’, pp. 562-567 (1823-1857);
 III. ‘Travaux publiés dans le Journal des Savants’, pp. 567-570 (1827-1844);
 IV. ‘Liste des travaux manuscrits d’Eugène Burnouf’, pp. 570-575;
 V. ‘Articles sur les travaux d’Eugène Burnouf et notices bibliographiques’, pp. 575-578;
 “Table des lettres”, pp. 579-582 (CLXXV items);
 “Table de l’appendice”, p. 583 f. [appendice (pp. 477-555)].
 —以下に、本書を、“Lettres Burnouf”と略して引用する
- 9) *Papiers d’Eugène Burnouf conservés à la Bibliothèque Nationale. Catalogue*, dressé par M. Léon Feer, Bibliothécaire au Département des Manuscrits. Augmenté de renseignements et de correspondances se rapportant à ces papiers (Paris: H. Champion, 1899), (iii), XXVI, 197 pages.
 (= Janert I, p. 119: No. 251):
 “Préface (de L. D. B.)”, pp. I-XXVI;
 “Catalogue des papiers d’Eugène Burnouf”, pp. 1-110;
 “Appendice: Lettres relatives à divers travaux mentionnés dans le Catalogue”, pp. 113-185
 —以下に、本書を“Papiers Burnouf”と略して引用する
- 10) Voir Marcelle Lalou, “Bibliographie rétrospective: l’œuvre de Léon Feer”, *Bibliographie bouddhique*, Vol. II (mai 1929-mai 1930) (=Buddhica, série II, tome 5), pp. 1-17.
- 11) 定方晟, “パリ国立図書館所蔵のサンスクリット寫本とその目録”, 印度學佛教學研究, XIV, 2 (1966), pp. 150 (847)-158 (839).
- 12) Anton Cabaton, *Catalogue sommaire des manuscrits sanscrits et pâlis (Département des Manuscrits, Bibliothèque Nationale)*, 2 fascicules (Paris: Ernest Leroux, 1907-1908), (i), 189; (i), 195 pp. (1102 Skt. Mss)
 (=Janert I, p. 119: No. 252).
 因みに、ピュルヌーフがのちに入手した二写本 (Nos. 138-139/140-141=Collection Burnouf 99-100) は、17頁参照。
 Cf. A. Cabaton, *Catalogue sommaire des manuscrits indiens, indo-chinois et malayopolynésiens* (Paris: Ernest Leroux, 1912):
 “Addenda nos. 1103-1122-1141 au Catalogue somm. des mss. sanscrits et pâlis et de la coll. E. Burnouf (Paris 1907-1908) (cf. Janert I, p. 120: No. 253) [unseen].

- 13) Jean Filliozat, *Catalogue du Fonds sanscrits (Département des Manuscrits, Bibliothèque Nationale)*, 2 fascicules (Paris: Adrien-Maisonneuve, 1941-1970):
 Fasc. I (1941), XXI, 103, V pages: Mss. Nos. 1-165 (=Janert I, p. 120: No. 256);
 Fasc. II (1970), 271, VII pages: Mss. Nos. 166-452. [第二分冊には仏典は全く含まれていない]
 因みに、ビュルヌーフがのちに入手した二写本 (Nos. 138-139/140-141=Collection Burnouf 99-100) は84頁参照。
- 14) O. P. Kejariwal, *The Asiatic Society of Bengal and the Discovery of India's Past 1784-1838*. With a foreword by A. L. Basham (Delih-Bombay-Calcutta-Madras: Oxford University Press, 1988), xvi (incl. plates and map), 293 pages.
- 15) フンボルトに関しては、割合に新しい次の二点を挙げるに止めよう：
Wilhelm von Humboldt-Briefe. Auswahl von Wilhelm von Rössle mit einer Einleitung von Heiz Gilwitzer (München: Carl Hanser Verlag, 1952): "Lebenstafel", pp. 458-491 (W. Rösle).
Wilhelm von Humboldt: Sein Leben und Werken, dargestellt in Briefen, Tagebüchern und Dokumenten seiner Zeit, herausgegeben von Rudolf Freese (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1986) [2., völlig durchgesehene und neu gestaltete Auflage (Ost-) Berlin 1955]:
 "Bibliographische und zeitgeschichtliche Daten", pp. 783-787; "Benutzte Quellen und Literatur", pp. 789-792; 47 Abbildungen auf S. 825-847.
- 16) *Briefe von und an August Wilhelm Schlegel*. Gesammelt und erläutert durch Josef Körner (Zürich-Leipzig-Wien: Amalthea-Verlag, 1930):
 I. Die Texte (mit 11 Abbildungen & einer Schriftprobe), XI, 651 pages, 1 frontisp.;
 II. Die Erläuterungen, XV, 449 pages
- 17) "*Lettres Burnouf*": Supplément: "Lettres à Auguste-Guillaume de Schlegel", pp. 449-475 (CLXIV-CLXXV).
- 18) "...Je ne vois pas encore jour à publier la traduction d'un ouvrage buddhique du Népal, que j'ai achevée il y a quelques mois. Au reste, la belle littérature sanscrite n'y perdra pas beaucoup, car la langue de ce livre est d'une barbarie détestable..." ("*Lettres Burnouf*", p. 475).
- 19) Salomon Lefmann, *Franz Bopp, sein Leben und seine Wissenschaft. Mit dem Bildnis Franz Bopps und einem Anhang: Aus Briefen und anderen Schriften (mit Nachtrag)* (Berlin: Georg Reimer, 1891-1895-1897), IV, 168 pp., 1 frontisp.; VI, 177-284, VII pp.; XLII, 129 pages.
- 20) Cf. *op. cit.*, I. Hälfte (1891), Anhang V "Briefwechsel zwischen Fr. Bopp und Burnouf, Vater und Sohn [1820-1845]".
 —以下に、本書を、"*Bopps Briefe*" として引用しよう
- 21) "...Je vous prie de vouloir bien me rappeler dans la mémoire de M^{de} Burnouf, ainsi que de Mr. votre fils." ("*Bopps Briefe*", I, p. 135*)
 この種の物を並べると際限がない。翌年12月29日付のベルリンからの書簡にはこんな文もある：
 "...Je vous prie, Monsieur,..., ainsi que de me rappeler dans le souvenir de M^{de} votre épouse.
 ..." ("*Bopps Briefe*", I, p. 137*.)
 あるいは、こんな言い回しもある (1822年11月7日付)。段々と、家族ぐるみの、交き合いという感じさえる：
 "...Je vous prie à vouloir bien offrir mes respects à M^{de} votre épouse,..." ("*Bopps Briefe*", I, p. 139*.)
- 22) "...Je suis bien flatté du bon accueil que vous avez fait, ainsi que Mr. votre fils, aux petits ouvrages que je vous ai envoyés, et c'est un honneur que je sais bien apprecier que Vous avez traduit mon mémoire sur les racines et les pronoms sanscrits, et que Mr. votre fils daignera à publier à ce sujet quelques articles dans le Journal Asiatique. On peut justement

- attendre de son talent distingué et de sa grande activité,...” (“*Bopps Briefe*”, I, p. 146* / Datum: 30. I. 1825).
- 23) “... car je vois par les savants articles dans le Journal Asiatique, qu’il possède une connaissance profonde du Sanscrit...” (“*Bopps Briefe*”, I, p. 149* / Datum: 6. XI. 1825).
- 24) “Monsieur, Mon père, qui avait le plus vif désir de vous répondre tout de suite, ne le pouvant pas en ce moment, me charge de remplir auprès de vous ce devoir qui lui est si agréable, et se réserve le plaisir de l’accomplir dans un temps assez prochain; mais il n’a pas voulu que l’expression de son amitié et de sa reconnaissance pour votre aimable lettre tardât davantage...” (“*Lettres Burnouf*”, No. II: p. 3 / Datum: 14. XI. 1825).
- 25) “Mon père me charge de vous adresser ses respects et attend toujours avec une vive impatience l’arrivée de votre excellente Grammaire que vous avez bien voulu lui annoncer.” (“*Lettres Burnouf*”, No. III: p. 12 / Datum: 18. XII. 1825).
- 26) “...Je vous prie de vouloir bien offrir mon respect à Mr. votre père et agréer les sentiments de la haute estime et de l’amitié sincère avec lesquels j’ai l’honneur d’être,...” (“*Bopps Briefe*”, I, p. 154*).
- 27) *My Autobiography: A Fragment*. By The Rt. Hon. Professor F. Max Müller, K. M., with portraits (London-Bombay: Longmans, Green, and Co., 1901), pp. 157-181: Chapter V “Paris”.
- 28) “He was, indeed, a fine specimen of the real French savant...”, *ibid.*, p. 163.
- 29) See *The Life and Letters of The Right Honourable Friedrich Max Müller*, edited by his wife in two volumes, with portraits and other illustrations (London-New York-Bombay: Longmans, Green, and Co., 1902): Volume I, p. 191 f.
- 30) See e.g. *op. cit.*, Volume II, p. 75 f.
- 31) 例えば, 南条文雄: 懐旧録——サンスクリット事始め (=東洋文庫 359, 東京・平凡社, 昭和54年/1979), p. 120.
- 32) Rosane Rocher, *Alexander Hamilton (1762-1824): A Chapter in the Early History of Sanskrit Philology* (= *American Oriental Series*, LI) (New Haven: American Oriental Society, 1968), xii, 128 pages.
Cf. E. F. K. Koerner, *Western Histories of Linguistic thought: An Annotated Chronological Bibliography 1822-1976* (= *Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science*, Series III: *Studies in the History of Linguistics*, XI) (Amsterdam: John Benjamins B. V., 1978), p. 55: 1968 Rocher.
- 33) Rosane Rocher, *Orientalism, Poetry, and the Millennium: The Checkered Life of Nathaniel Brassey Halhed 1751-1830* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1983), xi, 354 pp., ill.
Cf. note 35 below: *Mayrhofer*.
- 34) See Friedrich Schlegel-Über die Sprache und die Weisheit der Indier. *Ein Beitrag zur Begründung der Altertumskunde*. New edition with an introductory article by Sebastiano Timpanaro (translated from the Italian by J. Peter Maher), prepared by E. F. K. Koerner (= *Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science*, Series I: *Amsterdam Classics in Linguistics*, 1800-1925, I) (Amsterdam: John Benjamin, 1977) [Portrait on p. VI]: “Preface”, by E. F. K. Koerner, pp. VII-X;
“Friedrich Schlegel and the Beginning of Indo-European Linguistics in Germany”, by S. Timpanaro, pp. XI-LVII (‘References’, pp. XXXIX-LVII);
“TEXT: Über die Sprache und Weisheit der Inder: Ein Beitrag zur Begründung der Altertumskunde”, 324 pages;
“APPENDIX: On the Indian Language (from: The Aesthetic and Miscellaneous Works of Friedrich von Schlegel, translated by Ellen J. Millington)”, pp. 425/428-465.

本稿を撰筆してから、ショーペンハウアーをめぐるの、彼の思想形成とヨーロッパの印度学の学史的背景とに関する、誠に簡にして要を得た論考を目にすることができた。筆者自身もかねてから興味をもつことなので、引用しておきたい：服部正明「ショーペンハウアーとインド古典学」『ショーペンハウアー研究』創刊号（1993年1月）、pp. 67-82.

この著者に啓発されて、さらに多くの学徒に広く深い関心を寄せて貰いたいと願う。ここまで書いて二三日したら、面白いことに、次の著作が届いた。印度学の背景を見すえての論考である。滑田豊、「ショーペンハウアー哲学における争点」『人文研究』（神奈川大学人文学会）、第115集（1993. 3）、pp. 1-42.

- 35) Cf. Manfred Mayrhofer, "Sanskrit und die Sprachen Alteuropas: Zwei Jahrhunderte des Widerspiels von Entdeckungen und Irrtümern", *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*, I. Philol.-hist. Klasse, Jahrgang 1983, Nr. 5, pp. 121-154+23 pages in facsimile: "Sir William Jones' Urteil über das Sanskrit", pp. 125-127; "Beeinflußt durch Halhed?", p. 127; "Friedrich Schlegels Indier-Buch", pp. 127-130; "Schlegels Sanskritozentrik auch beim frühen Bopp; Rask, der die indogermanische Sprachverwandtschaft ohne Sanskrit erweisen konnte, bleibt ohne Einfluss", pp. 130-131; "ANHANG: Père Coerdoux' Bericht über die Ähnlichkeiten von Sanskrit, Griechisch und Latein", p. 154
[followed by facsimile plates].
- 36) *Centenary Volume of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland 1823-1923*. Compiled and Edited by Frederic Eden Pargiter (London 1923), xxviii, 186 pages, 10 portraits (incl. 1 frontisp.).
[Henry Thomas Colebrooke (frontisp.), George Thomas Staunton, H. H. Wilson, H. C. Rawlinson, M. Monier-Williams, Lord Reay, F. Max Müller, John Muir, C. J. Lyall, R. F. Burton]
- 37) *Silvestre de Sacy-Mélanges de Littérature orientale*, précédés de l'éloge de l'auteur par M. le Duc de Broglie (= *Bibliothèque classique des célébrités contemporaines*) (Paris: Librairie classique et d'éducation/A. Pigoreau, s. d.), (ii), XXXII+33-395 pages:
Le Duc de Broglie, "Eloge de Silvestre de Sacy", pp. III-XXXII;
Silvestre de Sacy, "Observations sur les cours de Sanskrit et de Chinois créés au Collège de France", pp. 63-81.
- 38) Rudolf Smend, *Die Göttinger Sieben. Rede zur Immatrikulationsfeier der Gerogia Augusta zu Göttingen am 24. Mai 1950*. 2. durchgesehene Auflage (Göttingen-Berlin-Frankfurt: Muster-schmidt-Verlag, 1958), 31 pages, 1 photo, 1 frontisp.
- 39) Cf. e. G. *Briefe der Brüder Grimm*, gesammelt von Hans Gürtler. Nach dessen Tode herausgegeben und erläutert von Albert Leitzmann (Jena: Frommanns Buchhandlung, 1923), xii, 320 pages, mit Illus.
- 40) *Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* (= *ZKM*) (Göttingen 1837-/Bonn 1842-1850).
- 41) *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* (= *ZDMG*) (1847-)
- 42) G. H. A. Ewald, *Über einige ältere Sanskrit-Metra. Ein Versuch* (Göttingen: Deuerlich, 1827), 24 pp.
{=Gildemeister, *Bibliothecae sanskritae*, p. 10: Nr. 32}.
- 43) A. L. Chézy, *Çloka virac'anavidhi. Théorie du Sloka, ou Mètre héroïque sanscrit* (Paris: Dondey-Dupre, 1827), VIII, 22 pp.
{=Gildemeister, *Bibliothecae sanskritae*, p. 10: Nr. 31}.
- 44) H. T. Colebrooke, "On Sanscrit and Pra'crit Poetry", *Asiatick Researches*, X (Calcutta 1808,

- repr. London 1811), pp. 389-474, with plates after pages 392, 416, 432, and 442, 'Synoptical Tables of Indian Prosody', pp. 461-474.
- =H. T. Colebrooke, *Miscellaneous Essays*, Vol. II (Madras: Higginbotham and Co., 1872), pp. 62-165 (reprinted from the 1837 London Edition).
- {=Gildemeister, *Bibliothecae sanskritae*, p. 9 f.}
- 45) 拙稿, "ドイツのインド学・仏教学の話題", 春秋, No. 174 (東京, 昭和51年5月), pp. 16-17; No. 176 (昭和51年7月), pp. 18-19; No. 178 (昭和51年9月), pp. 21-22; No. 180 (昭和51年12月) pp. 18-20 参照。
- Cf. auch Georg von Simson, "Der Beginn der Sanskrit-Studien in Göttingen vor 150 Jahren", *Universität Göttingen-Informationen*, Sonderausgabe (Juni 1977), pp. 1-5.
- 46) *Briefe an Ewald*. Aus seinem Nachlaß herausgegeben von R. Fick und G. von Selle (= *Vorarbeiten zur Geschichte der Göttinger Universität und Bibliothek*, Heft XIII) (Göttingen in Kommission bei Vandenhoeck & Ruprecht, 1932), VIII, 223 pages.
- 47) Siehe *op. cit.*, p. 16 f. (Datum: 6. III. 1834), p. 17 f. (Datum: 29. IX. 1834).
- エーヴァルトに関して, 生誕百年を記念した次著があるが, 残念ながら筆者未見の書である: T. Witton Davies, *Heinrich Ewald: Orientalist and Theologian 1803-1903. A Centenary Appreciation* (London 1903).
- 48) *Panchatantra: Fünf Bücher indischer Fabeln, Märchen und Erzählungen*. Aus dem Sanskrit übersetzt mit Einleitung und Anmerkungen von Theodor Benfey, 2 Bände (Leipzig: F. A. Brockhaus, 1859), xliii, 611 pp.; viii, 556 pp.
- {=Emeneau's *Union List*, No. 1345}
- Auflage, herausgegeben von Aloys Greither: "Die Zeichnungen Josef Scharls aus Jahre 1945 werden hier erstmals veröffentlicht" (München: Verlag C. H. Beck, 1986), 267 pp.
- 49) *Theodor Benfey-Kleinere Schriften*, ausgewählt und herausgegeben von Adalbert Bezzenberger. 2 Bände in 1 Band (Hildesheim-NewYork: Georg Olms Verlag, 1975: Nachdruck der Ausgabe Berlin: H. Reuther's Verlagsbuchhandlung, 1890-1892), (iv), XI, 341, 199 pp.; (iii), 236, 156 pp., 1 Bildnis (Benfey):
- "Biographie von Theodor Benfey", Band I, pp. VII-XL;
- "Verzeichniss der Schriften Theodor Benfey's", Band II, Abtheilung 4, pp. 131-156.
- 50) Siehe Theodor Benfey, *Geschichte der Sprachwissenschaft und orientalischen Philologie in Deutschland seit dem Anfang des 19. Jahrhunderts mit einem Rückblick auf die früheren Zeiten* (= *Geschichte der Wissenschaften in Deutschland*, Neure Zeit, VIII. Band: *Geschichte der Sprachwissenschaft* (München: Literarisch-artistische Anstalt der J. G. Cotta'schen Buchhandlung, 1869), X, 837 pp.
- Reprinted in facsimile [printed in West Germany] (New York: Johnson Reprint Corporation NewYork/London: Johnson Reprint Company Limited, 1965).
- Cf. Koerner, *op. cit.*, p. 4 f.: 1869 Benfey
- 51) Theodor Benfey, *Göttingische gelehrte Anzeigen unter Aussicht der Königl. Gesellschaft der Wissenschaften*, 73. Stück (8. Mai 1854), pp. 721-728; 74. 75. Stück (11. Mai 1854), pp. 729-750; 76. Stück (13. Mai 1854), pp. 745-750.
- 52) *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Herausgegeben von Kurt Ranke (Göttingen) zusammen mit Hermann Bausinger, Wolfgang Brückner, Max Lüthi, Lutz Röhrich, (und) Rudolf Schenda (Redaktion in Göttingen: Lotte Baumann, Ines Köhler, Elfriede Mosser-Rath, Ernst Heinrich Rehermann (und) Hans-Jörg Uther: Band I, Lieferung 1- (Berlin-New York: Walter de Gruyter, 1975/1977-).
- 53) Cf. e. G. Rishikesh Shaha's "Introduction to Nepal" to John Whelpton, *Jang Bahadur in*

Europe: The First Nepalese Mission to the West (Kathmandu: Sahayogi Press, 1983), pp. 1-64, esp. pp. 18-45 (et passim):

{An English translation of the 1850 mission of Jang Bahadur, *Jang Bahadurko Belāit Yātrā* (Belāyat Yātrā)}.

For Jang Bahadur see *Life of Maharaja Sir Jung Bahadur of Nepal, by his son Pudma Jung Bahadur Rana*, edited by Abhay Charan Mukerji with illustrations (Allahabad: Pioneer Press, 1909); 2nd reprint in the *Biblintheca Himalayica*, II, 8 (Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, 1974).

Cf. also e.g. Pramode Shamshe Rana, *Rana Nepal-An Insider's View*. With a foreword by M. R. Allen (Kathmandu: Mrs. R. Rana, 1978), (xiv), 175 pp., 2 tables of the family lineage.

Theodore Riccardi, Jr., "The *Nepālarājaparamparā*: A Short Chronicle of the Kings of Nepal", *JAOS*, CVI, 2 (1986), pp. 247-251 [Text composed in Nepāli Vikrama Samvat 1884].

筆者は近い将来に、仏教文献学のための年代論を、書誌学的にまとめたいと思う。

54) *Sanskrit Documents, Being Sanskrit Letters and Other Documents Preserved in the Oriental Collections at the National Archives of India*, edited by Surendranath Sen and Umesh Mishra (Allahabad: Published on behalf of the National Archives of India by the Ganganatha Jha Research Institute, 1951), p. 15 et passim.

55) See e.g. George Rusby Kaye and Edward Hamilton Johnston, *India Office Library: Catalogue of Manuscripts in European Languages*, Volume II, Part II: *Minor Collections and Miscellaneous Manuscripts*, Section I; Nos. 1-538, by G. R. Kaye. Published by Order of the Secretary of State for India in Council (London: Printed by His Majesty's Stationary Office for the India Office, 1937), pp. 1063-1099: Documents numbered 474-485.

[F. W. Thomas: "The papers comprising this collection were presented to the Library by the late Brian Houghton Hodgson in August 1864, during his lifetime.... They were conveyed in three trunks, containing a number of bundles,...", p. 1064]

56) Cf. also *A Guide to Manuscripts and Documents in the British Isles Relating to South and South-East Asia*, compiled by J. D. Pearson. 2 vols. [= *A Supplement to Wainwright and Matthews A Guide to Western Manuscripts and Documents in the British Isles Relating to South and South East Asia*], Vol. 1: *London* (London-New York: Mansell Publishing Ltd., 1989), p. 58 b: "1820-58"; Vol. 2: *British Isles (excluding London)* (1990), p. 125 a/b: "1819-1919", "9-11", "16" and "17".

Cf. M. D. Wainwright and N. Matthews, *A Guide to Western Manuscripts and Documents in the British Isles Relating to South and South-East Asia* (London 1965).

See M. A. E. Nickson, *The British Library: Guide to the Catalogue and Indexes of the Department of Manuscripts*, 2nd revised edition (London: The British Library, 1982), p. 17 b [First edition 1978].

See also Amar Kaur Jasbir Singh, *A Guide to Source Materials in the India Office Library and Records for the History of Tibet, Sikkim and Bhutan 1763-1950* (London: The British Library, 1988), p. 113 (Hodgson's paper, Calcutta 1857), p. 169 (Hodgson's Donation of Narthang Kanjur and Tanjur in 1846).

57) See B. H. Hodgson, "Notices of the Languages, Literature, and Religions of Nepal and Tibet", *Asiatick Researches*, XVI (Calcutta 1828), pp. 409-449 (with 10 plates).

= *Journal Asiatique*, série II, tome VI (Paris 1830), pp. 81-119, 2 pl.; pp. 257-279.

58) See J. H. Klaproth, "Breve Notizia del regno de Thibet, dal Frà Francesco Orazio della Penna de Billi, 1730", *Journal Asiatique*, XIV (1834), pp. 177-204, 273-296, 406-432.

= Luciano Pettech, *I Missionari Italiani nel Nepal, I Cappuccini Marghigiani*, III (= *Il Nuovo*

- Ramusio, II, 3) (Roma: La Libreria dello Stato, 1953), pp. 47-55, 56-70, 70-85.
- Cf. Yuyama, *Vinaya-Texte* (Wiesbaden 1976), p. XII cum n. 4.
- 59) REPRINTED together with 18 other articles: *Essays on the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet, together with further papers on the geography, ethnology and commerce of those countries* (London: Trübner, 1874), xi, 145 pages, 3 tables; 124 pages = FURTHER REPRINTS (Varanasi: Bharat Bharati, 1971), and a limited edition of 1000 copies (of the 1874 edition) with an introduction by Philip Denwood and illustrated with contemporary engravings (= *Bibliotheca Himalayica*, Series II, Volume 7) (New Delhi: Mañjuśrī Publishing House, 1972), Part I: (xii), vii, 145 pages, 2 folded pages, 6 ills.; Part II: 124, (3) pages, 7-10 ills.
- ANOTHER corrected and augmented edition of two earlier collections of essays entitled 'Illustrations... 1841' and 'Selections... XXVII, 1857', with a supplement of additions and corrections from the author's copy, edited by Mahadeva Prasad Saha, and with other additions, omitted in the former edition (Amsterdam: Philo Press, 1972), (i), xii, 145 pages, 4 folded pages [Part I]; 124 pp. [Part II]; "Supplement of Additions and Corrections" to Brian Houghton Hodgson's, *Essays on Nepal and Tibet*, edited from the handwritten annotations in the author's copy by Mahadeva Prasad Saha, followed by reprinted additions from *Illustrations on the Literature and Religion of the Buddhists*, 1841, which were omitted from the former collected edition of 1874, 35* pages [M.P. Saha, "Brian Houghton Hodgson, 1800-1894: Indian Civilian and Orientalist", pp. 5*-10*];
- Reprinted additions, containing parts omitted in the edition of 1874, from *Illustrations of the Literature and Religion of the Buddhists*, 1841 and a sketch map from *Selections...XXVII*, 1857, (i), iii/171-191 pages, 1 ill., 1 map.
- 60) W.H. Hunter, *Life of Brian Houghton Hodgson, British Resident at the Court of Nepal, Member of the Institute of France; Fellow of the Royal Society; A Vice-President of the Royal Asiatic Society, etc.* (London: John Murray, 1896), ix, 390 pages, 1 frotisp., 7 other ills.:
- "APPENDIX A: List of Presentation of Sanskrit MSS. and Tibetan Printed Books by Mr. Hodgson, and Catalogues of his Sanskrit Manuscripts, with Separate Index". pp. 337-356: 'Preface', p. 337 f.;
- I. Hodgson MSS. in the Royal Asiatic Society's Library, catalogued by Professors Cowell and Eggeling, and published in the *Journal of the Society, Vol. VII., New Series (1876)*, pp. 339-344 [80 MSS.]
- (see Janert I, p. 89: No. 175);
- II. Sanskrit MSS. presented to the Indian Office Library by Mr. Hodgson, p. 344 [30 MSS.]
- (see Janert I, p. 87: No. 164: under Vol. II, Part 2);
- III. Catalogue of Sanskrit MSS. from Nepal, published at pp. 330-336 of Burnouf's "Catalogue des livres imprimés et Manuscrits" (Paris, 1854), pp. 344-348 [59 MSS.]
- (= Janert I, p. 119: No. 248);
- IV. In the Bodleian Library, Oxford. (From Printed Catalogue of Sanskrit MSS. at Oxford by Prof. Aufrecht.), p. 348 f. [7 MSS.]
- (see Janert I, p. 116: No. 238: under Vol. I, Part 2);
- V. Catalogue des Livres Buddhiques, Écrits en Sanskrit, que M. B. H. Hodgson a fait copier au Nepal pour le compte de la Société Asiatique, et qui ont été présentés au Conseil dans sa séance du 14 Juillet, 1837. ("Journal Asiatique," II^{me} Série, Tome IV., 296-98; 1837.), p. 349 f. [64 MSS.]
- (not in Janert I);

VI. List of 66 Sanskrit Buddhist Works obtained from the Library of the College of Fort William, and forwarded thereto by B.H. Hodgson, Esq., from Nepal. Some of the titles are uncertain; others have been identified and corrected from the manuscripts in the preceding five lists, p. 351 [66 MSS.]

(Cf. Janert I, p. 41: No. 46);

VII. List of Sanskrit Buddhist Works in the Library of the Asiatic Society of Bengal. Compiled by Rajendra Lala Mitra, Esq., p. 352 f. [94 MSS.]

(Cf. Janert I, p. 41: No. 48);

VIII. Catalogue of 24 Sanskrit Works presented by B.H. Hodgson to the Asiatic Society of Paris in 1835. List in handwriting of B.H. Hodgson, dated Nepal, November 1835, as per letter to Burnouf of November 25th, 1835, found by Mrs. Hodgson 1894. Same as mentioned by Professor Cowell..., p. 353 [24 MSS.];

INDEX to the Forgotten Lists of Manuscripts, pp. 354-356;

“APPENDIX B: Mr. Hodgson's Presentation of his MSS. to the Secretary of State for India”, pp. 357-361.

“APPENDIX C: Classified Catalogue of B.H. Hodgson's Published Writings”, pp. 362-367;

“APPENDIX D. Catalogue of Papers by B.H. Hodgson on Mammals and Birds”, pp. 368-378.

See also A. Yuyama, *Buddhist Sanskrit Manuscript Collections: A Bibliographical Guide for the Use of Students in Buddhist Philology* (= *Bibliographia Indica et Buddhica*, Pamphlet, No. 2) (Tokyo: The Library of The International Institute for Buddhist Studies, 1992), p. 16 f. “Hodgson Collection”.

61) Francis Henry Skrine, *Life of Sir William Wilson Hunter, K. C. S. I., M. A., LL. D., a Vice-President of the Royal Asiatic Society, etc.* (London-New York-Bombay: Longmans, Green, and Co., 1901), xv, 496 pages, 5 portraits (‘Index’, pp. 481-496).

62) A. Morel, *Éloge de J. -L. Burnouf* (Ouvrage couronné dans la séance publique du 7 mai 1847) (Caen: Typ. de A. Harde!, Imprimeur-Librairie/Académie Royale des Sciences, Arts et Belles-Lettres de Caen, 1847), 58 pages [voir esp. p. 52 re Chézy-Burnoufs].

63) Eugène Burnouf, “De la langue et de la littérature sanscrite / Discours d'Ouverture, prononcé au Collège de France”, Extrait de la *Revue des Deux Mondes*, Livraison du 1^{er} Février 1883, 15 pages.

64) *Introduction à l'histoire du buddhisme indien*, par E. Burnouf de l'Institut de France et des Académies de Munich et de Lisbonne, Correspondant de celles de Berlin, de Saint-Pétersbourg, de Turin, etc.: Tome Premier (Paris: Imprimerie Royale, MDCCCXLIV), (iii), V, 648 pages: Compte-rendu: *Nouvelle Revue Encyclopédique* décembre 1846, pp. 1-26. [未見]

65) *Première édition*, p. iii / *Secnde édition*, p. XXXIII:

A LA MEMOIRE

DE

M. JEAN-LOUIS BURNOUF

MON PÈRE

HOMMAGE

DE RECONNAISSANCE ET DE REGRET

Voir Eugène, “Avertissement”, p. v (Paris, ce 10 novembre 1844): “...Il a fallu que le souvenir toujours présent de mon père me rappelaît à des travaux qu' il encourageait...”.

66) E. E. Salisbury, “M. Burnouf on the History of Buddhism in India”, *JAOS*, Vol. I, No. III (1847), pp. 275-298.

ソールズベリーは、1841年～1854年にイェール大学のアラビア・梵語学担当教授であったが、1854

年に梵語学を愛弟子ホイットニーに譲ることになる。
 Cf. “In Memoriam”, by the Corresponding Secretary, *JAOS*, XXII, 1 (January-July 1901) (August 1901), pp. 1-6, 1 frotisp. (photo of Salisbury).

この著者は、ホイットニーの亡き後に、その席を襲うホプキンス (Edward Washburn Hopkins: 8. IX. 1857-16. VI. 1932) に相違ないと思う。時に1895年。ホイットニーは、師ソールズベリーに先立って世を去ったことになる。その席こそ、後者の名を冠としたものである：

Salisbury Professor of Sanskrit and Comparative Philology.

さらに後に、エジャトンがその席を継ぐ。1926年。拙稿「エジャトンの仏教梵語研究の学史的背景」渡辺文麿博士追悼記念論文集・原始仏教と大乘仏教 (京都：永田文昌堂，印刷中)，45～83頁参照。

67) *Introduction à l'histoire du buddhisme indien*, par E. Burnouf de l'Institut de France et des Académies de Munich et de Lisbonne, Correspondant de celles de Berlin, de Saint-Petersbourg, de Turin, etc.: Deuxième édition, rigoureusement conforme à l'édition originale et précédée d'une notice de M. Barthélemy Saint-Hilaire sur les travaux de M. Eugène Burnouf (= *Bibliothèque Orientale*, Volume III) (Paris: Maisonneuve et C^e, 1876), XXXVIII, 586 pages.

どうやら同じ年に、標題頁に飾り枠を加え、叢書名も詳しい版が出版されていたらしい。いずれが先なのか、あるいは全く同時だったのか、筆者には判らない：

Introduction à l'histoire du buddhisme indien, par E. Burnouf de l'Institut de France et des Académies de Munich et de Lisbonne, Correspondant de celles de Berlin, de Saint-Petersbourg, de Turin, etc.: Deuxième édition, (= *Bibliothèque Orientale*, publiée sous la direction d'un comité scientifique international: *Chefs-d'Oeuvre Littéraires de l'Inde, de la Pers, de l'Égypte et de la Chine*, Tome Troisième) (Paris: Maisonneuve et C^e, 1876).

ビュルヌーフの「序説」から訳したとして、インド仏教説話を称する本があるが、内容はアショーカ王関係のアヴァダーナである。どうも出所が判然としない。しかし、どうやら「序説」第二版の316から385頁あたりの、ディヴ・アヴァダーナ (第26から29章にかけて) の適当な抜粋訳に見える。さして重要なものではないが、一応書き留めておこう：

Legends of Indian Buddhism. Translated from “Introduction à l'histoire du buddhisme indien” of Eugène Burnouf. Edited by L. Cranmer-Byng (and) S. A. Kapadia. With introduction by Winifred Stephens (Delhi: Ess Ess Publications, 1976), 128 pages [Stephen's “Introduction”, pp. 7-19] {orig. publ. 1903}.

68) “Notice sur les travaux de M. Eugène Burnouf”, par (Julds) Barthélemy Saint-Hilaire, *ibid.*, pp. VII-XXXI.

= *Journal des Savants*, août 1852, pp. 473-487, septembre 1852, pp. 561-575.

69) Barthélemy Saint-Hilaire, *Eugène Burnouf: Ses travaux et sa correspondance* (Paris 1891), XIII, 158 pages:

“Avant-propos”, pp. V-IX [daté Octobre 1891 à Paris]; “Note relative aux pages 30, 32, 38, 42 de ce volume”, pp. XI-XIII; “Ses travaux”, pp. 1-66 [“Quatrième classe des manuscrits, langue pâlie”, p. 51-53; “Cinquième classe des manuscrits, Bouddhisme du Népal”, pp. 53-66, esp. pp. 53-58!; “Sa correspondance”, pp. 67-120 [voir esp. p. 107 sur Burnouf, Lassen et Hodgson p. 114 f. sur Hodgson, 24 mss. skts. de Népal en 1837- *Le lotus de la bonne loi*]; “Bibliographie des travaux d'Eugène Burnouf”, pp. 121-158 [I. Travaux publiés isolément', pp. 121-130 (25 items); II, Travaux publiés dans le *Journal Asiatique*', pp. 130-138 (1823-1875); III. Travaux publiés dans le *Journal des Savants*', pp. 138-143 (1827-1844); IV. ‘Liste des travaux manuscrits d'Eugène Burnouf, pp. le *Journal des Savants*', pp. 138-143 (1827-1844); IV. ‘Liste des travaux manuscrits d'Eugène Burnouf, pp. 144-151; V. “Articles sur les travaux d'Eugène Burnouf et notices bibliographiques”, pp. 152-158.

上記の著作目録から、ビュルヌーフの死後、その記事が十点以上も数える事や、サンティレール自身が、ビュルヌーフの法華經仏訳について、論文を連載している事を知る(残念ながら、筆者は未見である):

Barthélemy Saint-Hiaire, *Journal des Savants*, année 1853, pp. 270-286, 353-270 (sic), 409-426, 484-509, 557-573 et 640-659; année 1854, pp. 43-59, 115-130 et 243-256.

[Cf. Hanayama's *Bibliography*, No. 11426]

70) Barthélemy Saint-Hilaire, "Lettres de Burnouf" (sic), *Journal des Savants*, août 1891, pp. 453-464, septembre 1891, pp. 509-521.

[cf. e.g. *Orientalische Bibliographie*, V: 1891, p. 132].

71) Jules Barthélemy Saint-Hilaire, *Le Bouddha et sa religion* (Paris: Didier, 1860), xxiv, 441 pages.

[Cf. Hanayama's *Bibliography*, No. 11413, etc.]

72) Cf. e.g. *Méthode pour étudier la langue sanscrite*, par Émile Burnouf et L. Leupol, faisant suite à la Méthode grecque et à la Méthode latine de J. L. Burnouf. Troisième édition revue par Émile Burnouf (Paris: Maisonneuve Frères & Ch. Leclec, 1885), XII, 230 pages:

73) Voir Émile Burnouf: "Telle fut la principale raison qui nous décida à calquer, en quelque sorte, notre grammaire sur la Méthode grecque et la Méthode latine de notre commun maître, J. L. Burnouf. Nous avons un autre motif: formés à l'école de son fils regretté, nous ne fûmes à peu près que mettre en œuvre ses propres idées et tender de réaliser un projet qu'il avait longtemps nourri sans avoir eu loisir de l'exécuter..." ("Préface" ad *op. cit.*, p. VI).

なお、動詞の活用に関して、ドイツ学派、なかんずくポップを明らかに意識していることは、興味深いと思う (v. *ibid.*, p. VII).

74) Émile Burnouf (avec la collaboration de L. Leupol), *Dictionnaire classique sanscrit-français, où sont condonnés, révisés et complétés les travaux de Wilson, Bopp, Westergaad, Johsa, etc.* (Nancy: Chez l'auteur / Paris: Chez V^o Benjamin Duprat, 1865), VIII, 781 pages.

75) *Essai sur le Pali, ou langue sacrée de la presqu'île au de-là du Gange, avec six planches lithographiques, et la notice des manuscrits palis de la Bibliothèque du Roi*; Par E. Burnouf et Chr. Lassen, Membres de la Société Asiatique de Paris. Ouvrage publié par la Société Asiatique (Paris: Librairie Orientale de Dondey-Dupré et Fils, 1826), (viii), 224 pages, 6 pl.

76) E. Burnouf, *Observations grammaticales sur quelques passages de L'Essai sur le Pali, de MM. E. Burnouf et Lassen* (Paris à la Librairie Orientale de Dondey-Dupré, 1827), 30 pages.

77) *Société Asiatique-Le Livre du Centenaire (1822-1922)* (Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1922), VIII, 295 pages:

Première partie: "Historique de la Société", par L. Finot, pp. 1-65;

Seconde partie: "Cent ans d'orientalisme en France (notice par des membres de la Société Asiatique)", pp. 67-294:

VIII. 'Les Études iraniennes anciennes', par A. Meillet, pp. 211-217;

IX. 'L'Indianism', par Félix Lacôte, pp. 219-249;

X. 'Indonésie et Indochine', par Antoine Cabaton, pp. 251-259;

XI. 'La Sinologie', par H. Maspero, pp. 261-283;

XII. 'Les Études japonaises', par J. Dautremier, pp. 285-288;

XIII. 'La Géographie', par Henri Cordier, pp. 289-294.

78) *Journal Asiatique: Périodique trimestriel publié par la Société Asiatique*. Tome CCLXI: Année 1973, Fascicules 1 à 4: *Numéro spécial pour le cent-cinquantième de la Société Asiatique (1822-1972): Cinquante ans d'orientalisme en France (1922-1972)*, 298 pages, 6 planches

(photos: Senart, Lévi, Pellit, Bacot, Virolleaud, Coedès):

- “La Société Asiatique: d’hier à demain”, par Jean Filliozat, pp. 3-12;
 - “L’Iran ancien”, par Philippe Gignoux, pp. 117-123;
 - “Les études turques”, par Louis Bazin, pp. 135-143;
 - “L’Asie centrale et les études monogoles”, par Louis Hambis, pp. 145-151;
 - “Les études tibétaines”, par Anne-Marie Blondeau, pp. 153-174;
 - “L’Indianisme”, par Jean Filliozat, pp. 175-190;
- 79) etc. *Vingt-sept ans d’histoire des études orientales. Rapport faits à la Société Asiatique de Paris de 1840 à 1867*, par Jules Mohl. Ouvrage publié par sa veuve. 2 vols. (Paris: C. Reinwald et C^{ie}, Libraires-Editeurs, 1879-1880), XLVII, 588 pp.; (III), 768 pages [‘Index’, II pp. 735-768].
- 80) F. Max Müller, “Notice sur Jules Mohl”, *op. cit.*, I, pp. IX-XLVII.
- 81) Cf. e.g. Edward W. Said, *Orientalism* (Harmondsworth: Penguin Books, 1985), p. 141 cum n. 44.

本書は若干偏った点もあったりするが、詳細な調査のもとになった労苦の作品であると思う。興味ある本に相違ない。詳しい訳注や索引を付した優れた日本語訳書のあるのを知ったので、追加しておきたい:

エドワード・W・サイード著/板垣雄三・杉田英明監修/今沢紀子訳: オリエンタリズム(東京・平凡社, 1986), 144頁上欄(392頁注44)。

- 82) *Collège de France-Chaire de langues et littératures de l’Inde. Leçon inaugurale fait le Mardi 6 Mai 1952* par M. Jean Filliozat, Professeur, 34 pages.

その背景も見つつ、さらに簡易なものもある:

Jean Filliozat, “France and Indology”, *Bulletin of the Ramakrishna Mission Institute of Culture for August 1955*: Transaction No. 12 (Calcutta 1955), pp. 1-10.

フィリオザ自身の短編著作集がある:

Jean Filliozat-Laghuprabandhah: Choix d’articles d’indologie (Leiden: E. J. Brill, 1974), XXV, 508 pages, 1 frontisp. (photo) [“Travaux de Jean Filliozat”, pp. XI-XXV].

Cf. e.g. Colette Caillat, “Jean Filliozat: 1906-1982”, *JA*, 1983, pp. 1-24 (“Bibliographie des travaux de Jean Filliozat”, pp. 5-24).

- 83) つい先般、手にしたばかりで、引用が後先してしまったが、省略するよりは良いであろう:
Annuaire du Collège de France 1989-1990. Résumé des cours et travaux. 90^e année (Paris: Collège de France, 1990), pp. 5-71:

“Le Collège de France. Quelques données sur son histoire et son caractère propre”:

- I. Les origines pp. 5-6);
- II. Le développement historique (pp. 7-8);
- III. Les chaires du Collège de France depuis le XIX^e siècle (pp. 8-57) [incl. Tableau des chaires depuis 1800’, pp. 20-57];
- IV. Le rôle propre et l’organisation du Collège de France (pp. 58-61);
- V. Donations (pp. 61-71).

最後の第五章にはいくつかの寄附基金が紹介されているが、1905年に創設されたミシヨ=基金は、少なくとも三回に一度は、外国の宗教哲学者・宗教史学者を招くことにしている。過去に五十名ほどの著名な学者が招ばれているが、日本人は1919年の姉崎正治のみである。仏教学では、1951年のラモット一人である。どういうわけか、戦後に招かれた学者はきわめて少ない。

なお、姉崎の講義録は、聖徳太子・最澄・空海・法然・日蓮・禅文化・近代宗教運動の一面といったものを要約した形に纏められて、出版されている。英語でなされた講義の仏訳の労を、ジュール・ブロック、シルヴァン・レヴィ夫妻などがとっているのが興味を惹く:

Masaharu Anesaki, *Quelques pages de l’histoire religieuse du Japon. Conférences faites au*

Collège de France (=Annales du Musée Guimet, Bibliothèque d'études, XLIII) (Paris: Edmond Bernard, 1921), IX, 173 pages.

フランスの事情に不慣れな筆者などには、パリの高等研究機関がどうなっているのか皆目わからない。学者・講義なども然りである。日仏東洋学会の「通信」の最近刊・第16号(1993年3月)に、パリの東洋学関係の講義や、新刊書・雑誌所収の論文を、諸種の生の資料から紹介しているのは、誠にあって有益である。編集委員の労を多としたい。

- 84) *Foë kouë ki, ou Relation des royaume bouddhiques: Voyage dans la Tartarie, dans l'Afghanistan et dans l'Inde, exécuté, à la fin du IV^e siècle, par Chÿ Fä Hian*, traduit du chinois et commenté par M. Abel Rémusat. Ouvrage posthume revu, complété, et augmenté d'éclaircissements nouveaux par MM. Klaproth et Landresse (Paris: Imprimé par autorisation du Roi à l'Imprimerie Royale, 1836), (iii), LXVII, 424 pages, 1 carte, IV planches.

- 85) *Recherches sur les langues Tartares, ou Mémoires sur différents points de la grammaire et de la littérature des Mandchous, des Mongols des Ouigours et des Tibétains*, par M. Abel-Rémusat. Tome I (Paris: L'Imprimerie Royale, 1820), viii, 1, 400 pages.

Mélanges asiatiques, ou Choix de morceaux critiques et de Mémoires relatifs aux religions, aux sciences, aux coutumes, à l'histoire et à la géographie des nations orientales, par M. Abel-Rémusat. 2 tomes (Paris: Dondey-Dupré Père et Fils, 1825-1826), (iv), viii, 456 pages; (iv), iii, 428 pages.

Nouveaux mélanges asiatiques, ou Recueil de morceaux de critique et de Mémoires relatifs aux religions, aux sciences, aux coutumes, à l'histoire et à la géographie des nations orientales, par M. Abel-Rémusat. 2 tomes (Paris: Schubart et Heideloff, 1828), (iv), IV, 446 pages; (iii), 428 pages, 1 carte.

- 86) Paul Demiéville, "Aperçu historique des études sinologiques en France", *Acta Asiatica*, No. 11 (Tokyo 1966), pp. 56-110
= *Choix d'Études Sinologiques (1921-1970)*, par Paul Demiéville (Leiden: E. J. Brill, 1973), pp. 433-487.

幸いに和訳がある: 大橋保夫(訳), 「フランスにおけるシナ学研究的歴史的發展」, 東方學, XXXIII (1967年1月), pp. 147-128; 同, XXXIV (1967年6月), pp. 134-96 [川勝義雄・興膳宏(共訳)]。

ドゥミエヴィル自身の著作については、下記を参照するのが便利であろう。次の仏教学・シナ学論集および追悼文に詳しい:

"Bibliographie: 1920-1971", établie par Gisèle de Jong, in: *Paul Demiéville-Choix d'études bouddhiques* (Leiden: E. J. Brill, 1973), et *Choix d'études sinologiques* (1973), pp. IX-XXXII.

Jacques Gernet, "Paul Demiéville: 1894-1979", *T'oung Pao*, LXV, 1-3 (1979), pp. 1-12, 1 frontisp. ["Bibliographie (suite)", pp. 9-13].

- 87) 福井文雅: 「欧米の東洋学と比較論」(東京・隆文館, 1991年6月)(計446頁)がそれである。恐らく著者は、次いで刊行した「中国思想研究と現代」(同, 1991年6月)(計462頁)で、その意図する所を展開しているように見える。

- 88) *Examen critique de quelques pages de chinois relatives à l'Inde, traduites par M. G. Pauthier, accompagné de discussions grammaticales sur certaines règles de position, qui, en chinois, jouent le même rôle que les inflexions dans les autres langues*, par M. Stanislas Julien, de l'Institut (Paris: Imprimerie Royale, 1841), (iii), 156 pages.

- 89) "天竺部彙考: Examen méthodique des faits qui concernent le Thien-tchu ou Inde, traduit du chinois par G. Pauthier", *Journal Asiatique*, série III, tome VIII (Octobre 1839), pp. 257-294.

[Cf. also Hanayama's *Bibliography*, No. 10054]

- 90) “Concordance sinico-sanscrite d’un nombre considérable de titres d’ouvrages bouddhiques, recueillie dans un catalogue chinois de l’an 1306, et publiée, après le déchiffrement et la restitution des mots indiens”, *Journal Asiatique*, série IV, tome XIV (1849), pp. 353-446.
- 91) *Méthode pour déciffrer et transcrire les mots sanscrits qui se reconstruent dans les livres chinois...*, inventée et démontrée par S. J. (Paris: Imprimerie Impériale, 1861), VI, 235 pages.
- 91) *Mémoires sur les contrées occidentales*, traduits du sanscrit en chinois, en l’an 648, par Hiouen-thsang, et du chinois en français par Stanislas Julien (= *Voyages des Pèlerins Bouddhiques*, II-III) (Paris: Imprimerie Impériale, 1857-1858):
Tome I contenant les livres I à VIII, et une carte de l’Asie centrale, LXXIX, 493 pages;
Tome II contenant les livres IX à XII, un mémoire analytique sur la carte du premier volume, cinq index, et une carte japonaise de l’Asie centrale et de l’Inde ancienne, XIX, 576 pages
- 92) *Les Avadānas: Contes et apologues indiens inconnus jusqu’à ce jour suivie de fables, de poésies et de nouvelles chinoises*, traduits par Stanislas Julien, 3 vols. (Paris: Benjamin Duprat, 1859), xx, 240 pages; viii, 252 pages; 272 pages.
- これは、更に版を改めて、二冊本として次の年に出版されている:
(*Les Avandanas.*) *Contes et apologues indiens, inconnus jusqu’à ce jour, suivis de fables, de poésies chinoises.* Traduction de M. Stanislas Julien (en 2 tomes) (Paris: L. Hachette et Cie, 1860), xx, 240 pages; 216 pages.
- 今度は、これがドイツ語に翻訳されて紹介されているのも、興味深い:
Die Avadānas: Indische Erzählungen und Fabeln in Französisch übersetzt von Stanislas Julien in Deutsch übertragen von Albert Schnell (Rostock: Stiller, 1903), xii, 173 pages
- 93) Édouard Chavannes, *Cinq cents conte et apologues extraits du Tripitāka chinois et traduits en français*, 4 vols. (Paris: Ernest Leroux, 1910-1935) {Orig. 3 vols. (1910-1911)}
[Vol. IV = *Bibliothèque de l’Institut des Hautes Études Chinoises*, I]:
Réimpr. photomech., 4 vols. en 3 (= *Collection U. N. E. C. O. d’Oeuvres Représentatives: Série Chinoise*) (Paris: Adrien-Maisonneuve, 1962), 429+450+397+345 pages.
- 94) Voir Jan Willem de Jong, *Indo-Iranian Journal*, VIII (1965), pp. 240-242.
- 95) É. Chavannes, “Fables et contes de l’Inde extraits du Tripitāka chinois”, *Actes du XIV^e Congrès international des Orientalistes* (Algiers 1905), Première partie, Cinquième section: *Chine et Extrême-Orient* (Paris: Ernest Leroux, 1906), pp. 84-145.
- これに紹介された三十話の内、第5・7・22話の三つを除いて、すべて上掲書に再録されている。
Cf. A. Yuyama, *Systematische Übersicht über die buddhistische Sanskrit-Literatur*, Teil I: *Vinaya-Texte* (Wiesbaden: Franz Steiner, 1979), pp. 49-51.
- 96) *Folklore Fellows’ Communications* [abbrev. as “*FF Communications*”] (Helsinki: Academia Scientiarum Fennica, 1910-).
- 97) Cf. e. g. Jacques Bacot, “La collection tibétaine Schilling von Canstadt à la Bibliothèque de l’Institut”, *Journal Asiatique*, CCV (1924), pp. 321-348.
Cf. Louis Ligeti, “La Collection mongole Schilling von Canstadt à la Bibliothèque de l’Institut”, *T’oung Pao*, XXVII (1930), pp. 119-178.
- 98) Anton Schiefner, “Indische Erzählungen”, *Bulletin de la Classe des Sciences Historiques, Philologiques et Politiques de l’Académie Impériale des Sciences de Saint-Petersbourg*, tome XXI, 5 (1876), Sp. 433-493; XXII, 1 (1876), columns. 123-138; XXIII, 1 (1877), cols. 1-70; XIII, 4 (1877), cols. 529-565; XXIV, 4 (1878), cols. 449-508
= *Mélanges Asiatiques*, VII (1876), pp. 673-760, 773-795; VIII (1877), pp. 89-188, 281-133; VIII (1879), pp. 449-534.

—, “Indische Künstleranedoten”, *ibid.*, XXI, 3 (1876), cols. 193-197 = *Mélanges Asiatiques*, tome VII, 4-6 (1876), pp. 519-525.

何と云っても、シーフナーのドイツ語原訳書の纏まって出していないことは、残念至極である。若干の誤解を招く標題で、すべて英重訳されている。しかし、シーフナーの依頼を受けた訳者の序論は懇切である。残念なことに、私は、ラルストン訳五十話の内の数点について、シーフナーの原訳の出所をつきとめていない。英訳者の序論は、極めて懇切丁寧であるにも拘らず、出典が一覧のものに見られない：

Tibetan Tales derived from Indian Sources. Translated from the Tibetan of the Kah-gyur by F. Anton von Schiefner. Done into English from the German, with an introduction by W. R. S. Ralston (= *Trübner Oriental Series*) (London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co. Ltd, 1906), 1xv, 368 pages [orig. ed.: London: Trübner, 1886]

New edition with a preface by C. A. F. Rhys Davids (= *Broadway Translations*) (London: George Routledge & Sons/New York: E. P. Dutton & Co., 1926), 1xv, 368 pages.

新版は、リス・デヴィツ夫人 (Caroline Augusta Rhys Davids-Foley) (1942年没) の前言が付いたのみで全く変更はないが、彼女なりの補強の跡は見られる。

これが、更に、和重々訳されている。シーフナー原訳とあるが、恐らくラルストン訳からの和訳だと思う。和訳本には、二十五話が収録されている：

シーフネル原譯・吉村公平譯：西藏傳承印度民話集(東京・日新書院，昭和18年)，(一)，(二)，(三)，250頁(口絵あり)。

99) Léon Feer, *Fragments extraits du Kandjour*. Traduits du Tibétain (= *Annales du Musée Guimet*, V) (Paris: Ernest Leroux, 1883), XIII, 577 pages.

100) Emmanuel Cosquin, *Les contes Indiens et l'Occident. Petites monographies folkloriques à propos de contes maures recueillis à Blida par M. Desparmet*. [=Ouvrage posthume] (Paris: Librairie ancienne Honoré Champion-Eduard Champion, 1922), (v), 263 pages.

コスカンに関しては、残念ながら、フランス学士院の客員 (Correspondant de l'Institut, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres) であったという以外に、筆者の知るところは殆ど全くない。

101) H. H. Wilson, “Abstract of the Contents of the Dul-vá, or First Portion of the Kāh-gyur, from the Analysis of Mr. Alexander Csoma de Kőrös”, *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, I (1832), pp. 108, 375-392.

Alexander Csoma, “Analysis of the Dulva, a Portion of the Tibetan Work entitled the Kāh-gyur”, *Asiatic Researches*, XX (1836), pp. 41-93.

—, “Notices of the Life of Shakya, extracted from the Tibetan Authorities”, *ibid.*, pp. 285-317.

—, Analysis of the Sher-chin_P'hal-ch'hen_Dkon-séks_Do-de_Nyáng-dás_and Gyut; Being the 2nd, 3rd, 4th, 5th, 6th, and 7th Divisions of the Tibetan Work, entitled the Kah-gyur”, *ibid.*, pp. 393-552.

—, “Abstract of the Contents of the Bstan-hgyur”, *ibid.*, pp. 553-585.

幸いに、最近、写真覆刻して、一書に纏められた：

Analysis of the Kanjur (= *Bibliotheca Indo-Buddhica*, II) (New Delhi: Sri Satguru Publications, 1982), vii, 281 pages.

しかし、のちにフェールが、これをフランス語に訳し改訂増補した版の恩恵に、我々は浴してきた：

Léon Feer, “Analyse du Kandjour et du Tandjour. Recueils des livres sacrés au Tibet par Alexandere Csoma de Kőrös. Traduite de l'anglais et augmentée des diverses additions et remarques”, *Annales du Musée Guimet, Grande Bibliothèque*, II (Paris 1881), pp. 131-577.

102) Cf. e.g. A (ndrej) I (vanovič) Vostrikov (1904-1937), *Tibetskaja istoričeskaja literatura* (= *Bibliotheca Buddhica*, XXXII) (Moskva: Izdatel'stvo Vostočnoj Literatury, 1962), esp. p. 13 (Čoma de Kőrös).

- = *Tibetan Historical Literature*, translated by H(arish) C(handra) Gupta (= *Soviet Indology Series*, IV) (Calcutta: Indian Studies Past & Present, 1970), p. 13.
- 103) “Tibetan Historical Studies: Being a reprint of the articles contributed to the Journal of the Asiatic Society of Bengal by Alexander Csoma de Körös, edited by E. Denison Ross”, *Journal and Proceedings of the Asiatic Society of Bengal*, VII (1911), Extra Number (1912), 172 pages, 1 plate (Bust of Csoma).
- 104) See e.g. “Copy of letter from B.H. Hodgson to Eugène Burnouf. (Nepal, 1 May 1837)” in: *Minor Collections and Miscellaneous Manuscripts*, Section I, ed. by G.R. Kaye (London 1937) [cf. n. 55 above], p. 1083: “... he {=De Coros, i.e. Csoma Körösi} is rather prone to eschew literary commerce with Europe. He suspects you of running away with the fruits of other men's labours, & to speak generally there is some room for the suspicion...”.
- 105) See e.g. Theodore Duka, *The Life and Works of Alexander Csoma de Körös* (London: Trübner, 1885) [reprinted with W.W. Hunter, “Csoma de Koros: A Pilgrim Scholar”, pp. iii-xxvi (Delhi: Mañjuśrī, 1972), xxxvi, 234 pages].
- Cf. József Terjék, *Körösi Csoma dokumentumok az Akadémiai Könyvtár gyűjteményeiben* (Budapest 1976), 226 pages.
- 最近目にした興味ある論稿二点を紹介しておきたい：
Elek Csetri, “Central Asia as Portrayed in early 19th Century Transylvanian Literature”, *AOH*, XLIII, 2-3 (1989), pp. 145-153.
- Luciano Petech, “Ippolito Desideri, Alexander Csoma de Körös, Giuseppe Tucci”, *AOH*, XLIII, 2-3 (1989), pp. 155-161.
- Cf. also *Tibetan Compendia Written for Csoma de Koros by the Lamas of Zans-dkar (Manuscripts in the Library of the Hungarian Academy of Sciences*, edited by J. Terjék) (= *Śatapiṭaka Series*, CCXXXI) (New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1976), columns 5-22: “Introduction” by the editor.
- 106) 拙稿, “チベット学者チョーマのゲッティンゲン留学”, 東洋文庫書報, No. 8 (1976) (1977), pp. 87-91; 同書報, No. 18 (1986) (1987), pp. 89-92 参照。
- Cf. Tibor Kesztyüs, “Ein Csoma-von-Körös-Autograph in Göttingen”, *Finnisch-Ugrische Mitteilungen*, VII (1984), pp. 201-209.
- Also István Futaky, “Alexander Csoma von Körös und Göttingen”, *ibid.*, pp. 21-28.
- 最近, 記憶に留めるべきチョーマ伝が出版されたので, つけ加えておきたい：
一島正真, “チベット学の先駆者チョーマについて”, 大正大学研究紀要 (仏教学部・文学部), LXXVI (1991), pp. 338 (1)-318 (21).
- 107) *Bha'-gyur-gyi dkar-chag oder Der Index des Kandjur*. Herausgegeben von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften und bevorwortet von I. J. Schmidt (St.-Petersburg, 1845: In Leipzig bei Leopold Voss), (iv), 215 pp.
- Schilling de Canstadt, “Bibliothèque bouddhique ou Index du Gandjour de Nartang, composée sous la direction du Baron Schilling de Canstadt. Avant-propos [Lu le 26 novembre 1847]”, *Bulletin de la Classe des Sciences Historiques, Philologiques et Politiques de l'Académie Impériale des Sciences de Saint-Petersbourg*, tome IV (1847), cols. 321-336, 337-339.
- I. J. Schmidt und O. Böhtlingk, “Verzeichniss der Tibetischen Handschriften und Holzdrucke im Asiatischen Museum der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften (Présenté le 18 Décembre 1846)”, *ibid.*, IV (1847), cols. 81-125.
- Cf. Anton Schiefner, “Berichte über die neueste Büchersendung aus Peking”, *ibid.*, IX (1852), pp. 10-14, 17-32.
- このシーフナーの報告の中にも, 面白い資料がある。それらすべてがビュルヌーフの目に止まっ

- たかどうかは判らない。その他の文献目録類も相当数あるが、ここでは省略したい。
- 108) Cf. Franz Balbinger, "Isaak Jakob Schmidt, 1779-1847. Ein Beitrag zur Geschichte der Tibetforschung", *Festschrift für Friedrich Hirth zu seinem 75. Geburtstag* (= *Ostaiatische Zeitschrift*, VIII) (1919-1920), pp. 7-21.
- 109) Cf. e.g. "Catalogue Burnouf" Nos. 2581-2621: 'Bibliographie'.
- 110) *KACCĀYANA et la littérature grammaticale du Pāli*. Première partie: *Grammaire pālie de Kaccāyana. Sūtras et commentaire*, publiés avec une traduction et des notes par Émile Senart (Paris: Imprimerie Nationale, 1871), (iv), 339 pp.
{=Extrait du *Journal Asiatique*, mars-avril 1871 (série VI, tome 17), pp. 193-540}
- 111) 拙稿, "Mahāvastu-Avadāna に関する書誌学的雑録", 名著通信, 第11号(1977年8月), pp. 7-6 参照。
Cf. also A. Yuyama, "A Bibliography of the *Mahāvastu-Avadāna*", *IJ*, XI, 1 (1968), pp. 11-23.
- 112) *Recueil d'articles de Jules Bloch 1906-1955*. Textes rassemblés par Colette Caillat (= *Publications de l'Institut de Civilisation Indienne*, Série in 8°, Fascicule 52) (Paris 1985), XXXIX, 557 pages (photo: p. IV):
["Bibliographie des travaux de Jules Bloch (1880-1953)", pp. VII-XXVII + 'Addenda' sans pagination après p. XXVIII]
- 113) *Saddanīti. La grammaire pālie d'Aggavaṃsa*. Texte établi par Helmer Smith (= *Skrifter utgivna av Kungl. humanistiska Vetenskapssamfundet i Lund / Acta reg. Societatis humaniorum litterarum Lundensis*, XII, 1-5, 1-2) (Lund: C. W. K. Gleerup, 1928-1929-1930-1949-1954-19666):
I. *Padamālā* (Pariccheda I-XIV) (= *Skrifter*, XII, 1) (1928), XI, 314 pages.
II. *Dhātumālā* (Pariccheda XV-XIX) (= *Skrifter*, XII, 2) (1929), pp. 315-602.
III. *Suttamālā* (Pariccheda XX-XXVIII) (= *Skrifter*, XII, 3) (1930), pp. 603-928
IV. *Tables*-Première partie: *Textes cités, Sūtras, Racines, Morphèmes, Systèmes grammatical et Métrique* (= *Skrifter*, XII, 4) (1949), pp. 929-1172.
V: 1, *Tables*-Deuxième partie: *Vocabulaire, Additions, Corrections* (Premier fascicule: *A-Dhaṃsati*) (= *Skrifter*, XII, 5.1) (1954), pp. 1173-1460.
V: 2, *Tables*-Deuxième partie: *Vocabulaire, Additions, Corrections* (Deuxième fascicule: *Dhakketi-Holati*) (= *Skrifter*, XII, 5.2) (1966), pp. 1461-1795.
- 114) *A Critical Pāli Dictionary*, II, 1 (Copenhagen 1960), pp. V-VIII (by Hans Hendrksen).
- 115) *Dialectes dans les littératures indo-aryennes*. Actes du Colloque International organisé par l'UA 1058 sous les auspices du C. N. R. S. avec le soutien du Collège de France, de la Fondation Hugot du Collège de France, de l'Université de Paris III, du Ministère des Affaires Étrangères (Paris) (Fondation Hugot, 16-18 septembre 1986). Ouvrage publié avec le concours du CNRS, de la Fondation Hugot et de la Fondation Meillet du Collège de France, du Conseil Scientifique de l'Université de Paris III. Édité par Collete Caillat (= *Publications de l'Institut de Civilisation Indienne*, Series in-8°, Facicule LV) (Paris: Collège de France / Institut de Civilisation Indienne / Édition-Diffusion de Boccard, 1989), XV, 579 pages.
- 116) Cf. Louis Finot, "Historique de la Société Asiatique", *Le livre du centenaire (1822-1922)* (Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1922), {pp. 1-65}: p. 17.
- 117) "...Croyez-vous qu'au moment actuel je n'ai pas encore osé porter au *Kaṭhaka* l'hommage de notre Essai?" (v. "*Lettres Burnouf*", No. VIII {pp. 28-31}, p. 29).
- 118) Voir *Le livre du centenaire*, p. 18 et suiv.
- 119) "... je vous serais bien obligé de faire écrire sur la première page: «Volume appartenant à M. Eug. Burnouf.» Cette mesure est nécessaire pour que le livre ne soit pas envoyé par erreur à d'autres personnes ou à quelque corps savant." (*Papiers Burnouf*", p. 149).

- 120) "... j'ai éprouvé une bien grande satisfaction en apprenant que les livres de Buddha (Sākya) existaient en sanscrit..." ("Papiers Burnouf", *ibid.*, p. 148).
- 121) "... le long séjour du bouddhisme dans l'Inde suffit pour rendre raison de la formation du pali et subsidiairement de son adoption par les bouddhistes du sud. Quand naquit la religion, ou plutôt la philosophie nouvelle, le samskrit dut être la langue de ses sectateurs..." (*Essai sur le Pali*, 1826: Chapitre IV 'De l'Extension du Pali et de son origine', p. 146).
- 122) Cf. e.g. *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung/The Language of the Earliest Buddhist Tradition* (= *Symposien zur Buddhismusforschung*, II), herausgegeben von Heinz Bechert (= *Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philol.-hist. Klasse*, III. Folge, Nr. 117) (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980), 193 pages:
Introduction by Heinz Bechert; articles by Ludwig Alsdorf, H. Bechert, John Brough, Colette Caillat K. R. Norman, Gustav Roth, Ernst Waldschmidt, A. Yuyama; protocol by H. Bechert and Georg von Simson.
なお拙稿,「仏典の編纂に用いられた言語の特質」『奥田慈応先生喜寿記念・仏教思想論集』(京都: 平楽寺書店, 昭和51年), 873~887頁参照。
- 123) Cf. e.g. Philip C. Almond, *The British Discovery of Buddhism* (Cambridge/New York-New Rochelle-Melbourne-Sydney: Cambridge University Press, 1988), pp. 24-28, esp. p. 27.
- 124) 拙稿,「エジャトンの仏教梵語研究の学史的背景」『渡辺文磨博士追悼記念論集・原始仏教と大乘仏教』(京都: 永田文昌堂, 印刷中), 46頁以下・50頁以下参照。
- 125) "...; mais je serais heureux si, par votre protection, je pouvais acquérir quelques-uns des livres buddhiques en sanscrit les plus importants, dont j'ai l'espoir de pouvoir traduire quelques portions, et qui resteraient d'ailleurs après moi dans mon pays..." ("Papiers Burnouf", *ibid.*, p. 149).
- 126) 拙稿「仏教文献学の方法試論」『水野弘元博士米寿記念論集・パーリ文化学の世界』(東京: 春秋社, 1990年), 125~152頁, 特に144~145頁参照。
- 127) "Soyez, Monsieur, intimement convaincu que personne au monde n'a pu être blessé de vos remarques sur les interprétations que Rémusat avait données de certains points difficiles de la doctrine buddhique. Nous sommes d'ailleurs accoutumés à la critique sur le continent, et les Allemands traitent les Français d'une manière bien plus rude. Et puis ce pauvre Rémusat est mort; personne ne prend plus soin de sa mémoire..." ("Papiers Burnouf", *ibid.*, p. 153).
- 128) "...Je n'hésite donc pas à vous écrire de nouveau, quoique, depuis la lettre que je vous ai adressée, vers le 20 avril dernier, pour vous remercier du présent que vous avez fait de vos vingt-quatre curieux manuscrits buddhiques en sanscrit, vous ne pouviez vous attendre à rien de bien nouveau de ma part..." ("Papiers Burnouf", p. 157).
その中の梵文法華經写本が, 最近, 移転したアジア協会図書室にさりげなく保存されている:
Cf. Jean Filliozat, "Catalogue des manuscrits et tibétains de la Société Asiatique", *Journal Asiatique*, 1941-1942 (1945), p. 9: MS. No. 2 (Don Hodgson 1837)-Papier (sans date), 248 folios.
- 129) "...Quelques jours après la réception des vingt-quatre volumes, j'ai été chargé par la Société d'en faire l'examen, de concert avec M. Jacquet..." ("Papiers Burnouf", p. 157).
- 130) No. 69. Liste des manuscrits envoyés par B. H. Hodgson à la Société Asiatique (Volume in-4°, monté) {22 fols.}:
I (Fol. 1-12). 《Original account of 600 rupies paid by B. H. Hodgson Esq. to nipales copyists for the transcription of sanskrit Buddha books designed for the Asiatic Society of Paris. Nepal Residency, Sept. 20, 1836. B. H. Hodgson.》La liste des manuscrits est écrite en caractères dévanagaris sur papiers de l'Inde.

- II (Fol. 13-16). 《Catalogue des mss. bouddhiques du Népal que M. Hodgson a fait copier la Société asiatique.》 Copie de la liste précédente, en caractères dévanagaries, faite par E. Jacquet.
- 131) No. 53. Extraits du Saddharma pundarika et autres (Volume monté in-folio, 204 feuillets): No. 53. I (Fol. 1-177). Copie en caractères dévanagaris du commencement du Saddharma pundarika, faite sur le manuscrit de la Société asiatique, l'un des 24 manuscrits composant le premier envoi d'Hodgson en 1837. La copie s'arrête à la fin du chapitre III, au fol. 56 v° du manuscrit qui en a 248. En marge, à gauche, sont inscrites les variantes fournies par deux autres manuscrits du Saddharma pundarika envoyés par Hodgson à Burnouf en 1845 et qui portent à la Bibliothèque Nationale les n°s 99 et 100 du fonds Burnouf.
- C'est d'après le texte du manuscrit de la Société asiatique que Burnouf a exécuté sa traduction, publiée sous le titre de: *Le Lotus de la bonne loi, traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au Bouddhisme* (Paris, 1852, grand in-4°) (*"Papiers Burnouf"*, p. 51).
- Cf. MSS. Nos. 138-139/140-141, Bibliothèque Nationale (Paris) (= *"Collection Burnouf"* Nos. 99-100): voir *"Catalogue Burnouf"*, p. 333; Nos. 99-100; Cabaton's *Catalogue*, I, p. 17; Filliozat's *Catalogue*, I, p. 84; also Yuyama, *SP-Bibl.*, p. 16.
- 132) Cf. MS. No. 6, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland (London): see E. B. Cowell and J. Eggeling, "Catalogue of Buddhist Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Royal Asiatic Society (Hodgson Collection)", *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, N. S., Vol. VIII (1876), Article No. 1, p. 7 [Also published separately by Stephan Austin & Sons, Hertford, 1876], p. 7].
- [= Janert I No. 174; cf. Yuyama, *SP-Bibl.*, p. 16].
- 133) "...A l'égard de votre demande d'obtenir communication du manuscrit du *Saddharma Pundarika*, je l'ai communiquée au Conseil de la Société asiatique et j'ai obtenu la permission de vous l'envoyer pour le temps qu'il vous sera nécessaire. Il y a eu quelque délai pour le trouver parmi les manuscrits de M. Hodgson, et après pour trouver un moyen convenable de vous le remettre; mais, à présent, M. le D^r Gibson, qui va partir pour Paris, a bien voulu s'en charger, et j'espère qu'il vous arrivera en sûreté..." (*"Lettres Burnouf"*, p. 535: 'Appendice' XX: Lettre de H. H. Wilson à Eugène Burnouf).
- 後の書簡集には、上の一通があるのみである。日の目を見ない往復書簡が、どこかにまだあるだろう。
- 134) For further reference see also Yuyama, *A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapundarikasūtra* (= *Faculty of Asian Studies Oriental Monograph Series*, V) (Canberra: The Australian National University Press, 1970), p. xxv fn. 2, also p. 16: *Pa, Pb and Pc*.
- 135) Cf. *op. cit.*, Appendix A. VIII, p. 353.
- 136) Voir *Livre du Centenaire*, p. 50 f. cum n. 1.
- 137) Cf. Yuyama, *SP-Bibl.*, p. 11 n. 8; 拙稿「法華經梵本参遺 (I)」『法華文化』No. 19 (東京・立正大学法華經文化研究所, 1972年3月), 6~5頁参照。
- 138) "Le Président remercie M^{me} Baruch d'avoir fait don à la Société d'un manuscrit de son mari (édition critique du *Lotus de la Bonne Loi*)", *Journal Asiatique*, 1960, p. 548 (Observation de Paul Demiéville).
- 139) "... avec des observations, qu'on dit d'un grand intérêt, sur la langue même dans laquelle cet ouvrage est écrit, je me tournai vers un livre nouveau, un des neuf *Dharma, le Saddharma pundarika*, et je puis vous affirmer que je n'a pas eu à me repentir de mon choix. Depuis

le 25 avril environ, tous les moments que j'ai pu enlever à mes occupations comme professeur de sanscrit et académicien, je les ai consacrés sans réserve à cet ouvrage, dont j'ai lu déjà des portions assez considérables. Je n'ai pas tout compris, et vous ne vous en étonnerez pas; la matière est très nouvelle pour moi..." ("Papiers Burnouf", p. 158).

- 140) Cf. "Papiers Burnouf", par Léon Feer (pp. 52-54):
 No. 54. Lotus de la bonne loi.-Notes (Volume in-folio, 136 feuillets) ("Papiers Burnouf", p. 52).
 No. 55. Lotus de la bonne loi.-Notes (Volume in-folio, 127 feuillets) ("Papiers Burnouf", p. 52 f.).
 No. 56. Lotus de la bonne loi.-Notes (Volume in-folio, 118 feuillets) ("Papiers Burnouf", p. 53 f.).
 No. 57. Lotus de la bonne loi.-Notes (Volume in-folio, 104 feuillets) [I(Fol. 1-6); IV (Fol. 31); V (Fol. 32-77 bis)] ("Papiers Burnouf", p. 54).

141) "...Pour ma part, je serais bien heureux de pouvoir obtenir de vous une nouvelle copie du *Saddharma pundarika* et du *Samādhi rādja*, par la raison qu'on n'est jamais sûr du sens de certains passages quand on n'en a qu'un exemplaire..." ("Papiers Burnouf", p. 160).

142) Hendrik Kern, *The Saddharmapundarika, or The Lotus of the True Law (= Sacred Books of the East, XXI)* (Oxford: Clarendon Press, 1884), xlii, 454 pp.

これは何度も増刷されて、他の出版社から覆刻刊行されている。その序論は、彼の全集にも取められる:

Verspreide Geschriften, Vol. IV: *Achter-Indië (slot), Brahmanisme en Buddhisme, Maleisch-Polynesische taalvergljking*, 1 (s-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1916), pp. 123-148.

143) ケルンについては、下に挙げる筆者の詳細な注を参照されたい:「J.W. ドゥヨング著: オランダのインド学・佛教学」『印度学佛教学研究』XIV, 1 (1965), esp. p. 377 (78), n. 8.

なお、最近、ライデン大学に関して、非常に面白い本が出たので紹介しておこう:
Leiden Oriental Connections 1850-1940, edited by Willem Otterspeer (= *Studies in the History of Leiden University*, Vol. 5) (Leiden: E. J. Brill/Universitaire Pers Leiden, 1989) (Leiden-New York-København-Köln: E. J. Brill, 1989), VII, 391 pp. (with plates on 16 pages between pp. 152-153);

J.C. Heesterman, "The Precarious Rise and Survival of Sanskrit and Indian Studies", pp. 115-125;

Hanna't Hart, "Imagine Leiden without Kern", pp. 126-140.

144) 南条「懐旧録」291~301頁:『梵文法華経』成る」参照。

これをもとに、次著も、法華経に関しては書かれたのではあるまいか。しかしさすがの碩学である。著者の博識には驚くほかない。近代印度学の初期の学匠に関して、きわめて幅広く、しかも背景にいたるまで綿密に記述している(シュズィー夫妻に関する記述などは好例である:同書, 122-131頁参照):前嶋信次「インド学の曙」(=ボン・ブックス)(東京・世界聖典刊行協会, 1985年), 92~93頁参照。マックス・ミュラーと笠原研寿・南条文雄を描いた「美しき師弟」は、『大法輪』(昭和24年10月から翌年2月まで)に掲載されたもの(窪寺紘一「後記」による)。

145) "...Je vous ai donné, dans ma dernière lettre, quelques détails sur progrès que je faisais dans la lecture des vingt-quatre volumes que vous avez envoyés en présent. J'ai traduit 100 pages, sur 142, du *Saddharma pundarika*. J'y ai trouvé les plus beaux spécimens des prédications de Buddha. Je compte terminer ce volume quand je serai revenu des eaux, où je vais me faire soigner contre la gravelle dont je souffre horriblement..." ("Papiers Burnouf", p. 162).

146) "...Car, comme plusieurs de ces copies paraissent avoir été exécutées rapidement, elles

sont en général fautives, et pour entendre plusieurs passages il est absolument indispensable d'avoir deux copies différentes. Les ouvrages auxquels je tiendrais le plus seraint :

1° *Saddharma pundarika*; 2° *Samādhi rādja*; 3° *Kāranda vyūha*; 4° *Gunakārandavyūha*; 5° *Dharmakōça vyākhyā* (quelle belle copie vous avez envoyée à la Société!); 6° *Divya avadāna*; 7° *Mahāvastu avadāna*; 8° *Açōka avadāna*; 9° *Sumagadha avadāna*; 10° *Daçabhūmiçvara*; 11° Le grand *Rakchā Bhāgavati*, en cinq volumes." ("Papiers Burnouf", p. 163).

147) "...C'est le *Saddharma pundarika*. Depuis cette lettre, qui est datée du milieu de juillet, j'ai, malgré un état presque constant de maladie qui m'a fait complètement perdre un mois aux eaux de Vichy, fait des progrès assez rapides dans la lecture de cet ouvrage curieux sous plusieurs rapports. Je suis maintenant parvenu au feuillet 233, sur 248 que contient le manuscrit; vous voyez que j'aurai bientôt fini..." ("Papiers Burnouf", p. 164 f.).

148) "...; mais j'en serai débarrassé et je pourrai me livrer à mon *Lotus blanc de la bonne loi*..." ("Papiers Burnouf", p. 168).

149) "...J'ai achevé la traduction du *Saddharma pundarika* et aussi celle du *Kārandavyūha*, ouvrage moins long que le précédent; mais l'état d'imperfection de ces deux manuscrits est tel que je ne puis espérer de sitôt de les publier sans les avoir collationnés sur une autre copie. C'est pour cela que j'avais pris la liberté de vous prier de faire pour moi l'acquisition de ces ouvrages et..." ("Papiers Burnouf", p. 169 f.).

150) どうした事か、編者は、この手紙だけ初めの部分を省略して、この文で始まる：

"...Je pense beaucoup à vous, car je suis plongé dans vos manuscrits buddhiques. J'ai fini d'imprimer la traduction du *Saddharma pundarika*; mais je voudrais mettre une introduction à cet ouvrage bizarre, et j'ai besoin de beaucoup lire d'autres ouvrages dont les manuscrits ne sont pas toujours très corrects..." ("Papiers Burnouf", p. 174).

151) "...vous m'avez fait d'une caisse de livres sanscrits buddhiques... J'ai revu sur un exemplaire nouveau du *Saddharma Pundarika*, contenu dans cette seconde caisse, la traduction française que j'avais faite sur l'exemplaire, alors unique, de la Société asiatique. J'y ai ajouté des notes sur la langue, et plusieurs appendices sur diverses catégories philosophiques et morales, parmi celles qui sont le plus souvent citées dans le *Saddharma*. Le volume, qui est in-4°, et d'une impression serrée, est actuellement parvenu à sa 808° page (rather bulky!), mais malheureusement pas aussi plein que gros. J'y joindrai une ample table pour qu'on puisse s'y reconnaître, et, si vous le permettez, je vous le dédierai respectueusement, comme au fondateur de la véritable étude du *Buddhisme* par les textes et par les monuments..." ("Lettres Burnouf", p. 441 f.: Datum- 16. II. 1852).

152) いわゆる献辞頁 (第3頁) たっぷり使って言う：

A MONSIEUR

BRIAN HOUGHTON HODGSON,

MEMBRE DU SERVICE CIVIL DE LACOMPAGNIE DES INDES,

COMME AU FOUNDATEUR DE LA VÉRITABLE ÉTUDE DU BUDDHISME

PAR LES TEXTES ET LES MONUMENTS,

E. BURNOUF.

153) *Le Lotus de la Bonne Loi, traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au *Buddhisme**, par M. E. Burnouf, Secrétaire perpétuel de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres (Paris: Imprimé par autorisation du Gouvernement à l'Imprimerie Nationale, 1852), (iii), IV, 897 pages (In-4°).

[“Avertissement”, par Jules Mohl (à Paris, le 6 octobre 1852), IV pages (à en-tête)]

- [“ Index générale ”, par Th. Pavie (pp. 871-897)].
 {Cf. “ *Lettres Burnouf* ”, p. 442 n. 1, et p. 562 ad “ Bibliographie ” I-24 cum n}
- 154) Cf. *Bibliothèque Nationale / Catalogue général des manuscrits français*, par Henri Omont: *Novelles acquisitions françaises*, IV: N^{os} 1001-11353 et 20001-22811 (Paris: Ernest Leroux, 1918); N^{os} 10587-10606: *Correspondance et papiers de Jean-Louis Burnouf (1775-1844) et d'Eugène Burnouf (1801-1852)* (pp. 66-68; N^{os} I-XIX):
 VII-IX (10593-10595): Correspondance générale d'Eugène Burnouf avec divers savants, classée par ordre alphabétique;
 XI (10597): Correspondance avec différents d'Angleterre (417 feuilles);
 XII (10598): Correspondance avec différents savants de l'Inde (240 feuilles).
- 155) Voir “ *Catalogue Burnouf* ”, p. 333 (Deuxième partie: Manuscrits Nos. 99-100).
- 156) *Nouvelle édition* avec une préface de Sylvain Lévi, Professeur au Collège de France. Tome I.- *Traduction et notes*; Tome II.- *Appendice (Mémoires annexes)* (= *Bibliothèque Orientale*, tomes IX-X) (Paris: Librairie Orientale et Américaine: Maisonneuve Frères, Editeurs, 1925), (iii), IV, IV, 434 pages; 435-897 pages.
- 157) Réimprimé avec l'autorisation de l'Imprimerie Nationale en 1 volume (Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient: Adrien Maisonneuve, J. Maisonneuve, succ., 1973), IV, 897 pages [sans “ Préface ” de S. Lévi]
- 158) “...; cette leçon qui est celle du manuscrit de la Société asiatique, est remplacée par celle de... dans les deux manuscrits de M. Hodgson, et par celle de... dans le manuscrit de Londres. J'avais adopté pour ma traduction la variante..., parce que je l'avais trouvée justifiée par le passage suivant de l'Abhidharmakoça vyākhyā:...” (Burnouf, *Lotus*, p. 204).
- 159) “...Cette leçon n'est pas celle du manuscrit de Londres ni des deux manuscrits de M. Hodgson, qui lisent...” (Burnouf, *Lotus*, p. 205).
- 160) “...Mais tu me juges trop en ami, en pensant que le *Lotus* est près d'être terminé, je n'ai pas été aussi vite que tu crois. C'est même parce que je travaille régulièrement que je ne produis pas rapidement; je suis comme le maçon qui porte des pierres. En deux mots, l'impression en est à la 75^e feuille in-4^o, c'est-à-dire à la page 600; j'ai 62 feuilles de tirées et 13 en main. Malheureusement ces 13 feuilles sont suspendues par la maladie du correcteur, et elles emploient une masse si considérable de caractères qu'on est obligé d'en fondre pour moi. Tout cela est un peu long. Tu peux juger par là que l'ouvrage sera de dure digestion. J'espère ne pas dépasser 700 pages, cependant il ne faut jurer de rien...” (“ *Lettres Burnouf* ”, p. 432: Lettre No. CLVI à Émile Burnouf).
- 161) “ Observations sur la langue des morceaux versifiés du Saddharma pundarika ” (“ *Papiers Burnouf* ”, p. 60 f.: ‘ Catalogue ’ No. 62; cf. “ Avertissement ” de Jules Mohl ad *Lotus*, p. III: “ Notice... ” de Saint-Hilaire ad Introduction (1876^e), p. XXVI: ‘ Cinquième classe des manuscrits, bouddhisme du Népal ’, 4^o).
- 162) “...Le livre dont je m'occupe en ce moment est la traduction française d'un des ouvrages buddhiques sanscrits du Népal découverts par M. Hodgson, et dont il a envoyé plusieurs volumes à Paris et à Londres; le titre est: *Saddharma Pundarika, le Lotus blanc de la bonne Loi*. Je compte paraître au commencement de l'année 1842. Je vous en enverrai un exemplaire aussitôt que je l'aurai terminé.” (“ *Lettres Burnouf* ”, p. 327 f.).
- 163) “...Je suis, depuis bien des mois, absorbé dans mon travail sur le Bouddhisme. J'ai imprimé en totalité la traduction française du *Lotus de la bonne loi*; il manque encore les notes, qui sont presque achevées en manuscrit, mais que des lectures futures doivent sans doute augmenter...” (“ *Lettres Burnouf* ”, p. 346).

- 164) "...Le Lotus avance bien doucement, à cause des travaux dont l'Imprimerie est accablée par l'Assemblée; mais tu connais ma manière: je ne me press jamais, et je vais toujours, ce qui fait que, sans reproche, aucun orientaliste français n'a encore autant publié; je ne dis que matériellement..." ("Lettres Burnouf", p. 427 f.: 21 janvier 1851).
- 165) *The Content of Indian & Iranian Studies*. An inaugural lecture delivered on 2 May 1938 by H. W. Bailey (Cambridge at the University Press, 1938), p. 34 f.: "What of the future of these studies?For the Jaina and Buddhist books only a beginning has been made. Critical editions have been more particularly difficult for the Buddhist works, since they are preserved in many languages."

補注

補注(一)

Cf. e.g. *Indian Records Series-Fort Williams-India House Correspondence and other contemporary papers related thereto (Public Series)*, Volume XIII: 1796-1800, edited by P. C. Gupta (General Editor: K. D. Bhargava) (Published for the National Archives of India by the Manager of Publications, Government of India, Delhi, 1959), p. 233 b (also p. 544: note 10 on Colebrooke's work).

コールブルックの生涯については、彼の息子による恰好の伝記がある:

The Life of H. T. Colebrooke, by his son Sir T(homas) E(dw)ard Colebrnne (London: Trübner & Co., 1873), xi, 492 pp., 1 frotisp., 1 map.

彼の著作集も二点あって便利である。いずれもビュルヌーフの在世中に出版されているので、当然ながら参照している。一点はフランス語訳もある:

H. T. Colebrooke, *Miscellaneous Essays*. 2 vols. (Madras: Higginbotham & Co., 1872; reprint of the 1837 London Edition); also reprinted with a title *Essays on History, Literature and Religions of Ancient India (Miscellaneous Essays)* (New Delhi: Cosmo Publications, 1977), (viii), 443 pages; (viii), 563 pp.

[Cf. New edition (in 3 vols.) with notes by E. B. Cowell and the life of the author by his son T. E. Colebrooke (London 1873)].

—, *Essays on the Religion and Philosophy of the Hindus* (Delhi-Varanasi: Indological Book House, 1972), (iv), 325 pp. (index on pp. 307-325); a second Indian reprint (New Delhi: Ashok Publications, 1978), (iii), 306 pp. (no index).

[Cf. New edition (London 1858)].

フランス語にも、名のある学者によって翻訳・紹介されている。

Essais sur la philosophie des Hindous, par M. H.-T. Colebrooke, Esq. Traduits de l'anglais et augmentés de textes sanscrits et de notes nombreuses, par G. Pauthier (Paris: Firmin Didot, 1833), VII, 190 pp.

補注(二)

ポップが畏友フンボルトに献呈した書を挙げておこう。ビュルヌーフがパーリ語の研究で新分野を開拓した頃である:

Franz Bopp, *Ausführliches Lehrgebäude der Sanskrit-Sprache* (Berlin: Gedruckt in der Druckerei der Königl. Akademie der Wissenschaften bei Ferdinand Dümmler, 1827), XVI, 360 pages, Tafeln.

{“Seiner Excellenz dem Königlich Preussischen Geheimen Staats-Minister Herrn Freiherrn Wilhelm von Humboldt ehrerbietigst gewidmet vom Verfasser”}

ビュルヌーフが、鶴首して待っていた書も著わされる:

Franz Bopp, *Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinschen, Lithauischen, Altslawischen, Gothischen und Deutschen* (Berlin bei Ferdinand Dümmler, 1833-1835), XVIII, 288 pages; VIII, 289-488 pages.

改訂版も相次ぎ (第三版: 1868-1870-1871), 直ちにフランスにも紹介される。さらに, 原著者の死後になって精緻きわまる仏訳が出る:

Grammaire comparé des langues indo-européennes comprenant le sanscrit, le zend, l'arménien, le grec, le latin, le lithuanien, l'ancien slave, le gothique et l'allemand, par M. François Bopp. Traduite sur la seconde édition et précédée d'introductions par M. Michel Bréal. Deuxième édition (Paris: Imprimerie Nationale, 1875-75-76-78-74), (iii) LVIII, 458 pages; (iii), XXXVIII, 429 pages; (iii), LXXXIV, 432 pages; (iii), XXXII, 427 pages; (V), 229 pages.

[Tome V: Registre détaillé, rédige par M. Francis Meunier].

ポップの業績は, 当然ながら上に挙げた著書だけに止まるわけではない。仲々入手しにくい学士院出版論文を集めた次の書物は, 有り難いし, 便利であるので, 引用しておこう。幸いに覆刻されて, 入手しやすくなった:

Franz Bopp - Kleine Schriften zur vergleichenden Sprachwissenschaft. Gesammelte Berliner Akademieabhandlungen 824-1854. Mit 2 Tafeln:

Unveränderter Nachdruck (= *Opuscula: Sammelausgaben seltener und bisher nicht selbständig erschienener wissenschaftlicher Abhandlungen*, V) (Leipzig: Zentralantiquariat der Deutschen Demokratischen Republik, 1972), VIII, 668 pages.

次著は, ポップの研究者にとっては興味あるに違いない:

Franz Bopp, *Analytical Comparison of the Sanskrit, Greek, Latin and teutonic Languages, showing the original identity of their grammatical structure*. Newly edited, together with a biobibliographical account of Bopp by J. D. Guigniaut, an introduction to *Analytical Comparison* by F. Techner, {and} by E. F. K. Koerner with a new preface and an index of authors (= *Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science*, Series I: *Amsterdam Classics in Linguistics, 1800-1925*, Vol. III) (Amsterdam: John Benjamins B. V., 1974), xxxviii, 68 pages, 1 frontispiece (portrait of Bopp):

"Preface" to the New Edition, by E. F. K. K (oerner), pp. vii-xiii.

Joseph Daniel Guigniaut, "Notice historique sur la vie et les travaux de François Bopp", pp. xv-xxxviii.

[Reproduced from *Mémoires de l'Académie des Belles-Lettres* 29: 1, 201-224 (Paris, 1877)].

Franz Bopp, "Analytical Comparison of the Sanskrit, Greek, Latin, and Teutonic Languages, showing the original identity of their grammatical structure (1820)", pp. 14-60.

["Vorwort des Herausgebers (Friedrich Techner (1889))", pp. 3-13].

"Wilhelm v. Humboldt an F. Bopp über ANALYTICAL COMPARISON (Berlin, den 4 ten Januar 1821)", pp. 61-66.

補注(三)

(1) *Université de Paris-Institut de Civilisation Indienne, 1933-1935* (Paris, s.d.), 57 pages, incl. 8 photos (en 7 pages): "Sylvain Lévi: 28 mars 1863-30 octobre 1935", pp. 15-57.

この年に, 実は, フィノが, 5月16日に他界しているが, ほとんどの頁をレヴィに費やしている。レヴィというと決まって誰しもが見る写真も口絵にあるが, インドではインド服, 日本では和服(レヴィの紋付袴姿!)を着た夫妻や, ネパールではネパール服を娘さんと共に着た写真などもあり, 誠に珍しい。当時のパリ大学文学部インド学研究所の理事会の顔触れのそうそうたることにも驚く:

J. Bacot, E. Benveniste, J. Bloch, A.-M. Boyer, H. Delacroix, A. Foucher, J. Hackin, P. Masson-Oursel, A. Meillet, J. Przyluski, L. Renou.

このほかに講義を持つ人に、N. Stchoupak, M. Lalou 両女史の名も見られる。すでに、これまたそうそうたる面々で、レヴィの小論文集の綿密な企画が公表されている(同書53~57頁:下記(3)参照)。

(2) *Bulletin de la Maison Franco-Japonaise*, tome VIII (année 1936), Nos. 2-4, Première partie: *Sylvain Lévi et son oeuvre* (Paris-Tokyo 1937):

Junjirō Takakusu, "Sylvain Lévi", pp. 17-21;

Alfred Foucher, "Lettre sur Sylvain Lévi", pp. 22-28;

Joseph Hackin, "Sylvain Lévi et le Musée Guimet", pp. 29-49;

Paul Demiéville, "L'Extrême-Orient dans l'oeuvre de Sylvain Lévi", pp. 50-62.

(3) *Mémorial Sylvain Lévi* (Paris: Paul Hartmann, 1937), LI, 437 pp., 1 frotisp.

(4) Louis Renou, "Sylvain Lévi et son oeuvre scientifique", *Journal Asiatique*, CCXXVIII (1936), pp. 1-59.

=*Mémorial Sylvain Lévi* (1937), pp. XI-LI.

(5) *Hommage à Sylvain Lévi pour le centenaire de sa naissance (1963)*: Conférence par Luciano Petech, Étienne Lamotte, Paul-Émile Dumont [Institut de Civilisation Indienne] (Paris: E. de Boccard, 1964):

Ph. Stern, "Sylvain Lévi: L'Homme", pp. 9-12;

L. Petech, "Les études d'histoire népalaise après Sylvain Lévi", pp. 13-30;

L. Renou, "L'oeuvre de Sylvain Lévi", pp. 31-34;

E. Lamotte, "L'oeuvre bouddhique de Sylvain Lévi", pp. 35-52;

J. Filliozat, "Diversité de l'oeuvre de Sylvain Lévi", pp. 53-56;

P.-E. Dumont, "Le primitivisme dans l'Inde ancienne", pp. 57-70.

(6) "Rétrospective: L'oeuvre complet de Sylvain Lévi-'Bibliographie', par M. Mascino, 'Index', par N. Stchoupak", *Bibliographie bouddhique*, VII-VIII (mai 1934-mai 1936) (Paris 1936), pp. 1-64.

(7) 前嶋信次の前掲書「インド学の曙」(1985年), 99~189頁:『シルヴァン・レヴィと日本』は、例によって非常に面白い。[「大法輪」昭和25年7月~11月所収が初出]。

(8) 高楠順次郎, 「シルヴァン・レヴィ博士のおもいで」『ビタカ』第3巻12号(昭和10年12月), 39~45頁。

これが、シルヴァン・レヴィ(著)・山田龍城(訳): 仏教人文主義(=人間の科学叢書)(東京・人間の科学社, 1973年), 148~156頁に再収され、訳者が辻直四郎の援助を得て、レヴィの業績などについて詳しい註を施している(註: 240~246頁; あとがき, 247~249頁)。

このほかに、高楠はほかにも同工異曲の追悼文を、二三の雑誌に書いている:

武蔵野女子学院大学(編); 雪頂・高楠順次郎の研究——その生涯と事蹟(東京・大東出版社, 昭和54年)「年次別著書論文目録」(163~224頁)の内とくに206~207, 212頁参照。

(9) Jean Philippe Vogel, "Levensbericht van Sylvain Lévi", *Jaarboek der kon. Akademie van Wetenschappen van 1935-1936* [未見]!

(10) レヴィの第二回目のインド訪問(1921年11月1日から次年の10月13日)については、夫人が微に入り細に入った旅行記を残してくれている。レヴィの業績に関心のあるものにとって貴重な資料であろう:

D. Sylvain-Lévi, *Dans l'Inde (de Ceylan au Népal)* (Paris: F. Rieder et C^{ie} 1926), 214 pages.

追 補

19世紀中半に、東洋の宗教・思想に関心を抱き、エマソン(Ralph Waldo Emerson: 25. V. 1803-27. IV. 1882)などと並んで、アメリカの思想界に大きな影響を与えた一群の思想家の一人として名を馳せたソー(Henry David Thoreau: 12. VII. 1817-6. V. 1862)が、ビュルヌーフの法華經の菓草喩品の訳を参照していたらしいというのである。

つまり不思議にも、ビュルヌーフが生前に、菓草喩品の訳を公刊していたのである。これが実に不思議

議な事に、その仏訳前書きにビュルヌーフの訳としているが彼の文章とは思えない。また、詩の部分の前半・後半が逆に印刷されていたりしている。さらに不思議にも、これは、今日までに私の知る限り、全く記録されていないものである。毎月10日と25日に出る雑誌 *Revue Indépendante* に、“Fragments des Prédications de Buddha” と題して発表されている (520-533頁)。1843年か45年のとある月らしい。という事は、上に述べたように、ビュルヌーフの仏訳全巻の印刷も済んでいたのである。誰が何を思って、これを出版したのであるのか？因みに、彼の死後に発刊されたものは、前書きに編者の名が見られるので事情が判るのである。例えば、J. M. とあれば、Jules Mohl が整理したに相違ないという風に。

この貴重な資料を知らせて下さったソローの研究者・三輪久恵女士に心から感謝したい。彼女によれば、種々の問題が山積しているようである。印度学仏教学史を研究するものにとっても、重大な関心事である。

主要関係享年表

略号：*誕生 / +死亡

- 1731 : *Abraham Hyacinthe Anquetil Duperron (7. XII. 1731-17. I. 1805)
 1732 : *Warren Hastings (6. XII. 1732-22. VIII. 1818) = 初代ベンガル総督 (1773-1785)
 1746 : *William Jones (28. IX. 1746-27. IV. 1794)
 1758 : *Antoine Isaac Silvestre de Sacy (21. IX. 1758-21. II. 1838)
 1762 ? : *Alexander Hamilton (1762 ?- 30. XII. 1824)
 1763 : *Louis-Mathieu Langlès (23. VIII. 1763-28. I. 1824)
 1765 : *Henry Thomas Colebrooke (15. VI. 1765-10. III. 1837)
 1767 : *Karl Wilhelm von Humboldt (22. VI. 1767-8. IV. 1835)
 *August Wilhelm von Schlegel (5. IX. 1767-12. V. 1845)
 1772 : *Friedrich von Schlegel (10. III. 1772-21. I. 1829)
 1773 : *Antoine Léonard de Chézy (15. I. 1773-3. IX. 1832)
 1775 : *Jean-Louis Burnouf (1775-1844) [= ユージェーヌ・ビュルヌーフの父]
 1777 : *Nicolas-Christophe Poiret (1777-1866) [= ユージェーヌ・ビュルヌーフの義父]
 1779 : *Isaak Jakob Schmidt (Amsterdam 14.X. 1770 -St. Petersburg 8. IX. 1847)
 1778 : バタヴィアのオランダ東インド会社に「学会」(Bataviaasch Genootenschap) 創立
 1783 : *Helmia de Chézy *Alias* Wilhelmina Christiane von Klencke (26. I. 1783-28. II. 1856)
 *Heinrich Julius Klaproth (11. X. 1783-28. VIII. 1835)
 1784 : 大英帝国インド植民地首府カルカッタに「アジア協会」(Asiatick Society of Bengal) 創立
 *Körösi Csoma Sándor = Alexander Csoma de Körös (4. IV. 1784-11. IV. 1842)
 1785 : *Jacob Grimm (4. I. 1785-20. IX. 1863)
 1786 : *Wilhelm Grimm (24. II. 1786-16. XII. 1859)
 *Hosace Hayman Wilson (26. IX. 1786-8. V. 1860)
 1788 : *Jean Pierre Abel-Rémusat (5. IX. 1788-3. VI. 1832)
 1791 : *Franz Bopp (14. IX. 1791-23. X. 1867)
 1794 : *Joseph Héliodore Sagesse Vertu Garcin de Tassy (20. I. 1794-2. IX. 1878)
 1795 : 法令 (1975年3月30日付) により「現代東洋語専門学校」パリに創立
 1796 : 「現代東洋語専門学校」正式開学 / *Adminisrateur* : Louis-Mathieu Langlès
 1799 : *Stanislas (*alias* Noël) Julien (20. IX. 1799-14. II. 1873)
 1800 : *Brian Houghton Hodgson (1. II. 1800-23. V. 1894)
 *Christian Lassen (22. X. 1800-8. V. 1876)
 *Jules/Julius von Mohl (25. X. 1800-4. I. 1876)
 1801 : *Eugène Burnouf (12. VIII. 1801-28. V. 1852)
 *Jean Pierre Guillaume Pauthier (1801-1873)

- 1801 : ハストファー男爵夫人 (=Wilhelmina von Hastfer (née von Klencke)) パリ到着
- 1802(?) : *Reine-Victoire-Angelique Poiret [=ユージェース・ビュルヌーフ夫人]
- 1802(?)—1803 : ハミルトン (Alexander Hamilton) のパリ滞在
- 1803 : *Georg Heinrich August Ewald (16. X. 1803-4. V. 1875)
- 1805 : *Jules Barthélemy-Saint Hilaire (19. VII. 1805-24. XI. 1895)
ドゥ・シェズィ (de Chézy) とヴィルヘミーナ・フォン・クレンケ (Wilhelmina von Klencke)
結婚
- 1809 : *Theodor Benfey 928. I. 1809-26. VI. 1881)
- 1810 : シェズィ夫人=夫君と離別してドイツに帰国
- 1812 : フランツ・ポップ (Franz Bopp) パリ着/シュレーゲル兄 (A.W. von Schlegel) の知遇を得る
- 1813 : Francis Rawdon Hastings, 1st Marquis of Hastings, Earl of Moira (9. XII. 1754-28. XI. 1825) = 第九代ベンガル総督に就任 (1813—1823)
- 1814 : *Edward Elbridge Salisbury (6. IV. 1814-5. II. 1901)
[Professor of Arabic and Sanskrit at Yale (1841-1854)]
(29. XI. 1814) : コレージュ・ドゥ・フランスに「インド学」・「シナ学」講座開設令発布
(11. XII. 1814) : コレージュ・ドゥ・フランスに「インド学」・「シナ学」両講座正式発足
Indologie : Antoine de Chézy/*Sinologie* : Jean Pierre Abel-Rémusat
シュレーゲル兄=ドゥ・シェズィの許で梵語学習開始
- 1818 : ホジソン・大英帝国外交官としてインドに赴任
*初代ベンガル総督 (1773-1785) ヘイスティンクス Warren Hastings (1732-1818)
- 1820 : ホジソン=ネパール国駐在弁理公使補佐 (Assiatnt Resident) として着任
- 1821 : Emile-Louis Burnouf (26. VIII. 1821 - milieu janvier 1901)
- 1822 : パリに「アジア協会」(Société Asiatique (de Paris)) 創立/*Président* : Silvestre de Sacy
- 1823 : *Joseph Ernest Renan (27. II. 1823-2. X. 1892)
*Friedrich Max Müller (6. XII. 1823-28. X. 1900)
William Pitt Amherst, Earl Amherst of Arakan (29. I. 1773-13. I. 1857) = 第十代ベンガル
総督に就任 (1823-1828)
- 1825 : *Albrecht Weber (17. II. 1825-30. XI. 1901)
- 1826 (27. IV. 1826) : ビュルヌーフ子「アジア協会」書記補に就任
(25. IX. 1826) : ビュルヌーフ子とブワレ嬢 (24歳) 結婚
- 1827 : *William Dwight Whitney (9. II. 1827-7. VI. 1894)
- 1828 : Lord William Cavendish Bentinck, 4th Earl of Portland (20. VII. 1774-17. VI. 1839) = 第
十一代ベンガル総督に就任 (1828-1833) / 初代インド総督に就任 (1833-1835)
- 1829 : ビュルヌーフ子=師範大学 (École Normale) 一般言語学・比較言語学担当教授就任ホジソン
ネパール国駐在弁理公使代行 (Acting Resident) に昇進
- 1830 : *Henri Léon Feer (22. XI. 1830-10. III. 1902)
- 1832 : 疫病コレラヨーロッパを席捲/*Chézy et Rémusat*
ビュルヌーフ子=コレージュ・ドゥ・フランス印度学講座担当教授に就任
ビュルヌーフ子=「アジア協会」書記 (=事務局長) に就任 (3. IX. 1832)
ジュリアン=コレージュ・ドゥ・フランスのシナ学講座担当教授就任
ビュルヌーフ子=フランス学士院会員に推挙される
*Charles Joseph de Harlez (1832-1899)
- 1833 : ホジソン=ネパール国駐在弁理公使 (Resident) に昇進
*Johan Hendrik Caspar Kern (6. IV. 1833-4. VII. 1917)
- 1834 (7. VII. 1834) : ビュルヌーフ子=初めてのカタマンドゥのホジソンに書簡を認める
ビュルヌーフ子=ドイツの旅に出る

- 1835 : ビュルヌーフ子—ロンドン・オックスフォードを訪問
Baron Charles Theophilus Metcalfe (30. I. 1785-5. IX. 1846) = 臨時インド総督に就任 (1835)
George Eden Auckland, *Earl of Auckland* (25. VIII. 1784- 1. I. 1849) = 第二代インド総督に就任 (1835-1842)
- 1836 : ビュルヌーフ父 (Jean-Louis Burnouf) = フランス学士院会員に推挙される
- 1837 : 「東洋学誌」 *Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 発刊 (Göttingen) (Bonn 1850-)
- 1837 : (4月20日頃) ホジソンから最初の梵語仏典写本 (法華經を含む) がパリに届く / (4月25日頃) 直ちに法華經翻訳開始 (ホジソン宛6月5日付書翰による)
- 1838 : ビュルヌーフ子 = 国立印刷所東洋部監督官に就任
- 1839 : ビュルヌーフ子 = 法華經翻訳完了 (ホジソン宛11月29日代書翰による)
- 1840 : *William Wilson Hunter (15. VII. 1840-6. II. 1900)
- 1841 : ビュルヌーフ子 = 法華經翻訳書印刷完了 (ホジソン宛10月28日付書翰による)
- 1842 : Edward Law, *Earl of Ellenborough* (8. IX. 1790- 22. XII. 1871) = 第三代インド総督に就任 (1842-1844)
- 1844 : ホジソン = 弁理公使辞任 (解任?)
Sir Henry Hardinge, 1st *Viscount Hardinge of Lahore* (30. III. 1785-24. IX. 1856) = 第四代インド総督就任 (1844-1848)
- 1844 : ユージェーヌ・ビュルヌーフ = 「印度仏教史序説」を父君の死後に献呈・公刊
- 1845 : (3月~6月) マックス・ミュラー = パリに滞留 / ヴェーダ文献についてユージェーヌに師事
ドイツ東洋学会 (*Die Deutsche Morgenländische Gesellschaft*) 創立
- 1847 : *Emile Charles Marie Senart (26. III. 1847-21. II. 1928)
- 1848 : James Andrew Brown Ramsay Dalhousie, 1st *Marquis & 10th Earl of Dalhousie* (22. IV. 1812- 19. XII. 1860) = 第五代インド総督に就任 (1848-1856)
- 1852 : (5月28日) : ユージェーヌ・ビュルヌーフ逝去
ユージェーヌ・ビュルヌーフの死後すぐに「法華經」のフランス語訳出版される
- 1854 : (12月5日 [火] ~23日 [土]) — 「ユージェーヌ・ビュルヌーフ文庫」競売に付される
- 1879 : 笠原研寿・南条文雄 = ロンドンからオックスフォードのマックス・ミュラーの許に到着 (2月27日)